



091307-000-9

特43-68

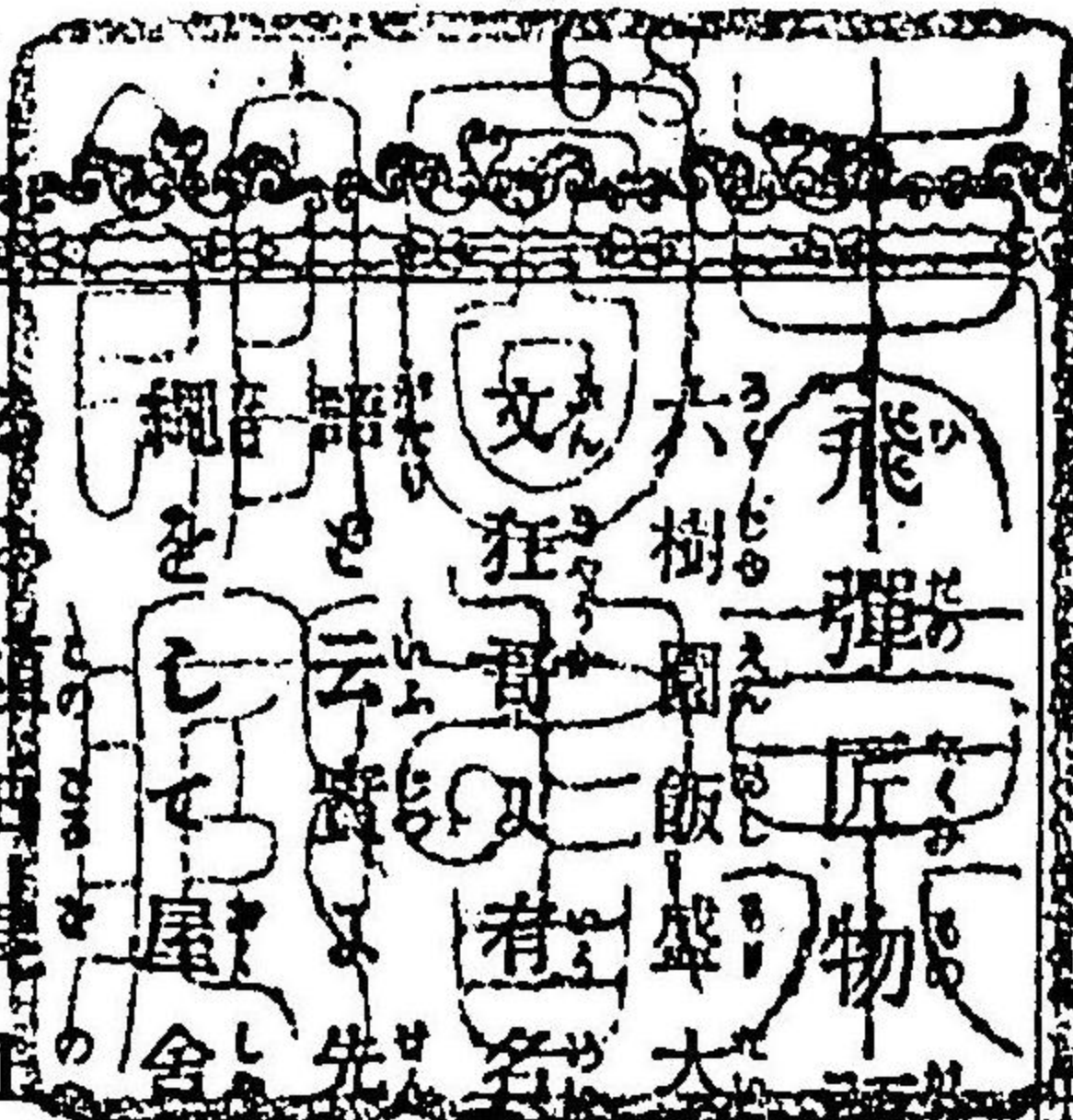
斐陀匠物語

菅花堂

M17

DBN-2185





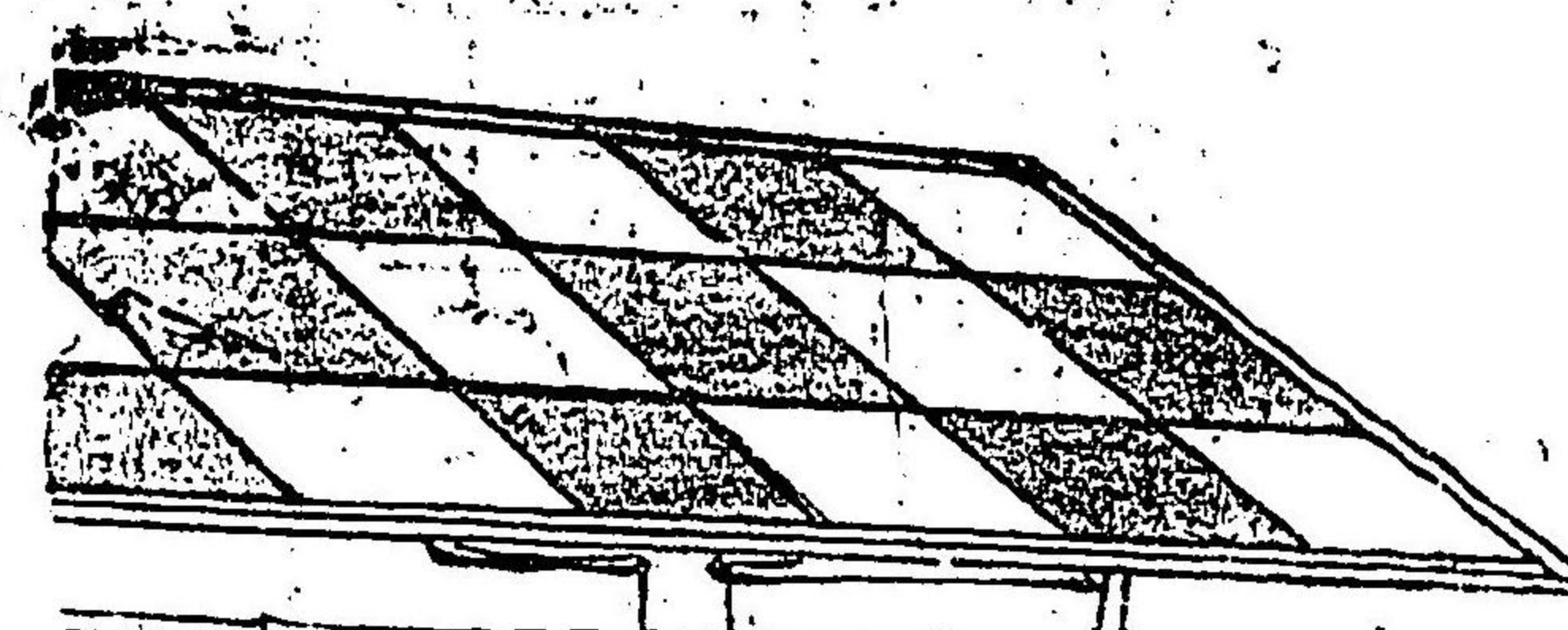
序詞

人通稱石川雅望先生は和漢の學よ長じ殊に和
 なるが一日戯れに稗史を編み号して飛彈匠物
 生が平常詩哥の財量溢れて此書を爲すもの墨
 を營しむると一般定み特絶れ構造と云可し然
 梅幸之を新富の劇場に演し頗る好評を得ると
 聞き例の閨花堂主人原本の假名文字と小説体の熟字と代へ
 全部六巻を約て一冊と爲んと余も營繕と命す余の不敏ある
 其任に適せずと堅く辞するも免さず依てばつゝ管城子
 下し明りも金玉も傷くるに識と醸す事と成ぬ

甲申十一月

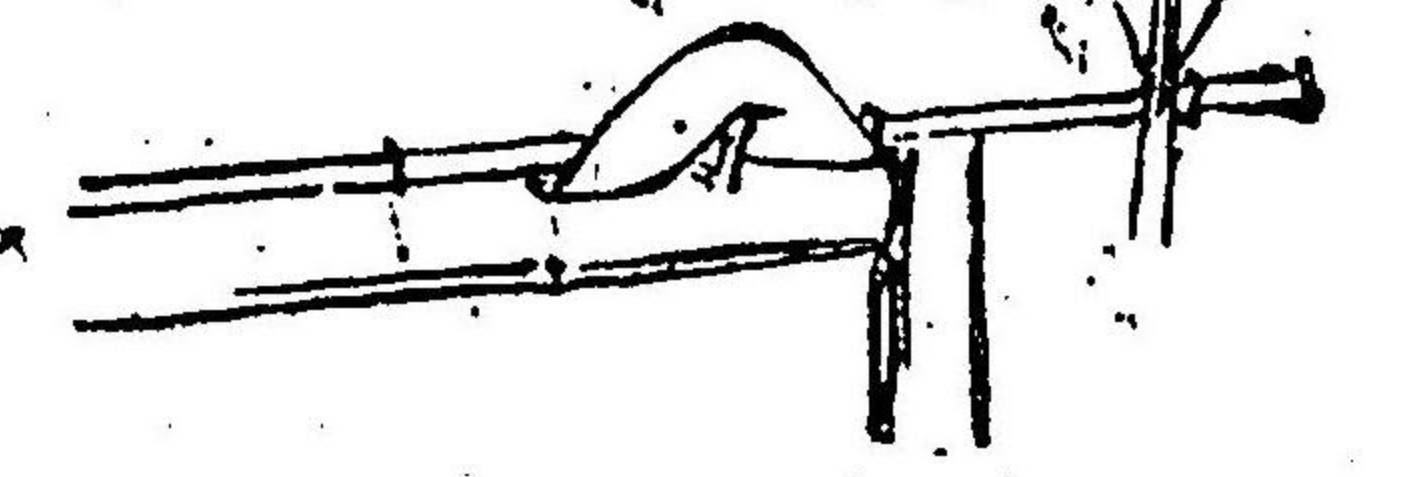
銀街處士

柳葉亭繁彦識



飛田匠物語
 十有月十八日

蘭華堂主人





斐陀匠物語卷之一

○すみなは

斐陀の匠とは人登人の名よの非ず古昔飛彈國よりの庸調を奉らす里毎匠丁十人を出して公に造營を勤め營みし也貞觀の比は一國より百人を召れて朝堂院神泉苑坏作らせ給へる事國史に載たり今茲に記しつるの許多有し飛彈國の中は優て機巧ふ妙よして其術神よ通じて天地造化の不可思議あるをも只雕鑿の上に出し木頭と以て鳥となし板片を以て馬を作りて一世の人を驚せし賢き匠夫が物語なり其時代の確は聞傳す何の事時よか有けん斐陀國よ猪名部の墨繩と云者有けり父母の疾く失りて自個一人を住ける此國は習俗なれば耕耘餘暇にの鋸鑿を取て只管工匠の業を習ひけるが人は優れて愛度作り爲ければ老工の輩も悉く感服して眞の良工也と賞賛ける墨繩益々精神を凝し修練しければ今は左右無き此道は親と成ぬ或の鶏を作ら眞れ鶏之を見て兩翼を廣げて飛懸り鼠を作れば猫來つて之と取り杯して千般妙なる事共有ければ遠近を云ず人之を慕ひて調度玩物の具杯注文物する者門前よ市を爲ける然ぞ心曲る者亦權勢を以て索る者よは弗も答辭たよ爲す貧人老夫杯の乞る

よの臆て云儘よ作りてぞ與へける其頃郡司よて紀武俊と云者あり慈悲の心無く財を貪りて常よ農民を掠め蔑りて擅よぞ振舞ける此武俊酒を好て飲ければ盃一ツを墨繩よ付托作せん迎從者を以て云か越ける墨繩常よ彼が悪行を惡く居ければ頼にも作ず日を過しけるに武俊立腹て此小冠者め郡司をも憚らず然輕侮体よ舉動社奇怪なれ迎從者共よ言付て疾擲めて來よと命令て遣つ從者等墨繩が門の前よ到りつ大聲よ云ける郡司の召るよぞ疾出よと聲くよ呼びければ弗も答へざれば鞋の儘床よ駈登りて障子引明て入んと爲よ奈よ作り置けん障子推明ると其儘從者共が踞居る疊床共よ逆よ覆りて五人の從者共悉く床の下に落入ぬ床の下に深く穴よ堀て有ければ登る可き様も無く始め勢ひよも似ず大よ畏れ墜きて空よ仰ぎて言けるの我儕無禮を致せしは皆郡司の命令よて候争で命助け給へんと聲々よ喚く其時墨繩が聲よて驟々と策て階子を下しければ之よ取着て上り來て皆々墨繩が前に手よ着て云けるの涉身郡司の許よ詣り給はず我儕此上よ奈なる目さか見候はん衷れ涉疾よ彼所よ詣り給ひて我儕が愛目見んを救へせ給へと言は墨繩が曰く我の往じと思へど其方達の云所心苦しけれは然らば往てん迎先に立て歩は從者等の悦びて後に立て行く郡司はひりよ立居て

墨繩を見て眼を大くなし額筋を出して白眼も墨繩静も坐も着て何事の候て斯火急は召
 れつるぞと言ハ郡司敦圀て我依托遣し孟月を經共作り出す汝郡司をバ奈なる者と思ひて
 左様は輕蔑体は舉動ぞ去和奴が面貌打割て腹を癒迎づか〜と寄んとす墨繩懐るより包
 みたる物取出て打捧げて索させ給ふ孟の之候自個も恥見せ給は孟此所よて打遣捨候
 なんと言ハ郡司少し顔を治して儲の孟ハ疾作れりとや然ハ其作る料ハ此一舉ハ免し遣ハす
 也と言て孟手に取て重て我命令ん事を等閑ハ物セバ目ハ物を見せんずるぞ今ハ用なし疾販
 れと言て墨繩を遣出し遣て孟を能々見て天晴微妙作りてけりと手も離たず見て居たるハ折
 柄隣ハ郡の郡司の入來りけるを出居ハ通して物語して後彼孟取出て是ハ今日始て得たる物
 よて候是よて酒一献參らせん迎馳て酒取出して薦むとて先づ自個孟手ハ取て女童よつがせ
 けるハ奈なるよか此孟俄ハ重くなりて不圖手を放て落しけれハ女童を打叱りつ、又孟を手
 ハ取て酒つがせけるハ石杯を持たらん心地せられて得持ハ堪で又打傾けてけれハ酒浮騰て
 疊皆濡ぬ客なる郡司も驚きて同く取上て酒つがするハ孟傾とて酒ハ皆翻ぬ左右の手ハ持て
 酒よつがせけれ酒を入れば孟自個と逆轉ぬ力量を手ハ入て争で傾げじと構ふれ共大力

此人來て惹うなぐる様なる心地爲れて幾回も逆ハ轉覆けれハ主客も只呆れに呆れてぞ
 居たりける郡司大ハ腹を立て彼奴我を睨じて如斯物作りて與へつる惡さよ奈ハ郎黨共彼捕
 て來よと云ぞ初度ハ懲りたれハ皆尻込して行者なし客の郡司が云るハ我ハ良策あり彼
 機關を以て誇り居ハ此方も又彼ハ敵す可き者を出して彼を試つ可し吾郡ハ槍前松光と云者
 候此國ハ比肩者無き良工なれば彼と請て墨繩ハ逢せて其勝負を試し給へ墨繩負たらんハ
 ハ彼が造作の具を奪ひて此後工の職を停止給はんハ彼が爲にハ限無き恥ハ候ハんと云ハ
 郡司悦ひて然ハ疾松光を誘ひて來給へと契りて其日は別れぬ一日を過して隣ハ郡司一人の
 男を將て來つ打見れハ手斧頭よて揆槌頭あり齒ハ鋸ハ似て鼻ハ鉄槌ハ如し實ハ天骨を得た
 る道の首長とハ見えたり郡司悦びて争で墨繩ハ負を取せて恥見せて給へと云ハ松光冷笑て
 凡そ天下ハ自個に優る工有とも存じ候ハず其墨繩め疾く名ハ聞及びて候得共未だ對面ハ仕
 らず候仰せ無く共出會さば面辱かへせて候ハんと豫て存て候ハハ幸の折よて候ハ脇を搔
 て云然ハ諸共ハ迎立て行墨繩が許ハ詣りて見れハ厨房めく軒ハ離れて作りて別ハ細少家
 造りて住居春の事なれば庭の樹共花咲て景色好しさまで物好せる家居あらぬと今様しく造

營たり案内すれは墨繩立出て一禮して伴ひて入ぬ隣の郡司墨繩に對て云けるの之なるの檜
 前松光迎 我近傍お住る者なり足下と業を同うすれば對面よ入ん迎伴ひ來つと云墨繩偕
 の同職れ人よて在しけるかとて懇ろお應接さて盃取出て寒郷何斗りの佳肴も候はねぞ一獻
 喫飲バやと云バ武俊 懐より墨繩が造りたる盃取出て是よて始められよ迎前お据けれバ墨
 繩自ら銚子取てつぐ武俊目も放たず視居よ常体の盃の如く異なる事も無し飲終りて武俊よ
 献酬を取上れば墨繩起てつぐよ聊か酒翻す常の盃よ違つづ武俊墨繩お對て此盃先般よ贈ら
 れし時酒をつげバ忽ち覆りて酒を翻ぬ奈なる事よと問バ墨繩争て然事候はんと答て
 空知ぬ面を作れば武俊云事無て止め偕人々交代引請て飲程松光進出て云けるの工匠の業
 の家造るを以て第一との爲也足下よの機關と以て人の目を驚らし給ふと聞く愈々然様よや
 と云ば墨繩打笑て宣ふ如く機關の小技あり然ぞ家と造ん事ハ甚だ易し奈なる大家高堂なり
 共曲尺の上を出され心を未練の人も能之を造る機關の小刀を以て爲ども曲尺を離れて作り爲
 れず尋常の拙工の類ハ爲得る事難かる可しと言松光が曰く自個も小刀の細工ハ人よ負可し
 共覺へ候はず今日此處よ參りて候ハ足下と匠の道を競て負たらば方ハ此後弟子と成て仕る

可く存て候奈よ試て見給はんやと云バ墨繩が曰人よ 競争はんハ自個が好處よ候はず此義
 よ於てハ免し給はる可しと言松光意よ思ひけるの偕ハ彼奴自個よ及ざるを計り知て謙退よ
 假托て勝負と逃れんと爲なりと思ひて又云けるハ且ハ替古ハ爲も候へバ只管互ひよ手練
 れ程と競度候と言二人の郡司も共々催せバ墨繩詮方無て然バ仰よ任せてん何事を爲て勝負
 を定む可と云ば松光懐ろより木以て作る蟹を取出して言けるハ是ハ自個多年思慮を積て調
 製る物ありと言さま蟹の腹ある扭の如き物を能く捻て疊れ上よ置ば此蟹足を動して走る事
 宛然生たる物の如く郡司等興よ入て褒れを松光誇顔して此蟹よ競ぶ可き物作り給バ見せ給
 へと言墨繩我も都人の所望よ依て蟹を作りて候見せ參らせん速函一個取出して松光が前よ
 置つ松光蓋を取ハ蟹自と躍り出て走る人々目を注て見れば此蟹壁を這登りて泡を吹鉄を上
 げつハ天井を逆よ這て傳行く少遷有て又壁を傳ひ下りて疊の上を走る墨繩箱を取て蟹の
 前よ差付れバ躍りて箱の裡へ飛入つ偕蓋を覆て取納めければ二人の郡司等吃驚く事大方な
 りず松光 初度よ負ぬれば少し赤面したりけるが減ぬ体よて云けるハ機關ハ小兒の玩具な
 れば工なるも世よ用なし之を見給へ迎衣よ包たる物を取て打披けバ舞樂の蘭陵玉の面を

り見より恐ろしく身毛泡立て郡司等再回面を向す墨繩打見て寔に能く作れたり自個も戯れよ
 先よ作置たり物候迎之も衣よ包たる物を取出て紐解て打明たれば只今切たると覺る齡五
 十斗りを見る女の頭なり何とやうん血臭き心地とへ爲バ郡司等ハ見だよ遣す他方を向て居
 り松光手よ取上て見て是ハ作る物との覺へ候はず正敷女の頭ハ候ハん何れより取出給ひし
 あな思々しと云て差置ければ墨繩が曰く素來眞の頭よてハ候ハず自個が作る處なり裡ハ虚
 よて鈴を入置たれば振て見給へと云よ取上て打振見れば鈴ハ音ころ〜と鳴ければ始て作
 る物との知ぬ松光然斗り張魂なる男なれ共此細工に驚きて迎も我此者の上よ立難しと思
 ひんり儲言けるハ此家ハ足下一人して作り給へりや外よ補助造る工匠も候ひきやと問バ墨
 繩が曰く斯斗り細少家一ツ造んよ人の手を借可くも存候はず但し是ハ樓よて常の家よハ候
 はずと言を松光訝て是を樓ありと宣ふハ奈なる事ぞと問墨繩直立て承塵めく所よ在し轄と
 引拔て然バ涉覽せよと言程ハ此家自ら上さまよ昇て地を離る事一丈餘りよ成ければ庭よ植
 たる梢共も目の下よ見る様よ成ぬ郡司ハ更なり松光も膽を消て明たる口を塞ぐ者も無し扱
 も珍敷上手の匠かなと褒思へり儲何の料に斯ハ造り置給ひしと問バ墨繩が曰く是ハ火災を

遊れんとの爲よて候自個が家貧くて人少く候へバ火災有ん時調度衣服ハ類持運ふ可き人モ
 候ハねバ万一近傍よ火出たらん時よハ此家を土の中よ惹入可く造り置て候斯樓の様に
 高やかよ上り行様よ造り候ハ夏の頃涼み取可き爲よ設て候此家夜の造りて近傍人よも
 斯様ハ機關設けたりし事ハ知せず若人知るハ膽膽港來りて見人多かる可く存候て夜ハ
 一人して十日斗りよ造り立て候ひきと言儲も興有るとよ社候へ然ば階下て見せ給へと言
 よ墨繩一人樓を下りて何事を爲よか有ん少選有て然ハ引下て見せ奉らんと言より又此樓靜
 よ下り持行て土中へ入事一丈斗りして止りぬ寔ハ常暗にて古昔の穴居と云ものも斯るよ
 やと覺へけり儲又搖動て昇り行様ハ見えしが觸て尋常ハ家と同等成ぬ松光頭を疊よ打付て
 自個智恵淺く君が百が一よ足ざる才を以て是迄誹謗中して非難中せしハ罪通れんに處無覺
 へ候今より長く御弟子と成て道の修行仕度候と云墨繩打笑ひて自個人を教ふる斗りの才覺
 ハ候はねと然宣ふ上ハ覺悟めたる程の事ハ教へ奉りてんと云郡司武俊も始ハ疾みて來りけ
 るが墨繩が業の巧あるよ心折て寔ハ凡人よハ有ざりけり舌を巻てを飯りける是より後墨
 繩が名愈々世よ響きて人知ぬ者無りけるとぞ

○ほうふいの山

夫より松光の墨繩が許し居て其道の奥有事共を習ひて他事無く頼めて仕へける或日墨繩良材を得ん迎松光を伴ひて山に入けるは道に迷ひて山路深く分け入りけるは絶岸壁立て下千仞も有んと覺へたる谷有る處に出ぬ對岸の僅に三間斗り場てたれど涉り行可き道も無し然るは對岸に年と経たる槓の木立り彼を切取たらんは是は優る良材有じと松光が言ハ墨繩實も我も然思へり去此谷に橋打渡してん迎松光に負せたる包取て引解ハ中も管れ様ある物幾個とも無く入置たり夫を繼合せつれば階子様なる形との成ぬ墨繩彼階子様の物を取て對谷へ向て端の方を投懸ければ一個に架橋との成けり我も續て渡可しと言ハ松光後も立て行ハ大方危き事無し實ハ山路ハ斯る物社用を爲けれ迎松光彌墨繩が用意をぞ賞ける諸打渡て彼槓の下に到りけるは餘りも勞たれば少選樹根ハ尻打掛て休む程彼方よて笛の聲すまり如斯深山ハ何者か入來りけん迎怪み見れば草刈童の十歳斗りあるが籠を脊も負て笛吹鳴しつゝ來り墨繩を見て足下ハ此國の工匠と聞へたる猪名部の墨繩ぬしハ在するよやと云墨繩斯る童の如何で我名を知たるならんと不思議ながら然もて候と言ハ童が曰く此與

山ハ住る人あり足下を俟玉ふ事久考今日此處ハ入來り給はんあれハ自個ハ先行向ひて其由知せ奉れと宣ひき迎笛は端尾して此道より折て行給はゞ只彼所ハ詣り給ひるん自個ハ草を刈て後跡より參らんすれハ伴ひ行難しと云墨繩心得されハ其途見んと宣ふ人ハ奈ある方よかと問ば童先づ彼所に行て其子細の問せ給へと言さして又笛打吹つゝ山を越て行ぬ松光が曰く斯る深山ハ人住可き道理なし一定仙人杯云者なる可しと云何も有れ卒行て見ん迎墨繩先ハ立て行所々ハ熊狼杯居たれど皆耳尾を垂て向ふ事無し諸山を昇り谷を越て行ハ松柏茂りたる中ハ大きな門見ゆ近付て見れば扉ハ黄金を延て作りて瓦ハ玉を以て葺たり墨繩松光と共に驚き見て此山中ハ斯る家居有共聞及ばず迎打詠め居たるは扉自ら開きて翁れ太く老たりと見ゆるが出來り墨繩向ひて主宰和殿を俟給へり卒とて導て入る何とやら恐敷心地爲ぞ導く儘ハ從て入ば中門有り其美麗なる事云べうも有ず松光をば此處ハ有て俟可しと言て墨繩斗りを伴ひて入ぬ出居と思しき所ハ坐して居る奥の方より履の音して出來る人あり頭を擡て見れば髮髭ハ白銀の針を植たる如く見ゆれど容貌ハ廿歳斗りの人の如し黒冠ハ朱れ衣を着たり景容凡人との見ゆざれば墨繩坐し頭を下て拜す主墨繩が側近く

坐して汝恐る、事勿れ此所の東海に蓬萊山なり尋常の人の來り詣る事能はざれと汝仙縁あるに依て今日此處に遇へつと言墨繩愈々畏縮りて居る童子等酒菓杯を手毎に携へ出て墨繩が前より据置主壺に指さして言るは是の人間は所謂不死不老の仙藥なり汝一杯と喫可し言は墨繩恐ろしくも嬉しくて盃を取らば童子壺を傾てつぐ口より寄れば其香氣妙にして人間の酒より異り飲終りぬれば心神自然と爽になり體輕くになりて宛然仙と成る心地せり主言るは汝眞仙と成んよ今七拾年過るを俟可し但し汝が工の道は賢きよ愛て斯呼邀へたり今夜を過しなば汝を飯す可し先づ此方より來れと言て墨繩を誘ひて庭より下て小き門を明て一町斗り往ら彼所より一個の門有て斧の聲銀の聲叫睡く聞ゆ導く儘入て見れば仙人許多集りて材木を扱ひて居り墨繩は何の料も候かど問は主謂らく仙宮の創造はよ永世不朽よ作り替る事無し是の玄々皇帝命有て某より仰せて此度蓬萊宮に別殿を設け造せ給ふなり能注目て人々の所作を見つ可しと教ふ墨繩打守り見るは人間は爲る處と異りて人力にて造んよ一日頃を経可き物をも頼り作り出せる体凡夫の及ふ可きは有す墨繩打見る間彌道の奥儀をぞ究めける渾て此夥多の仙人達主の翁の教れまよ行ひて萬背く事無く又之を敬ふ事も甚

しければ此主平凡に仙人よ在せじと思ひ寄ぬ儲連立て其所を出て原の小門を入けるに童子慍しく走來て主に向ひて火急の召有り疾参り給へと言は主巾服を改めて出て行んとして墨繩は對ひて思ふは汝飢たる可し仙界人間と同じからぬは食膳を設る事無し童子よ命じて庭ある荔枝を取て墨繩は與へ我飯り來る迄此處に在て俟可しと言て寬歩てぞ出行ける墨繩此荔枝を食見るは甘美なる事類なし松光も是を得させてんと思ひて中門の方へ歩て出るは松光は俟居たる程倦勞れて牀簀の方より依て眩暈して睡り居たり墨繩脊を打て呼醒して此處人間と同じからず無禮を爲可らずと言は松光不興氣なる面色して仙人の物惜み爲るもれよや爰より來りて二時餘りも成ぬれと一握の飯をだよ與へず此家の造營を見れば財は富家ある可きを僅か一椀の飯をだに惜めるは心無の乞食は社有れ吾師疾飯り給へと言は墨繩制して制り物な言を先づ是を食とて荔枝を出して與れを松光手より取て儲も大なる推草よて候生よて食はば腹をや害ひなんと言つゝ物慾げよむざゝ食終りぬ此荔枝咽喉を過ぬれば今迄物の慾かりし心失て腹の中七八椀の飯を食たらん心地と成ぬ斯る所は仙童膳を捧げて來りて松光が前より据て卒疾かき候へと言松光墨繩は向ひて此童かき候へとすは何事よ

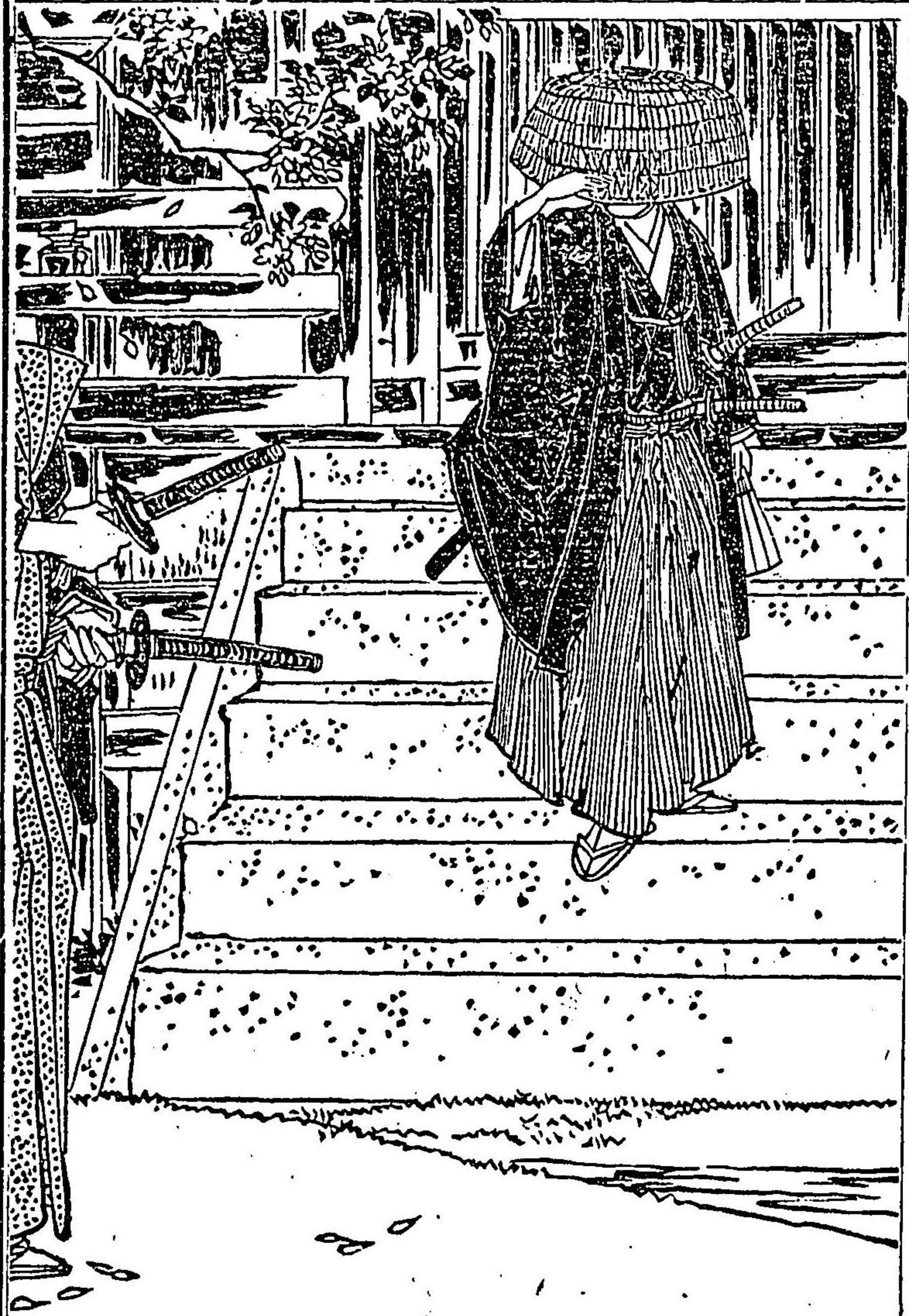
て候やらんと問ハ墨繩汝ハ物食と云事ぞと言松光眉を縮め頭打振て争で物の食る可き腹ハ
鼓ハ様も成て有と言ハ仙童曰く此男凡俗なれば人間の食を與へよと主の中されて候へハ
殊更ハ斯設け出たること言松光然ハ給へりて後よこそ喫べいはめ迎標子取出て彼魚と飯を
打明つれハ仙童ハ膳を持て彼方へ入ぬ墨繩此席ハ近邊の景色見んと松光を連て門を出て道
有る方を行に樹々ハ玉を列ねたる如く砂ハ悉く金銀の色なり踏て歩むも添け無き心地す
此方ハ高き築土ありて門明たる所有りやをら入て見れば男女の泣聲聞ゆ訝しければ恒の透
間より見れば貴人と思しき人の威有て武々敷が藤内ハ立給ひ左右ハ官人と思しき人々列
を正して坐し給へり階下ハ男女兩個を据太く罵て在す耳を着て聲ハ貴人の謂らく汝等街
かハ夫婦と成て仙都の掟を背きたり伊乍ら塵縁の盡ざる所奈何共爲可よ有す今より汝等を
慾界ハ下して夫婦と成しめん業場たふんハ再び此所へ遊へてんと宜まへハ男女の仙人差
俯きて應答だよ爲す泣沈み居る体なり墨繩益々不思議思ひて此男女を見れば美く敷艶麗
よて愛敬翻るハヨリあれば誠ハ美人とハ斯る人を社云可れと打思ひ居に貴人願を動かし
て傍り人ハ目配すれば傍り人立て兩個の瓢草を取出て貴人の前ハ置つ此傍りの人を見れ

ハ先ハ我を遊へたる主の翁なり偕ハ召有り迎出行給ひしハ爰ハ來給へるありと思ひ寄ぬ貴
人又云此二ツの瓢ハ汝等ハ一個づハ與ふるなり凡縁場あん時再度持販る可し生れ出ん處ハ
南膳部州大日本國の中よて女ハ貴族の家ハ生る可し男ハ東國の賤き民よて有ん疾追遣と宣
へば庭ハ列居たる仙卒立上りて兩個の男女の手を取て左右ハ分ちて引立行く女をハ西ハ嶺
の方ハ引行体あり男をハ墨繩ハ覗き居たる方ハ引連て出れば墨繩松光も忍しければ傍の樹
ハ添て隠れ居ぬ仙卒疾之を見付て一人走り來て汝等奈なる事よて大膽も此處ハ入來るぞ
と云墨繩地ハ平伏て我輩ハ彼所に朱衣を着給へる老仙ハ家ハ今程參り居る者也免させ給へ
と云い手を額ハ當て拜ハ仙卒打咲ひて汝等此所ハ來れる事我疾魯仙の物語よて聞たり汝等
ハ制外ハ凡俗なれば何方ハ入來る共答る事無しと云此言を聞て墨繩松光も大ハ心落付て彼
仙人達の後ハ立て行て見バやと思ふ心出來ぬ仙卒等ハ彼美男子ハ左右の手と取て只管ハ惹
行体餘りハ不便かりければ墨繩進出て我彼若き御方を負奉て參らバやと云ハ仙卒等汝慈
悲の心あり殊勝ハ然ハ彼ハ負せよ迎若き人を墨繩に負つ其時松光其彦瓢ハ自個持て參る可



けれど最いそが輕かるき物ものなり松光一人ひとりのの仙人せんじんよ向むかひて此瓢このひょう何なんの爲ために用もちふる物ものにて候まをかと問とは彼かの仙せん

月つき神かみ



し迎むか手に取とりて共ともよ走はしる此瓢このひょうと云いふ瓶びんの形かたちよして上うへに鎖くさりを繫つなぎ置おたり石いしよや有あん其質しつの知し難がた

人對へて言けるの仙界にて金丹と言薬を鍊事有り是の汝等が如き凡俗よても此薬を喫ぬれば直に仙と成事也此薬を鍊る程凡三百年斗を経ざれば丹と成事能はず彼男女は仙人此金丹を鍊り作る可き役を蒙て有乍ら窃り戒を犯して忍び逢けるよ依り此穢よて金丹淨騰て聊も鼎も道る事無し丹藥恙が無く成就せば此瓢も盛て貯可を彼男女法を犯しぬれば斯仙界を追放也と語る松光聞て偕の太切の薬を容る瓢よて社候へ何迎彼男女よ此瓢を預け給ふよと問バ仙人偕々臆膾責て問男かな此瓢の彼等が人間も體を宿して偕後再回此仙界へのり來るん時恙無く此瓢を持來らざれば仙と成事能はず若此瓢の疵だも付ても原の位の仙人との成難しと云松光我故郷よての斯る瓢よの炭團杯を社儲へ候へ斯斗の物をだも仙界よての大事とし給ふよやと云て冷笑ぬ偕一里餘り行けるよ限も無き高き山よ請りぬ爰よて負たる人を下させけるに若き人の打惜れて物をだも云ず奈も爲るよかと墨繩松光も目を離さず守り居バ仙卒等彼若き人と隠路に將て行て頃と云体谷の下へ突落しぬ幾千仞共知ざる深谷なれと微塵も碎け彼死しぬらんと墨繩の最便と云居たりける松光手に持たる瓢を捧て之

は奈に爲給ふぞと云バ仙人達驚きて此瓢の彼も持せ遣はず可きを不便ある事を爲つるかど各自太く怖たる体也墨繩が云今の程投落し給は宜しゆるべしと云を人々冷笑て彼谷を離るよより疾く人間も胎を宿しぬ今の彼凡人と成り生を換ぬれば眞仙の道術失ぬ此瓢投遣りたり共彼が許も到る事難し之は我々命令よ背きたる罪去處無しと各額を港めて悔居れば墨繩が云我輩幸ひ凡界よ住みへバ彼人の行方を尋ねて此瓢を渡し申さん奈にと云バ各手を打て是の偏に汝も任せてん我々神通を以て彼が許も許らん安ければ仙界も擬有て擅も人間も到る事を驚たれを容易行詣る事難し汝儘よ彼に遞與て給へと云墨繩彼瓢を包よ包み自ら負て仙人も別れ松光を連て山を下りて原れ老仙の家よを飯りける主翁出居よ俟付居て汝山よ詣て瓢を請取て飯り來る成んと云よ隠すべきあらねば現狀よ事の体を陳べければ主翁点頷て嚙有ん汝塵界も飯らば違ひ無く彼人よ追與し還すべし萬一誤りて天城よ違ひ大なる禍有べしと云ば墨繩争で背き奉らん偕問奉度存候の今の程上坐に在せし貴き御人の奈なる御方にかと問バ主翁が云く彼貴人の玄々皇帝太上老君も在在焉汝恭くも幸よ拜し奉る事を得たりる答へぬ偕童子よ仰せて飽鑿鑿鋸斧鎚渾て工匠の具共取揃へて

墨繩が前より並べさせて此度の勞は汝は是を與ふる也此具を以て物を作らんは汝が手業今迄は百倍して其妙を竭す可しと言へ墨繩悦びは堪はず遂に退て數回額突て拜む扱申けるハ斯斗り有難き神仙は逢奉りぬる事生涯の悦び之は過たる事候はず奈何で汚名を聞せ給へと云ハ老仙の謂らく汝は何をか包む可き我ハ唐土に成人て姓ハ公輸よて名ハ班と云者あり魯國よて生れたれば人我を呼で魯班と稱したりき自個人間ある時工匠は業と好みて大なる物の殿閣樓臺橋梁楮小なる物の船車器皿の類を作る人其巧を賞て神と稱せざる者無りき後に塵世を厭て高唐雲夢に間隠れ終に蓬萊に到て居を卜たり汝が道は賢く且志一の直なるは感じて斯呼遊へて此具共を譲り遣はず也汝塵世に立歸りても仙界の事を以て辨人に向て語る可らず又彼男女の仙は邂逅とも仙人の種根なりと言事必ず語り告可らずと云墨繩心よ思ひけるハ我の秘して語るまじければ松光もし人間に洩す事もや有んと心中よ思ひ廻しけるを魯仙疾く悟りて汝が召連たる男口善惡無奴なれば人ハ觸知さんハ一定せり彼ハ我計ふ可き旨あり汝心を支ふ事勿れ夜も更ぬ勞れたる可れば疾寐よと云て奥室へ入ぬ墨繩松光を呼て傍に臥しめ自個も困じける儘少選睡りける程も無く魯仙の聲よて疾起出て用意

せよと云聲す目を披きて見よ魯仙并に童子等兩三人傍に立て有り驚き起立て昨日貰し物杯一個よ包みて墨繩魯仙を拜して有難き汚願を蒙り事陳聞ゆ可き方もいはすと云魯仙重て云るは汝等僅に一晝夜を過しぬれど人間世おてハ十五年斗りを過しぬ疾急げ迎童子に命じて案内させて魯仙中門迄送りて再び七十年を過しなば汝此處よ來りて我と共に道を修す可しと云て別れを爲ぬ墨繩數回伏拜みつゝ童子を先よ立て出て行けるよ昨日來れる時ハ然斗り嶮岨なる山を越たりしよ此回ハ聊か左様の嶮き所も無く少選の程は坂有る所よ詣りぬ童子が云く此下を下りおば汝が家近きよ有り我ハ是より歸り去んず連原は道へ行ぞと見えけるが疾く形容を見失ひぬ松光見送りて仙人ハ五穀を斷て食はずと聞しが誠よて有りけり米の價の騰貴たる頃ハ仙人社浦山しけれと呟く楮坂を下り果て少選傍の樹の根よ尻掛て休む程松光言けるハ昨日大なる葺椎を食てより物慾き心地ハ爲されど今日ハ少々口の邊淋敷心地しハ昨日の物喫ははんとて云さま仙界にて貰ひ得し魚を飯と入たる標子取出て奈よ吾師も喫食可やと云ば墨繩我ハ聊か物慾き事無し汝慾くハ食と云よ松光謝子の蓋取て更々と食端しつと思ふ程俄よ舌自ら縮り行く様よ覺ゆれば阿と聲と立んと爲物言す舌ハ漸々

に縮行く咽の中へ入様よ覺ゆれば眼を狂かせて手足を悶て騒ぐ墨繩も驚きて奈よ爲と脊を
撫擦れど只悶き足摺のみして指を口元よ當て敷るれと也偕の物の言れぬよやと言ハ只點頭
のみ也耳は聞ゆるよやと言ハ又點頭墨繩も慌てたりしが熟々思ふよ魯仙の宣ひしハ彼の口
善惡無奴あり爲可き法ありと宣ひし偕ハ仙界の体と彼よ語せし迎彼を啞と爲給へるよやと
云ハ松光恨し氣よ山の方を見やりて玉の様ある涙を落す墨繩慰めて言るは汝心を改め仙道
よ寄依し明よ人の短を言さるハ仙人憐み玉ひて再度物言れん様よ計ひ玉ふ可し少遷忍て在
可しと千般と賺しこしらへて引立れば松光彼標子を取て山の方へ打投て目を大きく爲て打白
眼と弗よ聲の出ねハ口惜氣に打見返りつゝ墨繩に手を引れて泣々道を急ぎける偕墨繩ハ
免角松光を勦て行程覺へある松の並樹有る所よ詣りぬ然ハ我住る里よ近し迎道を急ぎける
よ老たる者ハ出來て手を打て墨繩ぬし歸來ぬ迎呆たる体して足下ハ奈にして此十五年斗り
何國よ行て住玉ひし何て故里よハ文をだよハ越玉はざりし先村長の許よ告ばや杯言て騒ぐ
墨繩云く亡し父母ハ菩提の爲よ國々の寺々参り巡りしハ斯歲月を過しつと應して先づ我家
よ到けるよ太く荒たれと家ハ昔の儘に立て有り庭にハ草生茂りて秋ハ野等なり兎角掃掃ひ

て入居たりける斯て日を過す可きならず此瓢を持行きて彼仙人ハ行方を尋て遞與ばやと思
ひて旅の具杯取したゝめて此度ハ一村の者よも能暇乞して松光ハ行李荷ハせて東國乃方へ
を出立ける此松光幼稚より手習を得せず一字をだよ辨へざりければ啞と成てより我思ふ事
を人に知する事は叶はず奈何で假名文字をだよ知たらハと云て頭叩きて悔みけるとぞ

○たけま

爰よ武藏國荏原郡よ竹芝の山人と云者有り性來風流よ光る斗り美しかりければ彼が姿を賞
る人の天下ハ顔吉と稱けるが通習と成て山人と呼者無く押並て顔吉とぞ呼たりける年ハ十
五歳斗りよてぞ有ける古ハ由緒ある人の此東國よ下て爰よ家居卜て住玉ひける其人の未な
りければ山里ながら調度杯も昔ハ名殘留て風流たる物共も貯へたりける父の頃より稍貧く
ありければ然る貴紳筋なりければ幼稚時より書籍杯を讀せ教へ立けるに敏く賢くて讀得
難き卷々をも事も無く覺悟めければ師なる人も殊更よ稱賛ける渾て此山人を見たる者ハ
男女を言ず想を掛ざるは無りけり其頃同國よ廣岡の長者と云者有り心嫉たる佞人にて有け
るが此山人を想ひ初て争で兄弟ハ契せんと數回文をと送りければ一向返事たよ爲りけれ

ハ奈もして我物よ爲んと思ひて好機をぞ俟居たりける春の頃向が岡と云る所の花咲ぬ迎人々遠近を云ず爰は港て終日遊び暮しける中よ山人も母を誘て高き岡邊に毘打敷て詠め居たりける折柄廣岡の長者も此透りよ幕打廻して酒飲樂を居けるが山人が母を連れて爰來れる由を聞て酔ふ乗じて走り來て則ち毘の上よ上り山人が手を捕へて我度々消息して志しを告つるを情無き少人かなと云て只管戯れ掛りければ母の興覺て山人よ目配して疾爰を立去んと爲れバ廣岡立上りて母と突退け山人を脇に狹みて自己が幕の裡へ惹連行んとす母の起上りて這者狼藉ありと云つゝ迫付を足よて踏飛す此騒は櫻子偏提杯の微塵よなりて飛散ぬ母の正氣を失ひて俯よ倒れて起も上らず廣岡山人を捕へて引行んと爲危き事云バ更なり恚る處よ花の木陰よ頰冠せる男の立居たるが走出て廣岡が利腕取て逆轉打せて三間斗り投付つ山人の嬉しくて母が許よ依て介抱すれば廣岡起上て彼男よ飛懸るを引捕て大地よ投付け幕串を引抜て連打よ打ければ強氣の廣岡も弱々と成て倒れぬ彼男仁王立よ立居て山人よ向ひて母の前を負て疾爰を逃玉へと云よ山人の心急れて疾母を脊よ負て岡を下りて逃行ける廣岡が下部人六七人彼男を遣じと取巻を幕串を取て從横よ打て廻れバ寄付者も更も無く皆

散々よぞ逃失ける彼男廣岡が伏たる側よ依りて恚る奴よの恥見せんすと云さす帯解き衣引剥て衣よぞ流れよ打投て打笑つゝ何國共知す歸り行ける廣岡の赤裸よて臥居たるを下部等立歸り千般介抱しけるよ漸くよ息の出たれ共赤裸なれば此儘よて歸り玉はんハ人惡し連下部が衣を脱て打着ければ猶寒しと言は詮方無くて有合たる毛毘を取て頭より打着て帯にてくるくゝと引結べバ廣岡徒倚と立上りて赤裸ある下部が肩よ懸りて歩み行さま宛然繪お書たる達摩大師の醉しれたる如くされバ是を見者手打敲きて笑ひけり是より彌々嫉き事よ思ひて此報ひ爲とぞ思ひ立ける扱又墨繩の松光と共に東國の方へと下りけるよ相摸國をも過ぬ扱日暮ぬれば宿り索めて夜を明し居たるよ夢の中よ夥敷神鳴響きて持來りける瓢自己と窓を出て飛行くと見たるよ驚きて枕を擡けて彼瓢を見るよ有事ありし手感して松光を起して其邊燈火を照して見れば跡方も無し此瓢失ひては我身よ奈なる祟有んも計り難しと家主をも呼起して家の四方杯搜索と夫と思しき物も見えず是盜人の持行可き物よ有ず正敷夢中よ此瓢かのれと飛出たるを見しハ若くハ仙人の告玉ひつるよて此瓢を遞與進らする人の此透りよ住王ふにや有ん迎夜の明るを俟て此宿りを立出ぬ爰の聞及びし武藏野とかや果も

無き大野みて苜蓿のみ高く生て行先も見はず彼夢も見つる瓢の東を投て飛と見つれば武藏
一國の内を尋さんよの大方在所知ざる事有し汝の左の道を往て尋ぬべし吾の右の道を辿て
行可し石濱と云る所よ苜蓿何某迎知人有り其處よて出會可しと云ば松光例の顔て立別れ
行ぬ墨繩の一人彼苜蓿を押分つ、道有る方を蹴躓行けるよ流れ有る所よ出ぬ此流れよ添て
行見るよ柴橋打渡したる所よ壯者釣きて居たるあり尾花撫子杯の岸よ立るも見捨難くて立
止りて四海を池とし萬民を魚とすと何と無く口順ければ此壯者墨繩が方を振返り見る墨繩
此人を見れば十五六は美少年よて顔の匂ひ類なく女よて見まほしき姿なり何とやらん見た
る人れ様なれば熟考すに彼仙界よて谷へ落し入れし人よ違はず少人云けるの身身の旅
人よや何處を投て往せ玉ふと云よ墨繩差寄て自個の飛彈は國なる匠よて候此武藏の國への
始て罷りたるが何處よ宿り取可き知音も無く候奈何で一夜を明させ給なんやと言ふ少人安
き事よ社我許へ伴ひ進らせん迎竿を上げて誘迎先よ立て歩む後体彼山中にて見たる仙よ聊か
違ふ事無れば必ず此人社彼仙人れ生れ出たるならめと思ひて付添て行程無く茅葺たる門よ
詣れば少人柴の戸押開きて入ぬ爰の竹柴坂と言る所よて少年の遺顔吉と聞えたる山人あり

墨繩熟視せば驚たる家居の体あがら由緒見て住儼たり然に奥の方より女の童走出て慌たる
聲よて借も湯飯りを今やと俟付て候ひき母君の晝の程より何處へ行せ給ひしにか見させ給
はず近邊の尋ひびつれを非よ行方知る人も無し君の萬一湯行先を知らせ給ふよやと言
よ少年大よ驚きて母人現よ鄰の家よ到り給ふだよ我よ告給はでの出行給はず況て自個外
よ出たるよ争で家を出給ふ可き然よても心あふざる事よ迎頭打傾て立れば墨繩借々苦々
敷き事を承りしもの哉見参らするよ湯家よ人少く見て自個物の役よ立可き身にのひのね
を湯力らと成て俱々母君れ湯行方尋ね奉る可しと言ふ少年大よ悦びて嬉しくも宣ふ物哉迎
墨繩よ足浩はせて簀子の上よ誘ふ墨繩熟視せば此家耕耘餘晦酒をも造りて賣鬻ぐと見ぬて
厨房の彼所よ大なる桶杯夥多排列てあり又我居る傍よ棧敷構へて酒入る瓶杯許多排列て在
よく見れば自個が失へる瓢子壺れ上よ釣てあり扱の爰よ社と思ひけるが先知ず顔作りて少
年よ對ひて是なる瓢は古くより傳て持せ玉ふよやと問ふ少年が云く其事よて候是の今朝の
程早う起出て見候得ば此酒壺れ上の梁よ鏢よ繫ぎだる瓢の懸りて候奈なる事にかと存て見
て候得ば折節東風れ吹出て候得ば此瓢西よ蕙て音を立て候其聲得も云ず面白く心も自ら澄

沙りて候ひき少遷して北風吹ハ又南ノ嵐ト同ク面白キ音を出して候急る物は原我家ノ無キ物
物マて候つるを奈なる人の殘置たるよかと存候へハ先取入て主の來トん迄ハと斯酒瓶の上
に其儘小釣置て候と語る墨繩が曰く是ハ人の忘て殘し置たる物マは候はじ和君マ天より與
へ玉ふ物マ社候はめ大事ト成て疵付て寶と成玉へ後々御身立身世マ脱出玉ふ可キ吉端成る
へく存候と云ハ小年打咲て然バ宣キ祥マ社候へト打語ヒ居る程隣の家主走り入來て是の母
君ハ午の頃大キある男の背マ負て北を投して走行たるを隣の村なる者ハ草刈居て儘見
りト今の程來りて語て候と云儲ハ其奴盜人成へし追蹙て捕へてん迎心狂ふ斗り迫立て騒
時又日も昏ぬれば炬火燈連ねて墨繩と俱々小年マ引添て家を出て菰薄の中を分て五里餘り
行たれ共影だマ見付たる緯無し少年聲を楊て泣事限りなし携へ來る松も燃盡しぬれば今ハ
詮方無し先立歸りて夜ト明して後搜索可し何れも有れ行方知ざる事ハいハしと千般と
慰めつゝ又原の寓居へト引返ける

○ひろをか

松光は墨 一別れて一人行季ト負て足マ任せて十重許歩行けるが申ハ時過る頃酒賣家の

前マ到り咽も乾きぬれば入て床几マ尻掛て居けるマ傍ハ男一人包背マ負て酒喫て居たり
松光此男が包の体を見るハ形丸めて彼失へる瓢の体に似たれば訝くて争で見んと思へど
物言事ならざれば詮方無く彼男ハ背後マ廻りて包の上より探り見れば此男振願て此奴何條
事を爲るにか人の持たる包マ目を掛るハと云て白眼ハ松光前マ來りて腰打屈め其包披きて
見せ給へと仕方マて手を動し見ずれど彼彼心得ず此奴物言ぬは啞ある可し何事を思ふよか
聞分難しと云つゝ彼包を下し是マ臂打掛て酒吞居り松光包の裡頻リマ床敷て打守居たるマ
彼男酒マ碎ぬるマや頭縮垂て眠る体なれば靜マ側マ依りてやをら彼包マ手を掛て我方へ引
寄んと爲る此人疾ク目を覺して此乞食め又も此包を盗まんと爲るマや此包の裡ハ天の下マ
並ぶ物無キ器マて天人仙人マ有ざれば用る緯無キ重寶ナリ汝此包マ心を掛るハ一定盜人ナ
る可シ容易汝等マ盜取る可キヤは迎冷笑ひつゝ又彼包ト背マ負て思ふ様マ罵叱りつゝ門を
出でぞ往ける松光彼が仙人の持可キ寶ナリト云たるを聞て愈々我尋る瓢ある可しと思ひけ
れバ後マ就て竊に追行彼男ハ心も付ず小唄唄ひつゝ往を後より無手ト首筋を捕へたれば彼
男手ト振上げて後マ無ければ松光手を放つ彼男松光マ飛蒐トんと爲しが能々大切の物ナ

りけん彼包を背より下玄岡なる所よ差置て腰ある棒を取て打て躓る松光も同く棒を以て少
遷戦ひしが互ひよ敲きつ敲れつして相俱よ只弱りに弱ける時彼男聲を揚て少遷俟せ給へ申
す可き事有と言ハ松光も棒を止て居たるよ彼男大き息を吐て我幼き時より棒を取て犬と
人と言ず打据て手柄を爲事數回なれば東國よ於てハ吾よ優る可き棒遣ひハ有じと自慢し
て在しよ貴殿の棒の手練專々我よ劣らず倍々天暗なる涉働よて候今は涉名を名乗給へ其上
よてハ小生も名を明し申つ可しと眞實數聲を放ちて言松光心ハ可笑思へぞ口働かねバ守り
居たるよ彼男名乗給はぬわ仔細社候はめ御心掛てはと思さるハ一品太切の物あがら見
せ奉らんと静々と立て彼包を手よ取上げて松光が前よ据て誘々披きて見給へと言に松光嬉
數三回斗り打棒けくて扱彼包の結目解て開き見るよ這者奈よ老人病者杯の臥房ハ貯る溺
器と名付し物よぞ有ける松光ハ呆て大口明て仰き居たり彼男愈々誇平よ嘯りけるハ是ハ都
の實紳人々ハ大壺と召れて涉圃人杯の取扱ふ物ハて候東國よてハ見事稀なる品あるを自
個が主の許よ客人の入來てハハ此品川よ可き事有と主人申付てハハ所々借索て持参る
所よ貴殿此品よ目を注玉ふハ必有る御人と見受たれば太切れ物あがら蜜ふ見せ奉るなり未

だ主人よ遞與せぬ裡私に他人の目よ觸ハ事は貴殿の執心よ感ずれば也ゆめ見きと宣ひそ
と手首を動ハつ、言松光案よ相違したれぞ此男が殊更よ大事と思ふ体なれば押頂て包よ
引包て返し渡せば男數回 押頂て舊の如く背に負て面をしかめつ、倍々思はざる棒の勝負
よ腕も腰も痛て堪難くハと言つ、足も取次よ歩行て行松光懷中より墨繩が渡ハたる文取出
て披き見すれば此男打讀て何く此者啞の病よて療治の爲東國へ罷下りハ然る可き所よて
ハ一宿仕る可く間お取扱 給る可くと讀も果て此男言るハ袖振合すも他少の縁よてハ我主
人の許よ伴ひて宿し参らせん誘々ぞ云て引連行倍往行て棟門大きなる家よ詣りぬ是あん廣
岡ハ長者が住家なりける松光を小部屋よ入置て彼男は奥ハ方へ往ぬ少遷有て奥ハ方頻よ物
騒がしけれハ松光竊よ入て見れば五十餘りある姫を捕て主廣岡の長者怒り罵て居り傍に
隠れて聞ハ長者が云く其方を爰許へ僞引寄ハハ先よも語たる如く我山人が容色よ迷ハ數回
人をもて其由言送つれと弗に應答だに爲ず是よ依て其方を斯く呼居て山人を我ハ與へよと
千般と言聞すれぞ承引爲ざる社惡けれ此上否と言ハ立所よ命を斷可し奈何よ返答爲よと聲
を揚て云ハ姫泣沈みたる顔を上げて倍々無態ある嗚呼ハ者哉我兒ハ農人の家よ生れたれぞ素

姓を云バ汝等が類よハ非ず然ると強よ横さま成る目を見んと爲や母が命を取ば取れ我兒ハ
思ふ儘よハ爲じと言バ廣岡大は怒てよし然ハ愛目見せてん此奴元の如く樓よ打込置と
云バ下人等手を取て姫を連て階子を昇り腕を柱に掛り置て等く樓を下りぬ樓よは姫が聲よ
て泣罵て止す廣岡下男を呼て言けるハ彼苦み堪ず明日にもあらハ心折て山人を我よ得
させんとや言もせん若彌々今日の如く張魂よ承引せずバ明日は夜は前なる川よ沈めてん
と云松光打聞より借も不當の奴かな奈よもして此姫が命助けバやと思ひけれと詮術無れば
原の處よ歸り居り道より伴ひし男膳を持來て松光が前よ据て傍れ男よ叫き云けるハ彼姫を
賺し慰めん迎我よ大壺をさへ用意せよと云付られつれと今宵の形状よては大壺も不用よ成
ぬと云松光飯喫て終りて又彼所の邊を伺ふよ主は寐所よ入て臥ね程無く男女原も物共取し
たためて各部屋よ入て臥ぬ松光寐もやと一時斗りを過しけるよ鐘聲聞ゆるは子の刻成
可し皆人能く寐入たるよや家ハ裡鎮りて庭の邊よ虫れ聲れとすり静小忍び出て厨房を通り
て奥の方よ行よ男女皆能く寐て跣の聲のみと仕濟しぬと階子よ足を掛れバ女れ聲よて盗人
よと云よ松光驚て一ト縮みと成て疊よ臥居バ彼女の聲にて盗人よハ非ず我男よて在けり此

方寄玉へと言つゝ大なる財をかくみぞ借は寐言なりと悟りて又階子よ懸りて音せざる様心
支ひして上り見れば暗くて物れ善悪も見ぬ松光窓の戸を明つれば寐俟れ月の光り差入て
其邊驟然に見ゆ姫驚て震ひ出せば松光背を撫擦りて手よ掛りたる繩を解く姫不審よ思ひて
寄り居心松光包より墨繩が造れる管を出して繼合せて例の階子と倣て窓より差下し姫が手
を取て階子の許へやれバ扱は我を救ふ人也と心付て手を合せて拜みつゝ彼階子を下れば築
垣の外へ出ぬ姫ハ嬉しくも又恐ろしくて只管松光が方を伏拜て走り行んと爲るよ怪しき男
の突と出來て物をたふ言ず姫を引抱て何處共知ず飛行ぬ松光ハ之を知らず彼階子を引揚て元
れ管となして包よ入て静よ階子を下んと爲る折柄主廣岡目覺て姫が泣聲の止しは訝迎歩
行來て階子よ懸れば松光下り來て目を見合せぬやをれ盗人計迎諸手よ引捕へて聲を立れば
家の裡の者皆起出來て散動騒ぐ廣岡盗人は捕へ置つ繩もて來よ迎繩を取寄て松光を健かよ
控り上つ姫が聲せぬハ不審なり迎樓へ上りて見るよ姫在す借ハ此奴が逃し遣りつる也とて
彌々松光を強く打据つ此奴を引入たるハ何者ぞと云よ昨日溺器を持來る男の連來るなりと
云バ彌々怒りて彼男をも捕て責鞭縫と大方ならず干般と責問共松光素より物云れねば只差

俯きて居るを此奴斯斗り責問ども一言をだも答へざるの恐ろ敷奴なり此奴族 人ならんよ
の持来りつる季行杯有る可し披き見よと言ハ男共松光が行季を取り出来りて廣岡が前も置
く是も盗もつる物成る可し迎打披き見れば衣二三ッ入たる下も只今切たりと見えたる女の
頭入てあり廣岡驚きて猶燈火を近付て見れば山人が母の頭も似たれば大に驚きける中よも
思ひ廻りせば我明日の夜ハ姫を殺さんと思ひたりしは此奴が殺せしハ幸なり然もても奈な
る事よて殺したるぞ軀は何れも棄たるぞと言き松光應答爲されば又彼行季を捜し見れば一
通の文あり讀て見れば此者啞なりと記して有り見るより廣岡又惡念萌してまたくと笑ひ
て此文を引割棄て良策有りて悦びて先づ此奴を取逃す可らず強く繋ぎて置と言付て夜の
明るをぞ俟たりける程無く夜も明けければ廣岡常は陸間敷行通ふ國の守の目代が許し行て自
個が家ハ凶事出来ていと言ハ目代何事ぞと問ば廣岡が言様荏原郡ハ竹芝ハ山人と申者年頃
母ハ不幸していひけるよ一昨日母を強て等打て殺す可く構へいへと母逃出て自個が許し來
りていひしを昨夜人を雇て自個が家ハ忍ハせ置て母を殺させていなり殺しつる奴を搦め置
てい處彼者始ハ山人の命令よて來りつる由をやつれと控り上て後ハ弗も物を言す啞の如き

眞似して一言の應答だも仕らず候此事自個が身ハ關る事ハいハぬぞ彼が母の逃參りて候を
殺させつる事念無く存ハ疾彼者共應に徹れて問注して玉りなんと寔しやか陳る此目代ハ常
ハ廣岡ハ錢を借て親き男なりければ努愛ハ玉ふ事勿れ小生能く計ひてんと云ハ廣岡少選語
ひ合せて自邸へ歸りぬ少選有りて守の應より士卒來りて松光を延て連行ぬ松光ハ夢の心地
して引れて應の裡に入けるよ自個が傍ハ美敷少年の躡踞居たり國の守先づ松光ハ對ひて事
の情を問玉へども應答爲されば此奴聞つる如く啞の眞似爲ると見たりと云て又少年ハ對
ひて汝ハ酒造りて商買爲る山人と云者なるかと問ハ少年參いと答ふ汝是なる男を荷擔て母
を殺さんと爲る逆罪惡ハ可き奴なり疾現狀ハ言と責る少年涙を流して争で然様の人ホトぬ
舉動仕る可き母ハ昨日思ひ寄す行方無りてい間所々捜し求めて候を只今の玉ふと承りてい
へは儲ハ我母ハ此者の殺したるよて候かと云守彼が殺したるハ現 人々見る所なりと云ハ
少年聲を上げて泣出す守又云く汝此男を誦ひて母を殺させし事包ます申せと言ハ少年争で
左様ハ淺間敷事仕りあん此男は未だ見も知ぬ物よていと云ハ守の謂く汝が知る男の奈
なる仇有て母を殺す可き是は汝ハ言付たるよ違ハじと責に少年猶あらがへと守怒て郎黨ハ

下知して彼等を拷木がうぎに繋つなぎて打うて云いハ郎黨らうたう兩個にふたを引張ひきはりて拷木がうぎに繋つなぎ寄よせて疾現やくげん狀じやう云いハすバ
辛目からめ見みせんと云い様さま拷杖がうじやうを取とりて打据うちすまければ手足あしも血流ちちがれて殆ほとも絶たれんとす松光しょうくわう心こころも思おもひ
けるハ自個おのれが命いのちは惜おしむも足たらず此少年このせうねんの思おもひ奇あやぬ濡衣ぬれぎぬ着きて責せめさいなるハ事ことの不ふ便べんさよ廣岡ひろおか
が母ははを擒とり爲なし事ことハ我社われが知したれ少年せうねんよ告つげバやと思おもへと物言ものいはねバ詮方せんかた無し士卒しそハ只打ひつ打う
バ少年せうねんハ早息はやいき絶たて後様うしろさまに倒たれぬ我われも今いまハ命絶いのちたぬべし奈なむれバ覺おぼへぬ不具ふぐと成なりて憂目うれ見みる事こと
よか仙人せんじんといふ者もの通力つうりき在あれば我われも二回にふた物言ものいはせて玉たまと精神せいしんを凝こらして行念ぎんねんしけるに眞まことの心こころや通と
じけん哀あはれとばかり一ひとト聲こゑ々々を揚あげて叫さけぬ士卒しそ偕とも社しゃ此奴啞ここのやつがしの眞似まね争まつるが苦くるきも堪たで聲こゑを上げ
つるなれ猶なほ健たまは打据うちすまてんと云いハ松光しょうくわう聲こゑを上げて先俟ましま玉たまへ物聞ものきゆべき事こと有あると云いハ守然まも然らバ疾
中なかつせと云い松光しょうくわうが云い自個おのれ此少年このせうねんと素來もとより知音しよんよていハす昨日きのう思おもハす廣岡ひろおかが許もとり宿やどりていハひ
廣岡ひろおか一人ひとりハ嫗うばを捕とりて甚いたく責せめさいあてて汝なつかが子こなる山人わが我心わがこころに従したがはざれば汝なつかと擒とりて做なし也
と云いハ嫗うば心こころを定さだめて受引うけひかず依よりて明日あしたの夜よハ嫗うばを殺ころす可べしと下人したう共ともに命令いのちつていハ不圖ふと聞きてい
へハ不ふ便べん事じよ存ぞんじて夜よに紛まれて樓たかの昇のぼり嫗うばをバ落おしやりていハ也なりと云いハ守頭かしろ頭かぶを振ふて否いな々々汝なつかが殺ころ
つる嫗うばが頭現かしろ現げんよ之これハ在あり争まで抵觸あらかす可べきと云いハ松光しょうくわう其頭かしろハ我師わがし猪し名部なべハ墨繩すみなはと申まをす者ものの

彫た作つれる物もの也なりと云い守冷あま笑わらひて是こゝ奈何いかで造つくれる物ものをらん汝なつか苦くるしさよ偽まか々々敷そ空くう言ごんを云いなりと云いハ
松光しょうくわう其頭かしろ取とり出し給たまひてよく涉覽せつらんあれと云いハ守彼頭かのか入いたる器うつはの蓋ふた取とりて熱あつ々々見みて此頭このかぶ争まで木きも
て造つくれる物ものならんと云いハ少年せうねんハ漸やく息いき出いけるが延の上のぼりて此頭このかぶを打うち見みて我母わがははに社や在ありなれと言い
て泣事なみ限かぎりなし松光しょうくわう云いハ吾師わがしハ飛彈ひだんの國くによて双なななき匠たくみよて凡おそ此人このひとの造つくれる物ものハ是こゝのみな
らず人ひとの目めを奪うばひハ事夥あま多たハ試こころに打割うちわりて涉覽せつらん有あると云いハ然しかバ彼かれが云い儘ままハ試こころん迎守むか守刀かたを抜ひて切き
付つれバ頭かぶハ二ツふたハ別わかれて中なかつより小こさ鈴すず一ひとつハ轉ころび出いぬ守取まも上見あれバ内うちハ常つねの木きなり偕ともハ人ひとの
頭かぶならずと始はりて悟さとりて墨繩すみなはが匠たくみハ奇あなる事ことを賞感しょうかんじけり去さりて嫗うばが行方ゆくへ知しざれば汝なつかを放はな
ちやり難かたま汝なつかがすす如ごとくよてハ廣岡ひろおか目めも召捕めしとりて問明とひあらむ可べしと云いハ少年せうねん云いけるハ偕ともハ和殿わだんハ墨
繩すみなはぬしの弟子でしよて在ありしけるハや足下その師しなる墨繩すみなはぬしハ我許わがもとに宿やどり給たまひて昨今きのう母ははの行方ゆくへな
ど俱とも共とも尋たづねて在ありしと云いハ松光しょうくわうも悦よろこびて母君ははハ自個おのれ助たすけ奉たりて夜よの中なかつに落おし參まらせしと語かたれ
ハ偕ともハ母ははの涉命せつめい恙やく在ありしハか迎天むか天てんを拜ひして悦よろこぶ恚いかる所ところに廣岡ひろおか參まりて應かしまるハ守まもの云いハ
汝なつかが家いへよて此者このものが嫗うばと殺ころしつる由よし汝訴なつかへ出いたれと并ともハ有ある事こと有ある可べしと云いハ廣岡ひろおか何なにがし争ま
で偽まかをすすべき我目わがめの前まへよて彼者このもの嫗うばが首切くひき候まちて山人わがひとが命令いのちつよて殺ころしたるよし申まをして候まちひき

と云守然バ此首を見よと投やれバ廣岡取上て打返し見れば木よて作れる物なれば又云可き
詞も出す口籠る守汝人殺しなりと云て訴えの空事なる事知し扱ハ汝恨を抱て山人を罪よ
落さんと計りたるなら人と云バ廣岡面の色替りしが又云けらく此首ハ有ぬ物よて候共軀を
籠置たる樓れ下よて彼奴を捕て候時より軀が行衛無り候へば汝か殺したるよ違はずと云松
光が云く我何の仇有て山人ぬしの母君を殺すべき汝ころ彼人を殺さんと云しならずやと云
バ廣岡が謂く彼母我を頼て來るを不便て養ひ置たり我殺すべき道理無しと抵觸て果す折柄
一ツの鳶飛來て應の庭を舞涉りて一通の多と落して彼邊体よ飛去ぬ守此多を取せて披き見
るより廣岡めを掛り上よと云バ士卒疾く廣岡を纏もて掛り上つ守の謂く汝去る春向が岡よ
て山人よ狼藉の舉動なし今又母を盗て樓よ繋ぎ置今宵彼を殺さん速下人よ命令たりし事軀
が訴狀是よ有り彼軀汝よ強くさいなまれて病よ臥居て應よ出る事成難しと委敷此多に記
しあり木偶の頭よ以て應を欺んと爲し罪輕よ有す逆怒り給ふ廣岡今の包むとも甲斐有じと
姦計け程を遣さず逐一よ中えければ惡む奴とて頼て圍圍よぞ入られける山人松光ハ罪無れ
ば家に飯る可しと宣ふ去よても軀が訴狀を鳶の持來りし社不思議なれ善人の無辜落入ん

を天れ助け給へるよや逆守を始め應の人々も是を訝くと思ひける山人松光も始て安堵の思
ひよ爲て連立て宿所へ歸りける宿よハ老母病床よ臥居を墨繩兎角介抱扱て居たり先恙
く家よ飯り來し事を互よ悦びて涙を流す母言けるは我松光殿よ命助けられ堀の外へ出たり
しよ思ひ依ず一人の男來りて我を負て走りつるよ膽心も失て有しよ此人奈何なる心よか妾
を此村の口よまで負來り棄置て何地共知ず走り去ぬ此人ハ斯負來らずバ又廣岡よ擲られて憂
目よや見まし返すく有難き人も世よ在しけり逆泣く山人云けるハ母人の訴狀を鳶の
持來れる事守を始め我々も不審晴すと語れば墨繩突立て其鳶是ハ候逆傍より取出たるを見
れば木よて作れる物あり墨繩が云く我仔細有て異人より工匠の具共を傳ぬ此具を以て物を
造れば我心の欲するよ從へざる事無しと異人ハ傳て玉ひたれど未然るや否を試ざりしよ
今日母君の歸り來給へるに和君の應召れし事旁心苦しかりしよ母君廣岡が工の程疾
に訴んと宣へど斯病よ罹り給へば皆自ら出行給はん事難し自個又介抱して參せざれば外
よ扱ふ人も有す依て母君の多書給ふ問よ木鳶一ツ作り出て試よ飛せやりつるよ思ひしよ違

はず彼應よ飛行て再ひ爰許よ歸り來りしは是我匠の奇なるに非ず偏よ神人の授け玉ひし



道具の靈あるよ依りと語れば老母を始め人々も阿と感じて伏拜みつ墨繩松光よ對ひて汝が
啞の病ひ頼に癒し社嬉しけれと言バ松光拷木よ繋れし事を語りて始め墨繩よ別れしより途
中大壺を見違て奪取んと爲しより廣岡が家お宿り一事迄委敷語り出れば墨繩を始め人々も
始て笑ひをぞ催しける母墨繩を頼母敷者よ思ひて言けるは我兒未だ年足はず然る可き親族
も無て便り無く候へむ身彼が兄と成給ひて今より行末を後見して給へと云バ墨繩が云斯
見え參らせしも不思議の縁よ候へむ今より互よ心厚く語ひ申す可し併一自個の所を隔て住
居候へば何斗りの力よも成難からん但今四五日止り居て記念とも見玉ふ可き一品作り
出て參らせん自個東國よ下りたりしは故有る事よていへ共仔細有バ口外お出し難しと言バ
松光差出て我師長く物語あし玉ひる偕ハ又啞とや成玉んと言て危がりけり墨繩夫より一間
なる所よ引籠りて何事とか爲らん 鋸斧の音のみ聞えしが三日と言日よ出來て物一ツ作り
果つ見給へと云て障子押明たれば丈大きく運敷馬の宛然生るが如き体して立居たり人々見
て恐み驚く事限り無し墨繩云けるは是ハ唐土よて諸葛孔明の作り玉へる木馬よ摸擬て聊
匠と用ひては逆庭な下して打跨れば此馬四足を動し歩行行体生る物と聊違はず松光面白

き事よ思ひて自個代りて乗て見んと言ひ墨繩下て簀子尻掛居れば松光馬よ跨り手綱を取
 て歩す墨繩聲懸て汝手綱を強く引事勿れ強く曳なば走る事疾る可しと言松光静よ手綱を取
 て門の外へ歩せ出て借々興有る事かな寔の馬より乗心好し杯賞て一町斗り歩せて行しが強
 く引なば疾走ると教へられしが奈斗り走るよか試んと思ひて思ふ様よ強く綱を曳ければ此
 馬寔に矢を射が如く一飛よ飛出しつ松光阿那やと叫びければ詮方無く馬は首よしがみ付て
 此馬止てたべくと叫べと誰かは知ん馬の風の吹やうよ飛で行へ今目の昏魂も身よ添す
 只馬の行よ任せて俯よしがみ付て漸々應々と聲を立て啼く馬の只中を飛で北を向てぞ走り
 行ける

〇いしばま

恚て松光の膽心も失ぬる斗りよて馬の走るよ任せて聽と首を捕へて抱き居しか道の程何里
 斗り走りたりけん今精神弱りて抱きたる手よ放ちければ横体よ倒れて落ぬ恚るよ向ひよ
 り大きな男の只今湯ひきたると見えて湯帷子着たるが走り出て彼飛行馬の手綱をとらへ
 たり馬の猛りて走んと爲るを横さまよ手綱を曳ければ辛て馬の鎖て立ぬ此男馬を曳て伏た

る松光が許よ依て水杯吞せて勳ハやうく息出心地舊の様よ成て此男を數回拜して悦びを
 言此男言るハ傍身ハ何處より來し人ぞと問よ松光自個の旅人よて荏原郡なる某が許よ止り
 居る者也と云バ彼男彼所より此處迄ハ三里余りハ道あり自個出會すば此馬陸奥の邊り迄走
 り行可しとて笑ふ松光返すく厚き傍思と蒙りいひぬと云居たるよ墨繩ハ松光が行方覺束
 無て跡を追て來りけるが此男の馬を引止め呉ける事を聞て厚く謝して悦ぶ此男和殿達ハ何
 國の人々よかと問ば墨繩我々の飛彈の國なる匠ありと云バ此男飛彈の國よ猪名部の墨繩と
 云人あり自個が父の得意あり迎常よ物語り給へり足下達ハ知玉ハすやと言よ自個社仰せら
 る墨繩なれと云バ此男地よ頭を付て借も思ハざる對面仕りていと云て悦ぶ墨繩我東國よ
 てハ知人只一人有り借は芦屋ハ船主とのよて在すやと云此男參ハ船主ハ我親にて自個ハ掉
 丸と申して代々此石濱よ住てい先づ我許へ入せ玉へと言つハ誘ひて入る是ハ家居も廣く藏
 とも三ツ四ツ連築ていかめしく住爲たり墨繩門を入ば父も斯と聞てや出迎て墨繩ぬしハ社
 珍しくも下り給へる哉自が飛彈の國よ在し時ハ足下よハ七ツ斗りよて在しき足下の父君の
 厚く小生を勳り物し玉ひし事今よ忘れ難く嬉くて常よ申出て傍德を仰て居り杯千般厚き志

しを陳て奥に誘ひて酒杯設けて款待す馬をばはひりた方なる柳の樹に繫ぎ置たるを船主見
 て馬に秣を食せよ男共と言を男共秣を入たる盥もて来て馬のもとに置て言けるはこい怪さ
 馬かな物食ん共爲す動きだに爲す只目のと働すの希有の畜生哉と言を松光可咲て事の仔細
 を語れば主親子も驚きつゝ墨繩が匠の凡なうざるを感じけり奥の方より醫師あど入居て物
 騒が敷体なれば墨繩奈よ涉家に裡に病者杯の在しますまよと言をば掉丸答て自個が妹よて
 い者春の頃より病に罹りて打臥て居り小生は實の養子よて船主が生の子よて候はず妹の
 父母の生所よて一子よて候へば殊に大事となして養ひ立て候思ひ懸ぬ病ひは罹りて親達
 も大方あらず心を碎きいと語る墨繩仙界よて貰ひ得たる蒔枝の端を懐ろより取出て是少々
 煎じて用ひ試み給へと掉丸悦ひて奥の方へ持行ぬ少遷有て船主出來て今の程玉りし涉薬用
 ひて候へば夢の覺たる様よ爽て苦敷事も忘れ候迎母を始め皆人悦びふ堪ず儲も奈ある涉薬
 よて斯速やかよ効を顯しゆにかとて言て踊立て悦ぶ掉丸も同じ事を言て悦べば松光したり顔
 よ然もいひあん此涉薬世間の庸醫杯が知る處よていはず自個我師と共よ千辛萬苦して添け
 ろくも魯仙の涉許にてと言さして急よ口よ手を當て墨繩が方を見て儲々我乍ら善惡無き口

よてい又も啞と成るべき事を遂忘れていと言を墨繩も滾て笑ひ出しぬ主親子の心も付す兩
 個を千般餐應して夜よ入けれは清なる被取出二人を臥しめけり墨繩の先よ入て臥けるに松
 光の例の口利なりけれは臥も爲で掉丸に對ひ居て墨繩が匠の奇なる事杯誘らひしう物語し
 て居たりけるが物の序よ妹れ病る体を問けれは掉丸が謂らく聞え出んも我さへ面無心地し
 てい寔は我妹よてい者名の紫とよして今年十四よ成て候容色人よ劣りいはず志しも優し
 くい處過え春人々と共よ向が岡の花見よ罷りてい處不圖若き人を見初て後夫より心地例な
 りぬ様よ成て打臥て候也と言松光然に病根の能知ていを争で妹君の志望の如く其若き人を
 聳とい爲一玉のさると言をば掉丸其事よてい彼男の家と某が家との累世の仇有る中にていへ
 ば假令婚姻の事杯申し出たり共彼が方よて受引可き道理いはずと言其若き人とやすの奈な
 る人よていりと問を荏原郡なる竹芝の山人とよて世の人顔吉と呼者よていと言松光手を打
 て我々今日迄彼山人の許に止居ていひき彼山人とやすの容色美き斗りいひはず心も柔
 和よて學才も兼たる人よて候へば假令古くより仇ある事候共負じ心を抱きて如み恨む様な
 る心を支ふ人よいひねば此婚姻整ひ難し共申し難くやと言ば萬一山人が受引いはず自個が

悦び是より過すと云儲千般の物語り終りて 各別れて臥房入て寐ぬ夜明て起出ければ主の
 船主墨繩は言るの自個宿願有て頼とたる涉寺の涉堂建立せやと存じ立て候和君下とせ玉
 ふ社幸ひなれ少遷止り玉ひて此堂造りて玉りなやと言墨繩が云小生一旦國は歸りて都よ
 登るべく存していへ共左様は宣ふ上止りて此涉堂造りて奉とんと云ふ船主悦びて然らば下
 總の國は我親族の候夫が能き材木ども許外持ていへば彼方へ行玉ひて木共撰取て玉へ迎俄
 小支度調て墨繩を誘ひて下總の國へぞ出行ける松光の其日竹芝が許へ行て云々は由を物
 語りしける序は娘が病ひは罹りて戀慕へる由を山人は語りて彼を迎へて妻と爲し玉ひあん
 と言は山人の顔赤くめて左右の應答だよせず松光母は逢て此事を語へる母涙ぐみて言けれ
 の彼芦屋の家は我夫ある人と原厚く交りけるが持傳し田を論じ争ひて國司の廳へ出て訴へ
 ける時夫古き券を失ひて證據と爲べき物無て彼は負て面目を失れき夫より後彼が家と交り
 を断て出會事を爲す夫年を経ずして没行玉ひたれば倍々疎く成ぬ彼は殊に家豊は成て乏し
 き事なく我家の夫の頃より漸く衰へて今は斯代敷住居して有る争で彼が家と婚姻を取結ぶ
 可き亡者の思はん處も計り難ければ兎も角は芦屋が娘を我妻と成難えとすびも無く云は



萬壽寺

松光も再び云可き詞も無し我々彼所より少遷止り居て堂造らん程日數經ぬ可しと行行李

打撥て再回葦屋が許し歸りけり葦屋が家より娘は病ひ全快成ぬ迎人々悦び訪ふ來る者絶
す娘も今日ハ寐所を出て廂に障子明させて庭の方を見出して居り松光垣のくねより覗き見
る。此頃の病は面瘦たれど艶も美き姿なれば山人は配偶なば好き一對の夫婦成る可ま此娘
が思ひ入たる心根も不便ければ争で此妹脊の交小生結び整てんとぞ思ひける借娘が居た
る所も入て口軽く物語り一又墨繩が造る盤杯取出て走せて見すれば娘も悦びて面白き人よ
思ひけり其日人間を伺ひて娘が側へ寄て小生君の意能く知ぬ山人の素より我親しければ語
ひ合せて後々の夫婦を爲し參らせん先多を遣り給へと云ハ娘の思ひ懸す涉りに船得たる心
地して恥しきも忘れて手を合せて松光を拜みて涙を翻す松光彌々可愛思ひて借奈も偽けん
山人が許へ娘が文を遣へまけるよ山人も岩木あらねばよや頓て返事をぞしたりけり此嬉敷
よ添て彌々心地爽まければ月毎ハ淺草なる觀世音詣てければ春より病臥てければ參り奉
らす今日彼所も參りなん迎母も語ひて竹輿も乘て出たつ松光其外男女引添て出行ける是よ
て豫め松光が器持へて今日山人が方へも知らせ遣して訪ふ會せてん迎斯誘ひて出るなりけ
り借淺草は行連ける小此涉寺ハ東國第一の靈場よて參詣の男女引も切す賑き事言も思なり

實は社隣陀の淨利生著き効しなれと娘も拜みて淨堂を下り入て此所彼所立休ひて言廻せど
山人を見ず今日逢逢々せずハ何の時よか又逢見んと心一ツよ思ひ侘つハ山の紅葉を愛るよ
啣ちて左右息ひ居る程日も西又傾きなんとす松光も心成す猶立もとほり居る山人が影だお
見えず供も添たる男女疾黄昏も近く候へば母君の俟在しますらんを疾歸らせ玉へと云少遷
社有れされみ淨寺の中に竹立可きよ有ねハ強ちハ竹輿に乗んと爲ハ先途より息を切て走り
來る人有り松光打見るよ山人なれば差依て何て斯遅くの來玉ハる候勞れて今歸らんとて彼
人の疾竹輿も乘玉ひきと云よ山人今朝より母人ハ癩ハ惱み玉ハ右左扱ひて心成す遅く成
ぬと云供の男女の目を忍べハ竹輿の邊りよ寄付可きよ有す何と無く松光と物語りする振し
て竹輿に裡を見遣ハ娘も本意なげよ山人を打守り居り月頃の隔てつれば斯傍近く其人を見
るも夢れ心地れとせられて輿より飛出たき心地すれぞ思ひ念じて打守り見るよ春見初しよ
の中々近勝りして美き男なれば念々割無き思ひをぞ添ける並樹立たる所に來ければ此邊り
ハ物詣れ人も少く稍物淋しげなり時娘奈よしたりけん竹輿の中よて阿と叫ひければ供は者
共先輿を地よ据させて慌て扱ふ松光驚きて是ハ月頃の病ひの再回起りたるならん迎輿を覗

き見て正氣更ふ付給はず此邊然る可き醫師有ん尋て來よと言付遣りて又一人は女は彼所の家に行て湯を涌して貰ひて來よ誰々の疾家よ走り歸りて事の由を告よ我有は此處の心安かる可しと言て皆人々を走せ遣りて争で山人と興の内よ入て少遷たよ物語り杯爲んと心と配りけるよ興昇男兩人未だ傍よ有は松光頭搔て千般思ひ旋しけれは此上彼等を避け遠ざく可き法も無し奈よせんと色々思ひて俄よ云と云て反り返りぬ山人も興昇く男も驚きて介抱すれは松光絶々息の下よ細き聲よて言けるは我心を支ふ時の毎回斯る病ひ發しぬ是は酒を呑ば忽ちよ愈るなり疾酒を買て來よと言ハ興昇く男一人頓て酒賣軒を投て走り行ぬ松光傍を見れば今一人興昇く男有は彼よ對ひて我忘れたり彼酒一回温めて夫を能く覺して再び温めて持來よと命令て遣る可きを忘れつ汝疾追懸て言但汝等其席よ酒吞て來よと言て錢投出して遣りけれは此男も足を空よなして走往諸邪摩の奴の皆神やらひよ拂ひぬ山人ぬし疾興の許よ寄玉へと云よ流石恥しくや猶豫て寄も來ず松光焦て今よも湯も酒も一度よ持來らん敵よ向へん大將軍は左様よ畏憚る可きかはと言て手を取り興の戸を明て突入んとす娘は始めより虛病作り居たるは松光が人を避て策を行ふ程笑を忍びて有けるが戸を明て山人

が顔斗り差入つれは取しさを忘れてしがと付んと爲る時湯と持來りしと女が聲すれば山人驚て疾飛退つ松光見て此湯猶温し今少し暖めて持來よと云よ女争で温かふん沸騰湯よて候と首を松光頭を振て温しと云バ女の怒つゝ又原の家へ走りぬ松光山人が手を取て先興の裡へ入給へと云様強て押入んと爲る處へ興昇く男走り來て酒持参りつと云よ山人又腰に脇よ飛出たり松光此酒餘り涌過たり彼所よ持行て醒して來よと云ハ里の男醒なんよハ彼所よ持行ず共爰許よても醒中よ可くと云バ是に詰りて云可き事無く又頭搔て居たるよ女も湯と持て來れば今は術計尽て詮術無し憚るよ彼方より菅笠着たる人れ飛様よ走り來て笠取を見れば娘が親の船主なり大息吐て我墨繩ぬしと下總より只今歸り來る道よて召遣ふ男が走り行を見て事体を問ハ娘が今日親音よ詣たるに途中よて病起れると聞て其儘直よ馳來りつ奈よ心地能く成ぬやと問松光俄よ癪の起り玉ひて大ふ騒ぎ候へと今ハ心地鎮り玉ひぬと勞ふ船主山人か遠く退居たるを見やりて彼は竹柴が子よ有ずや我家とは隙有る中あり何迎此邊りよ猶豫てハ有るぞと言よ松光引取て思ひ寄す只今爰よて出會て物語せんと存せしよ湯と酒と一時よ参りて驚と物語りも仕らずと云ハ偕ハ和殿彼と親しうえ玉へるよや我家

は仔細有て彼が家とは交りを断て有り迎女原よ向ひて彼奴も物を云そと云て不興氣なる面
 色す儲興を昇上れば娘は涙を一目受て興より顔を差出して山人が方を名残惜氣よ打見遣る
 頭震バ粧ひし玉を飾りし笄の搖々と打動くの風よ散かふ花よ共思の然を見棄て別る、
 片羽と成し雁の常世も賑る心地せられて山人の遠く佇立居て延上り見る斗りよて物だよ言
 事成されば是も漫よ涙くも興昇く男女共のうぐに成ぬ急はや迎只管足疾よ道を急ぐ山
 人の猶行立て少遷見送りて在しかど奈よ共詮方なし折柄撞出す暮六の鐘お心細さも忍び難
 くて哀れと斗り云さして願り見がちよ行惱む娘の興より顔差出して幾回も打見遣るを父立
 寄て風よ當らば悪りなん迎興の藤をさと下しつれば俯伏て泣沈みつ斯迄偽計設けつるを
 物だよ云せで別る、事返すく本意無しと投首して松光も山人が方を見返りつ、南と北へ
 別れてぞ行ける扱も無端宿世なりかし

○うきふね

墨繩の下總の國よて然可き樽材木杯撰取て筏よ造らせて川へ出させ儲船主と共よ立版りけ
 るよ彼筏も未だ此地よ到らず空敷日を過さんも徒ら也とて一人船主が櫂よ昇りて例の道具

共取出て物造りてぞ居ける爰よ娘紫のあまあか飯初よ逢見より後愈々玉の緒も絶る斗り思
 ひ勝りて争で今一回の逢瀬もがなと松光を責る松光も争でと思へど此家々訓嚴敷叩よ女杯
 を外よ出す事無し又家の裡も門戸は隔て嚴重よて外より忍び入可き隙無ればなまなかなる
 媒よ關涉て中々心を痛めける兄の掉丸も妹が心を知たれば父船主よ寄々進めて山人の
 方へ妹を遣り給へと云と船主弗よ承引せざれば打敷きてぞ日を過しける或日墨繩樓より下
 り来て主船主よ云けるは小生試よ船一ツ造り出たり内よ聊か機關を設け置たれば乗て試み
 玉へ迎下人よ命令彼船を取下させつ五人斗り乗可き体よて小き船ながら例は面白く作り
 爲つ船主常よ川よ出て釣爲る事を好まければ此船作るを見て悦ぶ事大方あらず明日は宮戸
 川よ掉さして釣して遊んと言を松光聞て娘よ呷きて斯 爲し給へと教へて自個も其用意を
 ぞ爲ける扱翌日よありて船主釣掉など用意して墨繩松光を誘ひて船よ乗んとして船よ心得
 たる使役男を呼て汝掉させと云と墨繩が云人して漕せん船は誰か手にても作りつ可し是は
 機關を設て候へば人の手を借ずして船よ自ら行可しと云よ聞人興有る事よぞ思ひける娘父
 よ向ひて妾も將て行給へと云父頭を振て女杯川道遙爲可きよ有すと云て免さされれば松光

が曰く是は尋常の船とも違ひたれば紫雲の、所望道理あり船中他人も有ざれば乗玉ひなん
と勘るゝ然バ迎引連れて出立つ此船主が家前名高き隅田川ありけり抑此隅田川と云る
は古より最大なる川よて業平朝臣のいざ事問んと詠五へりしは人の知る所なり又更科日記
み下總の國と武藏の堺よてあるあすた川とぞ記されしも爰の事なり此日記印本數多有と皆
誤り有て爰をもふとぬ川と記しつ是のみならず東海道の道節杯をも前後と誤れる事あり古
本を見たる人は知べし借すぬた川と云は爰斗りあらす出羽國紀伊國も有て古より詠哥
あり駿河も有と注せる書も有り斯所々も同名有る古哥杯をも思ひ違て誤る事多し萬葉集
よまつぢ山夕越行きいふ崎れすみだかへらよひとりかもねんと詠りしは紀伊の國ある角田
川なるを爰の事ぞと思ひ誤りて末の世よへまつぢ山いふ崎れなと云名をしも近傍山里の名
よ被せ呼やうよへ成ね是の爰よ要なき物語りなれば言さして止めつ扱船主の此すもた川の
岸よ墨繩が造れる船浮めて人々と共船よを乗ける此船小ければ聊う屋根めく物も有て現
ならねば女杯に乗んよへ便りよしと云然ぞ舟狭ければ使役者なごへ乗ず船主墨繩松光娘と
四人斗りで乗たりける墨繩船は舳に立て聊う杭の如き物を動しけるよ此舟自個と動きて靜

よ行事人れ漕より安一岸に居たる掉丸を始め下人等迄拍掌てあざみ見る船主釣の糸下して
舟の行まゝ魚を釣て樂いむさゝ杯開きてとりくは酒交すいと興有り松光我も釣せ
ん迎竿を取て餌の入る籠を取て誤りたる振して川よ打落しければ水よ從ひて流れてぞ行
ける船主釣すべき餌を失ひて奈よせせし此透りよて蚯蚓など堀ましと言ハ然る可しとて墨
繩立て此回ハ小き杭を旋しける小船已と岸よ付ぬ娘斗りを船よ残して船主先よ立て岡よ上
りて彼方此方を涉獵ども此透り蚯蚓など見え松光豫て謀りたる事あれば彼方よ社有め杯
云て遠き方へ導きて行ぬ此透りの岸邊よの高き葎生ひ繁りて有る往先も見えず娘ハ豫て
契りてし事有る我思ふ人の奈よと岸の方を打守り居るよよとと葎ハ音すれば目を注て
見やりたる小阿那嬉しや戀慕へる山人衣も濡よ濡よぼちつ、葎の中より顔さし出たり娘ハ
飛立つ斗り嬉しくて然社俟給ひつらめと言ハ山人今朝の程より此岸よ付て舟の行を窺て葎
の中を分参りたれば佗敷目見つと言て白き手を出せるが葎蓋よさゝれて疵付て所々血出た
り我故斯斗り辛目見給へる不便よ先疾船お上り給へ父の在さんよは松光疾走り來て知すべ
き由やつれバ疾爰よ入給へといふ此舟岸より一間斗り退りて有る乗んよ道なし今日始て下

し立たれバ忘れて船綱も付ざりけり娘細き帯取出て舟は艦は結びて帯は端を山人が方へ投遣りて疾船を引寄せ玉へと言山人帯の端を取て力を出して引バ舟此方へ寄来る体なり今や父の歸り來給はんと思へバ心も心ならずされと又逢見ん事の難けれバ只管近付て思ふ事をも言バやと互ひに心急るれば胸のこ踊るぞ道理あり山人力を入れて引艦に此船岸の方へ三尺斗り寄來りと思ふよ此持たる帯半より糸と切て山人の被の中へ仰向し打倒れぬ船ハ此機會よ四五間斗、川中へ出たり山人直ぐよ起上りて見れば船は水よ從ひて流れゆく娘は佗しき物狂ひの如く成て山人が方を見て呆れ居たり岸なる人も物狂はしく被を分つ、岸傳ひよ歩めど船よ近付可き小有ぬバ果々は聲を上げて互に泣斗りなり此川上ハ名高き入間川よて源ハ遠き郡より出て流れ鋭き水なるを折柄北風の烈しく吹出てければ船は矢の走る如く海乃方へと流れ行ぬ山人心よ思ひけるは憚る小き船の漂ひて海よ出なバ大波よ打返されて直ちよ底の水屑とや成ん我誤ちにより契りてし人を殺さん事罪の程空恐しとて又駈出して追ひ行ども被芦よ遮られて疾船の行方へ見ぬされバ只身を悶へて一人岸よ立て歎き居たり是は楮置船主ハ彼所の間を下りて餌に成る可き蚯蚓なぞ數多取て原岸よ立飯り見るに船見えす

驚きて此所彼所索むれ共跡も見えぬバ借ハ少遠の程に浪に引れて船の走りけるに社連涙を流しつ、聲を揚て紫くと呼て岸の邊りを走り歩行墨繩ハ少し後れて來りけるが船の行方見えす且船主が狂氣せる様よ立走り居ると見て袖と扣へて言けるハ左様騒がせ給ふな此船飯令風の爲に誘はれて吹れ行ぬ共苦からじと言バ船主が曰く只一人ハ娘を浪よ沈めたるんよ争で騒がで在る可きと言墨繩打笑て小生先よ馬を作りて松光を見失ひたるに懲たれば此回作る船ハ道の隈を究め候て一里の水路を走りなんよハ必ず船又此方よ向て歸り來らん様よ作り置たり少遷爰よ守りて在せと言バ船主少々慰て岸よ坐して俟松光も船の無りたるよ膽を冷したりしが墨繩が調よ少し心安堵て川運を目も放さず守り居たるよ筏よ掉さして來る者あり見れば下總よて 詭置し自己が材木を積て來るなれば呼止て人々此筏よ乗りて見て居たるよ川下より船人も無き船の水よ逆て上り來るあり中を見れぬ娘紫船底よ泣臥て居れば人々筏を漕寄せ船よ乘選りて勦る娘ハ此船の再回我方よ歸り來るとハ知ず只管よ遠き方よ流れ行よと思ひて今や身を投んと搦へ居けるよ思ひ寄す人々よ逢て悦ぶ事限りあし不思議よ娘が命助りぬるも偏よ墨繩ぬしの機關の匠よ依り迎愈々尊み仰ぎて等閑あら

ず奔走しけり借家も飯れバ母親を子細を聞て驕て且恙無く歸り來るを悦ぶ娘は其儘部屋
に入て頭痛しとて臥けるが熱々思へるは扱も春より死ぬ斗り煩て山人君を戀慕ひて偶平淺
草もて俟付參らせしは生憎なる事出來て汚顔をだよよくも見參らせずして別れぬ今日社争
でと思ひ計りて現近付奉りしと思ひ寄す綱手繩の忽ちも絶果て哀くも本意無き別れを爲
し事左右も神佛れ我を見放ち玉ひぬる成可し此後逢見奉らん事も叶ひ難かる可れば生存命
たり共甲斐無らん杯千般と思ひ旋しけるが今一回父も自ら愛聞えて事叶はずバ其時よ左も
右も成果あんと心を定めて父の前も出て泣々かき口説言けるハ父母の仰せを俟奉らず密も
男設げんと思ひ立しハ空恐ろしき身の咎も候へ共宿世の爲す處もや思ひ返し佗て候争で此
愚なる心を恤ませ給ひて山人君の許に妾を送り玉ひなん斯憚りさも忘れてあい無き事聞え
奉るも日頃の汚慈愛も甘えたるよて且は割無き感ひも候逆涙と瀧の如く落し手を摩つハ疊
も打臥ば母は哀しとや思ひけん然れみも歎きぞとて夫に向ひて此事免し給ひなんと言バ
父眼を大きくおし頭左右も打振りて娘を白眼で言けるハ自個幼稚と雖も竹紫が家我家と隙
有る事はよく知つらん世も人も多かるハ彼をしも戀初たりとハ奈なる事を況彼ては家貧し

く成て今日れ烟をだよ立兼つと所左様の者も娘を遣んハ我家れ大なる恥なり彼山人が母我
を太く妬て我横さまも彼が田畑を所得せり杯識り居る事能聞及びて有り争で彼も我娘をし
も送り遣すべき殊も其方親だよ末だ事を打出ざるよ自ら男を撰て彼を夫と爲ん杯言事傍若
無人とや言可き女の走るハ免す可らずとハ賢者の詞なり恥を知ざる者ハ我も子とハ爲し疾
心を改めずハ長く勘當して追放つ可きぞと強く打腹立て掴み控る可き光景あれバ母制して
娘を引立て部屋も伴ひて千般と賺しこしつハつハ我兄と語て爲可き様社有なぞ諫れと娘ハ
只泣入て應答せず老ひかみたる父か怒り罵る聲猶部屋も洩れ聲えて魂も消る斗りハ心地し
つ斯父れ思ひ定め給へバ迎も山人ぬしの妻もあらん事難くなまなか存命居て憂を見たらん
より死なん社勝ゆめ但し春より病付て心地死ぬ可く社覺へたりしが不思議も病全快て戀し
と思ふ人ハ我心をも見せ奉り灰あがらも汚顔をしも見奉りぬれバせめて是を世の思ひ出と
爲可く様千般思ひ紊れつハ葎蓋かき分て出たりし面影さへ思ひ出られて我乗し舟の行方無
りぬとて然社心をも惑ハえ給ひけめ恙無く家にや歸り給ひけん我斯く思ふ共知玉ハ今頃
ハ寐やし玉ひぬらん夢も見てや在とらんなど果敢事のも思ひ續けて音をのみ泣て打倒れぬ

恚て夜一夜悶え戀れて割無く泣沈み居り實は床中よ漂ふ涙よの邊り近き隅田川の渡し守も舟寄つ可く又彼淺草の里小有と云めら石の枕も淨ぬ可くこそ

山人は紫を船にて見失ひて川岸を馳走りさま呼けれど影をだみ見されば詮術無く心成ず家小飯りて一二日過しけれ音信をだみ聞事無し思ひ惱て食事も咽を通ざれば松光が許へ人を遣て容子とも問心やと竊よ多認め居たる折柄母奥より出来て今日は父の殿の忌日なれば精進物調へて佛前小參らせんとす汝も賄て給へと言ハ山人多書さして佛壇の塵掃拂ひ燈火ともしつゝ不圖佛の傍前を見ハ小き式紙佛は傍膝の上に載てあり取見ハ墨黒よて玉川よさらす調布さらくゝよと書て下の句ハ無し不審よ思て母お對て此式紙ハ常よ目よ觸ざる物よて候奈成る人の筆よかと問ハ母が曰く夫社汝ハ父の傍紀念なれ其子細語りて聞せてん妾ハ舊此家ハ下女よて有けるよ亡り給ひし父の殿の傍ハ人情を見せ給ひて忍びくゝよ語ひてけるに本妻の聞知給ひて太く腹立給ひければ少選我を心親里よ返給ひき其時妾懷妊して程無く一人ハ男子を生ぬ此事本妻よ洩聞ぬなハ奈なる事か出来なんと藪の上より其子をハ

玉川なる百姓の訃お遣しつ其時父君の筆順に玉川よさらす調布さらくゝよ何今此子のこゝたかなしきと式紙よ一首を記し給ひて半より此式紙を引裂て下の句は産子の守お納め上は句の方我に預て置給ひぬ其後本妻も死給ひけれハ憚る事無くて我を家よ遣へ給ひき儲なん其代よ和主をも生たりし彼玉川の百姓も死絶たり迎其後音信通はしつれと退轉りて遣しつる兒ハ生死をだみ知ず若家ハ裡よて育ちなば和主のよき力草なめるを行方だよ知ぬ様よ成果まも無端世まぞ有けると涙を落しつゝ語れば山人も父の紀念の筆の跡と聞て數回押戴て共よ泪よ昏にけり恚るよ厨房ハ方より葛籠を荷て庭傳よ出る者有り能見れば我家の葛籠なれば盗人ごさんなれと山人飛下て葛籠よ手を懸て引戻す盗人は振切て行んと爲るを母往先を立隔てゝ白晝よ人の家よ入る盜賊争で安く通さんと云盗人燦て母を突退る山人又取付て遣じと止めば盗人傍なる棒押取て山人を打据つ取つく母をも同く打据て冷笑つゝ頬冠りを取て山人我を見知たりやと言を仰き見れば先股よ獄屋よ入し廣岡あり山人聲を揚て汝又も來つて我に冠するよやと言ハ廣岡点額て國司の廳よ引出され汝等が爲よ家を失ひ追放はれたる廣岡されハ争で汝等を恨みさうん今日茲よ入込たるは汝が蓄へ置る衣類調度

を奪ひ取り倍汝親子を殺さん爲し忍居たり死出の旅の用意せよと言さば又振上げて健打つ
母其手も取付を引擲て一間斗り投付て疾此世の暇取せん逆厨房も駈入て庖丁取て踊り出れ
バ母の表を投て逃げ出すを追懸て切戸を出るも思ひ懸ず大なる男の切戸外も立居けるが
廣岡が持たる庖丁奪取足を上て蹴やりたれば仰向も倒れけるを衆懸て健も踏付て竹柴親
子を害せんと爲る汝なれば命助けて置難しといひさば両手も廣岡をかい擲て目より高く差
上て曳と言さば前なる川も投込つ廣岡は呵と叫びたるまゝ水も巻れて流れ行し心地能ぞ
見えたりける彼男の老母が手を取り切戸を入て山人が打据られたるを左右介抱して贅子の
上も抱きあげて水なご飲せて扱ふを母は嬉しきが中も訝くろも何處の御人も在して我
々を助けて給へるぞと手を合せつ、禮と爲る彼男母が顔を打守りて懐ろたゝ紙取出て是
涉覺へ在すにやとて出すをおぼくしけれ取上て披き見れば式紙の中きりたるよて讀見
れば何ぞこれ子の爰たかあしきと記してあり母驚て此式紙の我夫れ手跡なり是を持て在す
は奈なる人ぞと不審すれば彼男遙く飛退りて頭を下て言けるの自個ころ初生の頃玉川の百
性が許へ遣はされし幼名は調布丸にていへと云ふ母親又驚て突と側へ差寄て熱くと顔

を詠めて廿余年は隔ぬれど左の耳は黒痣といひ面貌も父君の顔も覺へたる所あり倍は我子
の調布かどと抱き付て泣出す山人も思ひようぬ兄君の涉對面と頭を下て悦び泣に涙落せば
母涙と播拂ひて玉川の百性の家は跡もあし死失たれば汝の行方を尋んよ手懸りしるべも有
ざれば争て佛神の涉惠もよて一回の邂逅なんと戀れよ戀れし廿余年鳥の啼ぬ日は有とも思
ひ出ぬ時無りしをよとて疾く尋ねての來らざりし今何處も住てあるぞと聲震はしつゝ
問はさんい自個五ツよてい時人の許へ貰ひ取れ彼處生長い程彼玉川の百性の煩ひて失せて
い彼いまだ存命たりし時自個も語りいれ和殿の父の在原郡よて酒造りて商業する竹芝の某
殿よて在す本妻の妬を恐れ我家にて育て參らせつ折も有る彼處母往て親子の名乗し給へ
ど中置てい處よ不圖芦屋の家の養子となり今の名は掉丸とやてい語りも敢ねよ母摺寄て
其芦屋どのとは何れの人ぞと問はさるは我父と不和成し石濱ある船主よていと言ふ母も山
人も又驚きて言ことなし掉丸重ねて言けるは自個物の心を知てより母人を問參せんとする
よ養父船主殿の詞を聞バ竹芝の家とは仇有て不和なりと承りぬさらば船主子と名乗て母
人對面したまはじとやせまじ斯やせまじと年月胸を權きたりしよ去年は春向ひが岡の花見

の頃廣岡が狼藉を見るより顔を隠して其場より出て汚兩人を助けしも自個なりとはよも知給はじ其後廣岡めも擲へられ給ひて彼が家より負すと聞て争で取返し参らせんと廣岡が家の傍り露夜とかく伺ひしと思はず松光が斗ひよて塀を越えて出給ひぬ見るより嬉しく背よ返ひ参らせ此家近き所まで汚供は致しながら母人など呼奉らず其まゝ別れ参らせし自個が心を推察めれと語れば母親緒の両度の愛目を救ひしは汝も有けるか今日の今迄然らば知で神佛の化現もや有難き人も在しけりと口よ付て言たりしが神ならぬ身の思もみすく汝が脊に負きて我兒と知で有けるよ汝が孝の心届きて今日の危ふきをも遁れし上絶て久しき親子兄弟對面よ及びぬるの今日の忌日の聖靈の知邊して給へるあらんと母の更なり山人も持佛を拜して悦びけり掉丸母の前よ手を究て言けるの今日はへ参りしは母人へ自個が願ふ旨候聞し召れんやと言は斯名参めふ上からは所存有る何事も語ひ合せて然る可し疾く語りて有れと言は掉丸涙をはくく流れて自個が妹よては紫と申者山人を深く思ひ春の頃より病ひ着命も危くいひしは漸く此頃病癒方よなりていへと戀慕の心止む事無く強て山人の妻とならんと切と思ひ定めては哀れ母人の汚慈悲よ此婚姻調へ給はすは自個が悦びの素より

にて妹が本望是よ過す只管免許させ給ひなんと思ひ入て願ふよぞ母少遷頭傾けて有しが娘心よ然斗り我子を戀る志し承諾ざるは無心に似たれを父君の代より不和生し蘆屋が家と縁を組なば亡父の汚心よや背きなん父君存命在しませば我も供々諫め聞て此婚姻成就せんやうに拵ひ聞ゆ可けれを亡人となり給ひぬれば詮方も無き事ぞかしと言は掉丸點頭て道理ある仰せよていと云て懐ろより封じたる一葉の紙取出し母が前よ差置て此一品の妹が嫁入の土産の調度目録記せし一通にては披て汚覽有るべしと云よ心得ざれを披き見れば國司に應よて争ひし田畑を書たる券なりけり掉丸猶言けるの竹柴れ家と蘆屋の家争論に及びしは此券を記したる田畑より事起りぬ是を返し参らせあは亭父君の靈魂よも遺恨のよも残し給はじ疾く此券納め給ひ妹が願ひと叶へて給へと云は此券我家よ返しおあせるの汝壹人の心なる可し養父なる船主殿の争で之を免す可きと云よ掉丸頭を振りて養父が心よ免さざるを争で私よ計ふ可き左よ右よ此券収め給へと強て老母が懐に押入外面の方よ對ひて事成ぬ疾く々と云は後處お待居たりと見にて石濱が下人共てんでよ白木の臺お絹綿杯載たるを打捧び入來て椽先へ排列れば嫁の君の興と見にて静よ昇來て庭よ据たり母も山人も心あらず餘り

俄の嫁入りぞと只慌て打守る時興の戸を開きて立出る人を見れを思ひも寄ぬ芦屋の船主
 をり頭に袋の烏帽子打着て身よの布の肩衣着てよろばひつゝ椽上れば母も山人も驚きて
 又奈なる凶事出来ぬとんと胸騒ろきて守り居り船主老母の方よ向ひて我娘今日強て婚姻の
 一條掉丸を以て先よ申入たるよ承諾給はりしよし満足一つ山人よも今よりの是迄の恨を遺
 さす長く朱陳れ語ひしてたべと云よ老母進も出て申さば夫婦一世の祝事よいを曆だよ見ず
 日取をも撰ますして俄よ女夫れ盃せんへ輕々敷人ももどきいひあん此方よても其用意し
 はんまよ吉日を撰び給ひて此方へ送り給ひなんと云を船主聞も敢ず老の身よ心短く若うり
 し時の如く長閑よ物を待よ堪ず只今是よて夫婦の盃とり合させ給る可しと言つゝ懐ろより
 一の位牌取出して山人が側よ置て此位牌の嫁の君へ疾々盃さしてたべと言さして聲を上げて
 泣出す山人彌々心も得ず奈よと色を變て問よ掉丸枯たる聲よ上て妹よ一昨日の夜自ら
 縊れて死つるのやと言よ山人魂ひ失る斗りよ成て何事の有て死たるぞと身を震ひして掉丸
 が方よ倚よ船主涙を搔拭ひて位牌よ取て打咏め言けるの十四年の此年月春の花秋の月よも
 うへて手裡の珠と思ひて慈しみ育てつるに果なく見果ぬ夢とひるしつよ思ひ廻らせば果

報拙き生れありけり心ひかみし古翁が押立て晋りしを恨めしげなる顔も爲で惜々と部屋へ
 入りたりしが胸よ餘りて山人よ添れぬ事と思ひ詰て命棄つる不便さよ然斗りよ思ふと知
 枉ても免す可かりしを汝り母の我を責て娘が命生て返せと我を罵る度回よ膽よ答へ骨よ通
 りて五臟六腑も繪と成ぬ實よ一楚山の猿れ腸も斯るに社と思ひ知りき若き娘を先立せ老
 さらばへる白徒れ世よもこよひて何かせん位牌をつと身に添ていざち泣たる血の涙の秋
 の深山の紅葉を時雨の染るよ異なうす山人の只打臥て不便の人の心や互よ逢んと契りよし
 淺からぬ心ざしも淺草野邊の露斗り言もかはさで別れてき猶こりずまよ忍びつゝ愛を宮戸
 の川連よ芦分小船思はずも綱手と共よ玉の緒の絶果し社哀しけれ迎聲よ坐よ泣居たり老母
 も共よ袖を絞りて然る眞實ある志よを百が一ツも悟りなば又詮方も有べかりしよ不便の身
 の果やとて位牌よ取て佛壇よ居れば山人立て涙ながら金椀よ水をたへへ香爐よ薫す一片の
 煙りの末も愛執とむせ返れば母親の斯貞操ある嫁れ君に姑よと傳れて初孫を生せて見まし
 かば奈斗り嬉からまし妾が宿世社拙なけれと又打伏てぞ泣よける掉丸涙の袖を拂ひて妹が
 死せるの悔て返らず山人が妻となり香花の供養享る上の彼が悦び是よ過す此上の立返り野

邊送りして七々の追善讀經營みなんと言ハ船主頭打振て浮世の慾は闌渉ひ竹芝の家と不和となり娘をさへ失ひしハ衣の裏の珠をたゞ見知ぬ凡夫の過りなり我ハ再回家は歸らじ死失娘社我爲の善智識なれ今より諸國を經廻ひ是迄作りし罪障消滅且ハ娘が菩提の爲め樹下石上を宿となし抖擻行脚の身と成て來世の苦患を助らんと疾く用意まつ是見て有れと袋に烏帽子取捨右の肩を押腕ハいつの間は刺てばちけん圓頂なる聖の体にて墨染衣をぞ着たりける掉丸對立て道理あるは發心ながら余り火急の涉出立ありせめて妹が七々の法事の營み過して後旅立給ハん事遅からじは發供まらんとする者は支度用意も調ハじと言は世を棄果て出る者の何條供を具る可き家は歸りて法事修せよとの道理なる詞ながら然るハ親の心をしも知ぬなりけり若き者を先ハ立て康健なる顔作りて争で持佛の本尊をも見奉るべき心ハ聞のたゞしこさハかきくらして家跡も知ねを歸らん事ハ思ひも寄す此儘直ハ乞食して遠き野山の露霜よそばち雨風よ身と晒して艱難辛苦したらんハ此身ハ咎を娘めハ償ふ爲ぞと言さして鼻打かむも哀あり浩るハ墨繩先ハ立て松光に物持せ發れ子ハ上りて船主ハ對ひて言るハ涉發心ハ上諸國涉修行と承りは發乞の爲め參りてハと言つハ懐ろより小き佛合

龍取出して是ハ拙作にハ得共降魔の像ハ在ませハ途中安穩の涉祈りハ奉るなりと差出せば船主數回頂きて取収めぬ墨繩又松光ハ持せし包前ハ居て又言るハ是ハ自個殊ハ心を籠て作り出せし木鶴なり長途ハ疲れ給ハん時此鶴ハ乗給ハハ直ハ翫て飛往んにハ天竺震且ハも到りぬべしと包を解ハ木造なガ宛然生る如くにて實々一回翼を廣げハ虚空ハひいらん体ありけり掉丸取て額ハ捧げ道の疲を忘れんハ之ハ勝す可き陵別も候はじと鶴を取て差出せば船主墨繩ハ打向ハ和若ハ厚意謝す可きハ詞なし然き雲水の身ハ一鉢一衣ハて事足りなん邪法幼術の外道の師ありと疑ハれんハ心苦し併し切角の賜物なれば掉丸ハ譲り與へて長き世の寶とさせてん掉丸よく心を用ひて家と治て山人ハ兄弟の親ハ失され我若りし時ハ傲ひて人と寶を争て無益の罪を作る可からず何れも堅固ハ世を消光されよさらハと斗リ言葉て立出んと爲る折柄外面方騒がしさを人々驚き見て有ハ以前の廣岡太刀抜鬪し濡そぼちたる衣の上ハ襟引結走入て大音ハ言けるハ氷ハ落たる報答せんと再回茲ハ來て見れハ松光めも來れるよ和奴等日頃ハ我恨ハ撫切よして吳んと太刀振上て打て入を掉丸得たりとかい潜り太刀を奪ひて廣岡ハ襟元を擲て膝ハ引居て此奴自己ハ罪自己を責ると言事

知ぬ人非人め生置ハ世の人愛ひと成んと言さま刀取上るを墨繩少遷を押し止て彼奴極重の悪



鳥居のまへ

人ど 誰も 紫

△ 死給 未だ 葬送



の程と人々の嗚呼と感ずる斗りあり船主法師庭下立て我も彼鶴の如く行方定めず成ぬべ

次第に聲も遠く成て霞も紛れて見えす成ぬ今よ始めぬ墨繩が機巧

井の廣岡が聲してあはれ〜と呼けるが

が廣岡を負たるま、西を投てぞ飛行ける雲

唐高麗へ流し物おせんと木鶴の尾を礎と打

バ不思議や此鶴翅を廣げ一聲鳴と見えける

負せて繩の餘りを鶴の首足に結付けて滑る不當

は悪人の日本地への置可らず此儘直に退放て

良策ありと繩取出て廣岡と捨りて作れる鶴の脊よ

も透れれず且父君の修行の首途と言此家も先人忌日と

さへ承れハ殺し給はん事旁よ付て不便なり然と斯れ如

き者此邊よ立廻らハ奈なる寇とか仕りてんよし〜我

しと杖を曳つゝ立出る人々も下立て涙と共門送りして袖を絞りて別れけるとか

○夢のたうち

其頃帝の汚女も更衣ばらよて姫宮一人に在りしけり汚姿美しく艶て有難き汚景客人も在まければ古昔の衣通姫杯申すの斯や有けん杯世の人愛聞えけり始め汚母は更衣里も下玉ひて汚産有りけるも古き通習よて汚屋の上に人上りて既を轉落す事あり女宮生れさせ玉ふお北へ落し皇子汚誕生の南へ落すとか申傳へたる此姫宮生れさせ玉ひける日既取て何れ如く屋の上へ人昇りける時大空より鞠斗りも大きき見わたる物光輝て棟の上も落ぬ此人恐れて屋の上も匍匐て目を閉て戰栗居たり諸何事も無りけれと目を披て見るも屋の上も物有りおづゝ寄て見れば瓢の如き形ちせる物なり奈も故有る物成る可しとて彼瓢を取て屋を下りて人々に語りてけるも希有の事なりとて皆人驚きぬ其由奏聞したりければ吉祥もや悪祥もやとて陰陽師宿曜師の更なり書の博士諸山は高僧たち仰せ有て占ひ申す可きよし勅有けるも此姫宮凡人も在りしませず仙佛の假も天降り玉へる成るべいと諸道の勘文皆同じ様も申ければ帝も悦び在りしませず末頼母敷ぞ思しける此姫宮生れ出玉ひて泣玉ふ事限

り無りければ醫師の汚藥驗者巫女杯千般祈り奉りけれと更も効驗見せ給はず益々むづかり泣給へば奈も爲ましと人々持扱ひ聞ゆ然るも母汚息所の宣ひけるは生れ出給へる時屋の上も落たる瓢社故有る可れ夫を枕頭も据て見よと宜ふも疾く仰せれ儘も汚枕上も据置てければさしも大きき汚聲を揚て泣玉ひけるが忽ち止てすやゝと睡らせ玉ひぬ夫より後ねびまさり玉ひても此瓢は汚側離さず常の翫弄物も爲玉ひける此瓢とすは大ききある瓢を二ツも切り割たる形ちしたる物もて賤き者れ取扱ふ柄拘の様なる形ちせり此姫宮たてゝ習ひ玉ひされと琴棋書畫の道々渾て暗き事無く上手もて在りければ實も凡人も在りし杯人々呷き聞えけり或日姫宮汚手習まきして机も倚りて打眠り玉ひけるも夢も見給ひける様異しき賤の家と思ゆる所も日頃手ならし給へる瓢は廂も釣て有ければ驚かせ給ひて是は我幼き時より側放たず持ならしつる瓢なり奈もして爰もは有るぞと宣ふも内より人出来て是は我家も故有て持傳へし瓢もては貴紳汚わたりも奈もは奈も汚る物の候はんと言を見給へば鄙もは珍らしく艶なる人もて物言たる聲も爽もあらしければ少選打守りて在りけるも側も匠の木共扱ひて居たるも入來て言やう汚前も此主と深き契り在せば女夫もあり給ひ

なんとて手を取て奥さまへ將て行く此家のさま荒てあばら成る所も見ゆれど有醫調度
ごの故有げよて野鄙人れ体よの有す心あらず其所は居玉へれば匠盃取出て彼美男を
我前よ据て盃飯代し杯す此男を見玉ふよ始め見しよりは近勝りして微妙艶麗かりけれ
備も優美き人よ社有れ内わたりよ行かふ人々の冠装束杯こそ麗しけれ姿形ちの此人は似
たる者もなし我の此人の妻おて有さんと思す儲打語らひて在す程思ひ懸す父湯門は湯
て守疾参れと宣へば此男騒ぎて走り出づ傍自らも強く驚き玉ひけるが汗もしとよ成て湯
目醒玉ひぬ然るの机よ依り在して假初よ見玉ひし夢よぞ有ける湯側侍ひし人々湯湯
ぞ持参りて奈よ魔れさせ玉ひしよか湯聲をさへ揚させ玉ひきと申す湯心の裡よもいと思
ずなる夢よ計有けれ然も今一回さる夢を見ばやと思して其後殊更よ机よ倚り玉へぞ湯
目も合ねば況て夢杯見させ玉ふ事無く只見し面影戀しくて漫なる湯物思ひと成て明し暮
させ給ひけり

○都のぼり

墨繩の船主が詠し堂作を果て都よ上り行可し連掉丸に別れて山人が方へ來りける山人の紫

が死失しより世中無端思ひ取て掻籠りてのみ暮し居たりけるよ村長の許よりさ一たる事有
り今來よと呼よ來りけれれば往けるよ汝れ家今年夫役勤む可き時よ當りぬ疾く出立て京へ上
る可しと云是の往古定る事よて國毎よ百姓の限りハ京よ参りて大内れ丁と成て其職を
勤る事なり山人固辭可きよ有ねば承諾て家よ歸りけるよ墨繩松光疾く來て有バ村長の云
付し辭を語る母が曰く夫の最嬉敷事なれ浩る田舎に住居ぬれば風流たる事ハ夥よだよ見す
徒よ草樹と共よ世を終るん事の歎かしくて早晚汝を京よ上せ遣りて縉紳都れ手振をも
見せましと年來思ひ涉りつるよ幸よ社有れ況て墨繩君も上り給へば道の程も覺束ありらず
我ハ留守れ程ハ掉丸が許よ行て身身の歸りを待可けれハ心よ懸して疾く出立ぬと言墨繩
松光も俱よ悦びて左右の用意す其日と成て掉丸も來りて懇ろよ告別す旅よハ例の木馬よそ
宜れ迎行李なぞ載て各菅笠よ草履はきて出立つ掉丸ハ道まで送りて母を連て石濱へ歸ぬ
備三人ハ木馬を曳て交るく乗て行けるよ是を木作りとハ更よ知者無りけり儲夜は泊り
曉ハ立て行々て引馬野と言處よ到りぬ爰ハ持統天皇の衣匂はせ旅れしるしよと詠せ玉ひ
し名所よて最廣き大野なり人夥集り居れば佇立て見れば若き男の馬に乗て走らせ居たり

見る人々褒物する事限りなし此男馬より下て誇はしき面色して人々よ對ひて言けるハ馬の性ハ能く走る物なれと乗る人未練あれハ良馬と雖も能走らず世ハ千里を走る馬有ハ自己が乗ハ二千里を走らす可し昔し穆王の馬ハ足土と踐す一夜の中ハ萬里を行しとか然ハ馬ハ能はたゞ走るに有リ世ハ奈なる荒一物有リとも自個乗テ手綱を取んハ立處ハ乗据テ見せ參らせん渾テ日本ハ内に手綱の取様を知りたる者無く又馬をよく走らす者無し見物の人々の中ハよく馬を走らす人ハ有ハ試ミよ自個と並びテ競馬の勝負を試み玉ハ自個若シ負たらんハ此頭を參らそ可まと領を敲きて言体最したり顔なり見物の中より若き人出て彼ト馬を並べて走ら爲る物有と實ハ彼が言しに違ハず皆半丁餘リ乗後れて及ぶ者無し此有る人々愈々感じて褒立れば此男扇うち披き臂を怒らせて打あふぎつ、言けるハ凡そ天下ハ我ハ優す可き馬乗ハ有ず然るハ浩る田舎ハ住る人杯の僅ハ耕耘ハ暇ハ瘦馬ハ乗たる分際マて我ト立並びテ馬を走らせんとの嗚呼なりとや言ん片腹痛き事なり奈ハ見物の人々我頭不ーと思さん人ハ爰ハ來つて走り競べして見玉はずやと云テ高やかに笑ひて席の上ハ丈六ろきて居たりけり松光惡く思ひて竊ハ山人ハ呷きけるハ此男の馬を走らす事疾しと雖も先ハ自個師の

作りたる馬ハ乗テ駈させたるハ及ぶ可らず此男餘リハ人もなげハ誇るが惡ければ木馬を引出て彼ト勝負を試んと思ふなり然と例の如く走り過なハもと來し道ハ返りなん止む可き時ハ止む可き法や候と言ハ墨繩笑ひて木馬の舌とらへて前ハ引ハ忽ち止る様ハ作りてあり然と益無き争ひなれを無用なりと言ハ松光聞入ず馬につけたる行季をとろし馬の上ハ勝りテ手綱取テ歩ませて彼男に言けるハ宣ふが如くならハ世ハ未曾有ハ馬乘マて在すらんいざ勝負仕りてんと言墨繩山人ハ笑ハを隠して見居たるハ彼男ハ扇を遣ハ止テ松光が方を見テ腰ハ据体大方ならぬハ習ハ有る人を見テ候自個が頭を洩所望ハ候やと冷笑ハつ、手綱取テもらりと打乗松光が馬ハ鼻を並べて去來と言さハ駈させたり松光故意二三間後れて駈させつれと強ク綱を引詰つれハ木馬ハ矢を射るより疾ク中を飛で走りぬ松光馬場の塚マて木馬の舌を引ければ案の如く止りぬ振返り見れば彼男ハ一町余り後れたり見物ハ人々松光と褒よみて驚きまで騒ぐ諸馬を此方に引向テ長閑ハ歩せて彼の男に對ひテ不思議に勝を取テ候さしも天下ハ双あき人ハ奈ハして後れ玉ハしと言ハ彼男手を摺テ松光を拜みて天晴由々敷道の達人マて在せるかな自個七ツと申す歳より馬術ハ心を入れて天下ハ敵無しと存じ

いふ君の如き人も在しよしけりと言見物の者彼を悪がりて契約なれば頭を渡し玉へと言バ
彼男頭を縮て頭の二ツ二ツ惜と存せざれと只命の惜く況て田舎人の頭なれば都れ土産
よの見築無候はん少選我胸預て玉へ其方よて用無き者ながら我方よ有りての重寶れ物
よて候と戦慄く言松光笑ひて今日の對面の引出物も頭和主よ奉るなりと言バ此男悦ぶ
事限り無し楮松光が馬を熟々見て天晴の馬よて最前より少選が程聊か嘶だも致さ
るの名馬のしるしよて夜中敵陣を襲ひいよ兵士枚を含みて音を立ざる時々様の馬ならざ
れ用ひ難し借も限り無き逸物よていと追従するを有る人々罾り笑ふ墨繩又松光をして木
馬よ行李負せて其所を出て行進松光お對ひて活る戯れ無益の事ぞと言バ松光然と今日斗
り微少人お褒ふれて面目を得ていひきとて笑ひつゝ行く一里斗り行て山人草鞋よ足を食れ
て術あしとて惱まければ未だ日の高けれと此邊り宿り取ばや迎打見つゝ行バ人の家有り
入て云々と言ば妻と見えて四十斗りなる女の眼 鋭なるが出て我家人を止めず外お往て物
せよと情無く言よ足を痛めたる者のいひて歩み悩みてい争で免させ給ひて一夜明させ玉ひ
なんと言バ彼女大なる聲して心無き旅人かな止じと言バ疾出て行く可きを強ちよ何をか言

疾出て行ぬと云さま人々を突出して戸押立つ人々の借も情知ぬ女かなと思へど詮方無れば
悄悄出て行よ又戸を理より聲して旅人先づ待玉へ申可き事有り此方入玉へと言ふよ入て見
れば主幸と見えて六十斗りの翁の眼盲たるが這出て足を病玉へる人の在すやと心苦敷事あ
り止め參らせん疾々草鞋を解玉へと言バ女の腹立て翁を白眼て今宵の草鞋殿も來んと宣ひ
しよ旅人をさへ止む可しやいと言翁耳ふもいれで奥の方を指さして彼處よ離れたる家有り
入て憩ひ玉へ迎意よ言付て人々を誘せ又同く童よ夕餐は賄 坏爲すめり人々の一室よ入て
主幸が心ざしを悦びて言はやす松光木馬をぞ庇の外よ繋ぎて行季取て奥よ入んと爲る時表
の方より人入來り此男は大野の草飼として此女の兄なり生れつき邪ある者よて盗心ある男あ
り妹を此主よ遣て此翁が財多く田畑を夥持るを見て我物よせバやと思ひて豫て妹を計け
るお妹も老たる男を厭て兄と一個お成て財共奪ひて此家を通れ出んの心有り借此草飼入來
て妹と差並びて翁よ對ひて居るを松光目を付て見れば先よ引馬野よて馬を走らせ争ひたる
男なりけり驚さながら知す顔作りて聞耳立て居れば草飼女よ對ひて奥の客の何處よりぞと
言バ見も知ぬ旅人を翁の泊られえなりと言草飼眉を皺めて頭を搔バ女硯を取出て何事をか

紙よ書て見すれば草飼も又筆取て書付杯す互ひも幾回か思ふ事を書き代して見つ見せつ爲
るを翁の更も知ず松光此兄と妹が舉動怪しく心得ぬ事よと打守り居たり然るも表も彼男の
乗來る馬を繋ぎ置たるが俄も狂ひ出て嘶きければ草飼も女も表の方より出て見る此閑も松光
竊も出て主の傍なる文を取り來て山人は讀て見玉へと言も開き見れば草飼が手と見えて書
付たるの折悪敷旅人を泊つ豫て謀事今宵の行れじと書て有り又女の手よて旅人の別屋よ
臥たればよも知る事有じ今宵の中も左も右も計り玉へ明日と成ば翁が子の旅より歸り來
可し戸の海も入べければ人知る事有じと書て有り墨繩も取見て驚きて偕に此男女云合せて
翁を殺さんと爲る成る可し惡き奴かな争で此由翁も知せてん杯言居たるは童夕飯持來て人
々も進む翁壁を搜りつゝ奥も來て參りす可き物も候はず折節子なる者の旅も罷りて候得ば
萬づたいく敷心よ任せぬとと言墨繩翁を片隅に招きて聲を低く爲して斯々の事有り
告れば翁驚きて言けるは彼の自個が妾よて此事我も日頃疑ひ思ひ得共彼等か斗りの工
せんとの思ひぬはずと悚ければ先づ知す顔作りて居給へ自個計ふ可き事あり斯々なし給へど
教へければ翁の伏拜して彼方へ出ぬ墨繩行李より斧鋸など取出て一時斗りして何をか作

りけん出て松光に囁きて云々計らへと教へければ松光竊も出て草飼が馬有處へ例の木馬を
曳行て鞍手綱をも取替て草飼が馬を裏の方へ引行て繋ぎ置ぬ主の翁の宵より臥房も入り
て臥つ墨繩の山人は囁て今宵の寐たる振して眠る可らずと言合せて互ひも空齎かきて臥
居り夜も更て丑もや成ぬらんと思ふ頃草飼表の方より起出來て廚も臥たる女も叩きて足音
を忍びて主が臥房も入り太刀引抜て窺ふよよく寐たるを見えて息だも爲されば仕濟しぬと
乗懸つて胸のあたりを刺通せば手足をもがくのみよて聲をだも立ず死てけり女萬籠を持來
りて死骸を入んとして草飼と共死骸の腰も手を懸つれば思ひ懸す主の死骸むくくど起
上りければワツと言て女も草飼表の方へ駈出す此死骸手首打振りつゝ猶追て表の方へ出れ
を恐ろしくて魂も身も添ぬ心地して戸を推明て駈出ぬ女も同じく走り出れば草飼慌てたる
中も廂の外も繋ぎたる馬惹出し女をもかき乗せ我も尻も打乗たるよ此死骸猶追來ぬる心
地すれば疾爰を逃ばやと手綱を強く引つれば馬の東を投て駈出しける幽霊も追來ぬ容子
なれば馬を静も遣んと爲れど此馬少遷も猶豫事無く一文字も走る事比可きも物なし女の幽
霊よりも此馬に魂を失ひて消入斗りも成たるを男の引揃つゝ馬の走るに任せけるが天瀧川

と云川よ入ける時目も昏惑て兩個共よ水よ落ちてぞ死ける馬ハ川を涉りて猶東を投て駈行けるぞぞ儲墨繩山人ハ奥より紙燭さして表よ出て見れば案の如く女と草飼ハ見はず廂の下ある木馬も有ね心儲ハ謀の如く草飼めハ木馬よ退れて走りつるならんと言ハ山人必ず川よ陥りて命失ひぬ可し心から不便事なりと言松光此方の方より主の手を取り出て雷よ竊よあせ倉へ伴ひて共よ今迄忍び居たりと言へん寔よ不思議の命拾ひハ事悦び聞え奉らんと詞も無しと伏拜む松光月蔭よ向ひある方を見て彼處の人の立て窺ひ居る体なり萬一草飼めが立歸りつるならずやとづか〜と走行て後より無手と抱きて汝ハ草飼おやと締付れ〜此人應も爲で手を振ハ草飼よ有ぬとあらハ物を言かしと言つ〜よく〜見れば昨日墨繩が作りつる木偶よて主れ翁れ顔を其儘よ寫しえりたるなりけり是ハ松光雷に翁を臥房より引出して代りよ此木偶よと入置しが機關を用ひて此木偶の自己と歩も出んとハ思はざりしとて手をた〜きてぞ感じける夜明ぬれば人々立出んと爲るに翁只管よ止めけれを限り有る旅あり又社と契りて松光よ行季荷ハせて別れて京へぞ上りける此翁よ榛原の某とて昔より爰お住て由緒有る百姓ありとてか役木偶ハ其後此邊りの寺よ傳へて飛彈の匠が幽靈の像とて什物

と爲しけるが後れ世の兵火に跡も無くなりて今の其寺の名だも知る者無し惜む可き事なりかし

○ひさもんでん

猪名部の墨繩ハ都よ上り付て山人よ別れて所々登き所を願禮して五畿内の邊りをも經廻てけるよ所々に堂舎の造營有ば一日二日止りて匠等が手よ餘りつる事共を作りて力を助け遣ハしける常の匠共が五十日も隙取る可き業を一日斗りお作りてければあざみ驚きて褒啓る者多くて墨繩が名益々世よ高く響きける松光も然る人を師と爲して付添居ければ今ハ比類無き上手の匠とぞ成ける墨繩かく所々ありきて半年三りを經けるが山人が身の上覺束なけれハ例れ松光を具して又都へ上りて山人を尋ねけるよ山人ハ大内の火焚屋ハ衛士と成て有けるよ行逢て少遷打語て居けるよ年老たる衛士の出來て山人を見て打白眼て此若者今朝より伊庭の邊り掃淨よと言付つるよ其役ハ爲で人と物語りして居り常に力無きに假掩て物を果々しう爲す萬づ物憂げよ振舞ふ若漢かなと云さまつか〜と寄來て拳よ上て打んと爲るを墨繩止て宣ふ事道理なり今日ハ自個邂逅よ彼を訪ひ來れば思ハざる長物語よ時を移てい

免させ玉へと云は此衛士猶打白眼て老たる者を然のみな侮りそ杯眩つ、彼方さまへいぬ山人涙を流して言けるは彼の宗彦とす衛士よて腹悪き奴よては老人だてら色を好むて自個もも千般ふさはしからぬ事共申ては承諾されを腹立ひて常々斯口を絶す罵り叱りていと云墨繩然る事、社今少遷の憂を忍ば、故里に歸りてふ可ければ萬づ念じて日を過すなき云居れるは彼宗彦又出来て今雲滂遊び有ハ疾く木の葉取退よと小槻殿のゆされしを知らぬか怠るも時ふ寄るぞと言墨繩も心苦しうて疾別れて出て歸りぬ歸る道よて匠等三人斗り打連て向ひれ方より来るをよく見れば同里の者共なり奈ふやと云は此匠も悦びて我々百人斗り徴れて武樂院の造營仕まつりい處此頃疫病を煩て五十人斗り枕を並べて打臥ては司よりの限り有る日數れ定めい得ハ定の如く作り出すいハいみじき罪よや行ハれんと易き心も無ては只今も病者等が藥索めん迎醫師許へ參る道よていと言ハ墨繩が曰く偕ハ心苦しき事なれ同國の人々の然やうハ苦み給ふと余所に見ん道理なし自個力を添て俱々造營仕まつらんハ奈にと言は匠等ハ偕ハ嬉ぢかりなん然ハ共ハ在して助けて玉へとて誘て行墨繩匠共が臥居る所よ入て見るハ病ハ堪で愛目見るさ目も當ふれねハ先懷より務

枝どり出て煎じさせて香と偕内匠司も其由惣へて翌日より墨繩松光造營の役所よ入めて營も作る然るハ五十人斗りの病者もも務枝を煎じて飲けるより精神爽び病をも忘れぬ迎督打連來て墨繩ハ悦びを言墨繩が修練工夫ハ凡人ハ知る可きならぬと此回の造營百人の匠等が集りて一年と經るとも成就心元あしと言あへりし墨繩松光が來てより三十日を經ずまて此造營残り無く出來てまかも細なる彫物など草木鳥獸の形まで生るが如く作り效しけれハあらゆる匠共ハ更あり匠司さへ見驚きて誠ハ凡力ハ有ず神仙の下り來玉へるある可しと言て褒めへりけり恁て都ハ住ひて爰かしこの寺社の造營ある所ハ到りて匠等に交りて其職をすけ遣ハしける其頃百濟國より繪をよく爲る人來り此繪師墨繩が藝ハ神妙なりと聞て嫉きことと思ひて言けるハ墨繩假令匠の道ハ妙なり共我繪にハ及ぶ可らず彼を喝して見んと云て一日墨繩を呼よ遣りけるハ墨繩使と共來りて廊ハ有る兩戸を引明て人んと爲るハ壁ハ黒と脹れくさりたる男の臥居る体を畫きたり偕ハ我を計りて其道に誇んと爲るなりけり彼も世ハ知れたる人なり恥見せんハ中々ありと思ひて鼻ハ袖を當て阿那六ツかし絶難しと言て逃出て歸りぬ其後彼百濟人は人ハ語りて墨繩が工我畫ハハ劣りぬ迎誇りけるを墨

繩よ告る者ありければ墨繩笑ひて然らば聊か其報答せんとて百濟人の許へ使を遣りて現よ
光臨と云遣りければ躑て來りける使の者小き堂の側へ案内して是より入せ玉へと言葉て堂
の後の方へ入ぬ此堂四面は戸皆明て有り百濟人縁に上りて南は戸より入んと爲れば其戸礎
と閉ぬ驚き廻りて西の戸より入んと爲れば其戸礎と閉て南の戸は明ぬ北は戸より入んと爲
れを其戸は閉て西の戸は開きたり東の戸より入んと爲れば其戸は閉て北の戸開て斯く數回
入んと爲るに閉つ開きつして入事を得ず妬き事限り無れと詮術無れを立歸らんと爲るよ始
め入たる門は閉して鎖下して有り此方よ小き門の明たる有れば彼處よりと思ひて行くよ此小
門の許は横たはりて人臥て居り見れを脹くさりて穢き男の死たるなり匂ひさへ鼻を打て堪
がたかりけり然る此門より外は出可き道も無れば裾を掲げて此男とまたぎて通らんと爲る
に此脹くさりたる男手を上げて百濟が裾を捕へつ振放さんと爲れと放さず臭き事始よ勝りて
堪へ難し鼻を押へつ、聲を立ければ墨繩奥より出來て何事ぞと言百濟が云く此穢き人の捕
へて放ち候はず臭き事比例るに物なしと言バ墨繩争て然る事いはん逆此男を引立て見爲る
をよく見れば木よて作れる物よて聊か臭き香も爲す儲の我心のなしよて臭しと思ひけるよ

と初て心付ぬ儲逃げ歸りけるが此事の妬く口惜かりければ人よ逢ふ毎墨繩は邪法幼術を
行ひて人の目を昏ます物ぞと言歩行ければ其事檢非違使の廳に聞えて墨繩召捕て問注爲可
し逆應ふ召れぬ墨繩思ひ寄ぬ事なれば千般抵觸ければ此司思かなる人よて曲直を判別す聽
て獄よ入りけり山人松光此事を傳へ聞て愛ひ歎く事大方ならぬと詮術無し時よ帝汚風の心地
迎打臥せ給ひけるが汚惱日よまして重らせ玉ひ汚物のけの様よて勢させ玉へば有驗の高僧
貴僧など壇を作りて黒烟りを立て祈り奉れと聊怠せ給はざれば雲の上天の下れ歎きよ
てぞ有ける其頃女一の宮は汚母汚息所の里弟に中門の前よ異しき乞食法師は物乞て居たる
お中間共帝は汚惱頻りなる事坏物語りし居たるを此乞食法師打きよて我守り奉る汚佛に社
祈り給はめと何と無く打言て出るを中間男ら耳よ留て引止めて言けるは門法師が守り奉る
佛は帝の汚病癒し奉らんとや諸寺諸山の驗ある法師達の祈り給へと効しおはさぬを争で乞
食法師の身よておふけ無き事を言ぞと言バ此法師振顧て住む寺の大きなると袈裟衣れ麗
しければ尊き法師と思ふよやと言捨て出て行く此事傳ふる人の有ければ汚息所聞せ給ひて
其法師徴と有るにぞ侍共五丁斗り追行て惹連て來れば庭お入給ひて簀子よ上せて汚覽する

よ老朽穢けなる法師なりわ法師が中と處床しけれバ微づるぞ帝の汚病おのれ癒し奉らんや
 と宣へバ必ず癒し奉る可しと事もなげよ言然バ内裏へ参りんと有バ争でか参らん乞食の
 身は候へバ畏恐と言然バ爰許よて汚祈り仕まつる可くやと有バ汚祈り仕まつる迄もいはす
 と言て頭陀袋より小きづし一ツ取出て打捧げて中けるハ此汚佛を守り奉りて國々の寺々順
 禮しては道すがら病者を見れば此本尊を開き拜ませては壹人として頓病癒さる者ハ
 はず世も希有れ靈佛にて在す此佛龜開きて帝の汚枕上は据させ給はゞ其驗いひなんとす
 最嬉しき事あり疾此汚佛内ふ奉れ迎汚使出たす諸法師をバ彼所の曹司よ入て物食せよ杯
 仰せ有る程此法師何地いけん行方見え成ぬ人々爰彼處索めけれと行方知れざりけり諸
 汚使ハ内よ参りて内侍の守へ云々と聞ゆるよ内侍此佛龜を取て汚屏風に許へ出る其時帝の
 汚夢よ恐ろしき鬼ども乃夥集りて惱せ奉るを侘しと思し入るよ有限りの鬼ども俄よ手惑
 ひして騒ぎ震ひて言けるは墨繩が作り奉る毘沙門天入來らせ給ふ奈に爲ん疾逃出よと言さ
 ま木の葉の散やうにばら／＼せ外の方へ逃て出ぬと思して汚用覺て汚覽有は只今汚枕上よ
 龜一個据奉りて有り汚心地持に爽せ給ひて此汚佛何處より参らせしと宣ふよ女一の宮の汚

息所よりと聞え奉れば頓て淨手めして龜を開かせ給ひて借ハ夢よ見しよ違はず降魔の尊像
 よ在す迎敷回押頂せ給ひて墨繩と云る者今世よ有や民部よ仰せて疾聞と宣ふ其夜よ成て
 猪名部は墨繩とす者飛彈の國の工よてはが今獄屋よ込ていとすす帝驚ろかせ玉ひて疾
 呼と宣ふ女一の宮も帝れ汚病全快せ玉へるを悦びて参り給ひ彼佛龜持來れる法師の事杯聞
 ぬさせ給へば帝汚涙落して感じ給ふ少選有て司人墨繩を將て階下よ畏る帝彼龜を開せ給ひ
 て是は汝が作れる汚佛にやと問せ給ふ墨繩さんいとすせ然ハ何者よ作りて與へつると問
 せ給ふよ墨繩答へけるハ自個武藏の國よハ時石濱ある芦屋ハ船主が爲よ作りて與へは奈よ
 して汚門の汚わたりよは参りてはまると勅答す諸事の子細委敷問せ給ひて世に稀なる工
 ありまろが代よ恠る者ハ出來たるハ未の世れ爲よは磨さへ面起せる心地す恠る者を囚よ籠
 たるはいみじき過誤迎別當を勘じ玉へバ別當面目を失ひて引籠りぬ 帝汚悦びの餘り墨繩
 をバ直様内匠司よ任じ給ひ尊敬し玉ふ事大方ならず墨繩此程の苦しみよ引換て面目を得て
 罹り退きぬ山人松光も待付居て悦ぶ事言ハ更あり彼百濟人は面無や思ひけん行方なく跡を
 藏して逃行ぬとぞ此百濟人今昔物語よ百濟川成と記せるは傳聞の異者なり又飛彈の匠と

の記して姓名と記さるるは奈なる故か訝かし

○よめの法師

更衣原の女一の宮の年來佛の道とのみ慕ひせ給ひて奈で思ふ如く髪をも落し山寺に搔籠り
 なんと常れ洩口遊よも曰玉へるを父帝有間敷事あり若き心よ左様と思向玉ふとも後悔
 給ふ時有んと曰ひて許し給はぬを中々愛事よ覺して春秋の花紅葉を洩覽するも只世の無
 常をれみ觀じ給ひて朝夕洩珠子を放ち玉はず行ひ馴たる尼君の様よて過し給ひけり姫宮の
 斯覺し詰て在せば父帝も強ち洩聲れ君をも探ねさせ給はず洩心の改まりて世づきて見
 え玉ひなむ其折よ社迫め聞ぬよとて強ても曰はざり鬼姫宮の洩心よの實事の去年の晝寢の
 洩夢よ可愛人を見給ひてより一筋よ戀しと思ひ給へども墓なき夢れ面影れみよて確かよ世
 よ有る人としも定め難し縦ひ似たる人有とも所狭身よは如何で逢見ん縁由あらん愁中よ生
 存りて心よ設ぬ夫設けて無端き世よ有んより尼と爲て社任めと只管よ思ひ定めてぞ在しけ
 る帝ハ墨繩を愛し給へる餘り常よ洩傍小召て物造せて洩覽す夥多造れる物れ中に奇しき
 猫れ生たる如く動作を太く愛させ給て墨繩よ持せて姫宮の簾近う參らせ給ふ女房達此猫を

取て姫宮よ見せ參するよ戯走る容眞の猫小達ハす迎甚く興じさせ玉ふ墨繩人々の笑ひ興ず
 る聲れ噪しけれハ何と無く簾の間より差覗き見奉れば繪よ書たらん様なる姫君の机下添
 て在します洩傍よ大なる瓢の螺鈿の臺よ据て載て有り目を注て見れば仙界よて見し瓢よ遊
 ず若き洩侍女の櫛子よ菓子盛て墨繩が前よ持來るよ彼の瓢ハ如何よして得玉へりしと問へ
 ハ姫宮の生れ玉りし時洩屋棟よ落たれば取納め給てより常よ洩傍放たず弄物ハ仕玉
 ふ也と云よ扱ハ此姫宮凡人よハ在せざり鬼と思ひて罷出て後男の仙人の形を其儘よ寫し取
 て姫宮の許小奉りぬ姫宮此像を見玉ふよ去年の夢よ田舎よて語ひしと見玉へる男の形よ違
 所無けれハ大よ驚かせ玉ひて墨繩を簾内よ召て時ハ如何なる人の形ぞと尋させ玉ふ墨繩が
 曰く此人形ハ宮よ住せ玉ふ洩男君よていと申せば姫宮坐よ嬉はせ玉ふ中に思ひ運らし玉へ
 るハ墨繩奈で我夢を知たるならん思すなる事ハ社あれ迎返すく不審しう覺しけり扱又火
 焚屋よ居山人ハ日々宗彦よ使役れて辛きめを耳を見ける今日も宗彦が後よ從て洩庭ハ隈
 々帯もて掃歩けるが過ちて躓き倒れて洩階の元なる菘蕨の小枝を折けるを宗彦見より立鬼
 りて衣れ首を捕へて心無の乞兒よ上げ殊に惜せ玉へる物を已足の先に掛て折割たる叛逆れ

罪人なりと云様拳以て健かよ打山人苦しければ是の過失なり宥させ給と云ば己れ人の手足
よ疵つけて後過失ありと云んよ人宥す可かは利口氣よ云廻す社悪けれ迎落たる帯の柄よて
又強かよ打鳥帽子も落白丁も破れて額の邊より血走り出て衣さへ赤よ染りぬ轉倒れて伏居
たる脊中を足よ上て健かよ蹴蹴りて氣味好しくと云つゝ火焚屋の方へぞ出て行ける山人
ハ一時斗り心も付で伏居けるが漸々心付けれを強く打けれハ立事叶ず息切て苦ければ汚階
の元よ雨淫れ水の溜たるを坐行違よ旬旬寄て手よ結びて香逆水よ寫れる我顔を見れば眉間
破れて顔も血よ染有り思ハ口惜とて破たる袖を顔よ當て酒然と泣居たりけるが思餘りて聲
を揚て獨言よ云けるハ何や斯苦きめを見らん我國に七ツ三ツ造拵たる酒壺小差渡たる額の
瓢の南風吹ハ北よ靡き北風吹ハ南に靡き西吹ハ東よ靡き東吹ハ西よ靡を見ハ心も浮て面白
りりしよ奈あれを遠き世界よ漂ひ來て斯て在よ彼瓢ハ如何よ成ぬらん杯獨語して小言つゝ
又聲を揚てぞ泣よける此折柄女一の宮ハ藤の元近う御座参りて藤よさせて汚庭の方を見出
して在けるよ山人ハ露も知で小言く泣居たるを汚覽じて坐に憫を催し給て此男の恚語
ハ何よか有ん憫よ不便しき心地ぞ爲る奈なる瓢の奈よ藤らん最床敷こそ思るれ彼男此方寄

と召けれハ數多の汚達口々に汚前の召せ玉ふぞ其男此方參れと云よ驚きて振仰て見返れば
貴紳女房達數多并びて居給り其中よ殊よ艶麗に美しく見させ玉ふハ女一の宮よてや汚座
すうんと見奉る姫宮も山人と汚目見合せ給るよ去年ハ夏汚晝寝の夢よ見玉ひてより忘るハ
間も無く戀と覺しハ其人よ正しく違す轉び下て物云んと迄思しけれ人々れ目を憚らせ給
ひて姑し物も曰はで熱々と打守りて在しぬ山人も少し這寄て見上げ奉るよ心迷斗りよ成て
染々と汚顔よ見奉る俱よ代を社距て給ぬれ契深き謫仙ハ在れば自然よ心よ染て愛襲と思
し交すある可し人々の此方來よと有を幸ひよ汚階近う這寄ハ云つる事今一返云て聞せよと
仰らる山人酒盞の事を今一返中けれハ姫宮夢の事を思し合せ給て汚傍ある瓢を取て風よな
びける瓢と云しハ恚る物よやと曰ふ山人伸上り見て是よ聊か違ひはず但し是よりハ今少し
大やうよてハ男女よ比べハハ是ハ女の瓢とも申べくやとやせハ打笑せ給て又彼のハ人形取
出させて是見て有と曰ふ山人能く見れば我形を宛然摸寫取たる人形なれば怪と見居たるよ
汚傍の女房れ云けるハ此衛士ハ顔に覺たる所有りと云ハ女房達山人を見て奈で恚る人の衛
士ハ成たらんと驚々く愛襲る山人此人形ハ飛彈ハ墨繩が作ひひげんと云ハ老たる汚達の

出ては墨繩を知りやと云山人墨繩の我兄と頼たる者よていと中せば手を拍て扱の衛士よて有可なりす此由奏して彼を墨繩主の許に遣してん杯云ふ姫宮は盃玉のりて猶只管又倦めも爲で打守り在る物打云たる景容杯此世の人としも覺す床敷さ限無て久く入玉は在せば人々日暮ていひぬ入せ給さん涉裕子參なん杯云ふ姫宮山人に目を配玉ひて奥山は棋の板戸をどいとしてと曰ふ時涉傳女立寄て強ちよ涉羅卸しつ人々も立て教唆奉れば心よも有で澁々よ奥入玉ひぬ山人の鬼よ魂奪れつる心地して猶涉羅の裡を窺へど名残なく入ぬと見て人氣も爲す懸奈でと思身の賤さを願見れば忝くも嬉しくも恐しくも恐多くも種々に思ひ運されて唯涙浴ぬ思運すよ奥山は棋の板戸と曰し忍て來よと曰ふ謎々よや何にも有れ子細社あつめ迎猶立去で涉階の元よ踞り居ぬ亥過る頃よや侍女の聲して涉猫の見いはす此許よ出つるにやと云つ戸を開て涉階の元に出て山人が許よ寄來て聲を低めて其所に在すよや先是着玉へと云様提帶へたる法師の衣打着せ頭巾に顔隠させて若人答なば夜居の僧ぞと答玉へと云て手を取て涉階よ登り行く山人恐しけれを導く儘よ入て行よ人々の皆寝たるふや屏風杯立たる所を數多過てなげし有る所に登せて此侍女の彼方様よ出ぬ山人入も

遣で躊躇て有る空燻香り微妙匂へるの姫宮のお坐所なる可し涉顔差出て此方よと曰バ恐怖涉襖の上よ這登りぬ山人素より類無き美男子乍今日宗彦よ打れて雪の様なる手足も土に黒みてむづかしきに有ぬ衣をさへ着たれば我さへ彷彿なき心地すれば姫宮の奈よ思すよんと氣も蒸りてまどくたふ可も有す姫宮の去年の御夢語を始て月頃の涉思ひ崩し出て曰ひ續くるよ此方も思寄ぬ瓢け家よ入來りし事杯聞え出て偕へ此世なうぬ縁也けり迎打語ふ程よ鶏も鳴ぬ例の侍女來て又手引て夜部の戸より押出しつ之を始として斯忍びつ參通ふ事日頃は爲ぬ去ぞ知人も無り是此夜居の僧と中の昔物語語も數多記せる事よて涉持佛堂よ信じ玉ふ法師を入れて通夜誦經させて護身の涉祈せさせ玉ふ是を御持僧とも中なりとぞ此頃參れる法師の横川の邊の人よて母涉息所の涉兄上の宰相とかや中せる人れ子にてぞ有ける姫君との涉親族よて在せば隔意てさせ玉ふ涉問ひ爲す且行ひも微妙人あれバ迎此法師を召て年頃夜居の僧との頼給ける然るよ此法師面の最殊勝なる顔体をして尊氣よ見れど心好みて法師輩極き色好よて有けるが恐多も何時しか此姫宮を思初め奉りて深く戀れければ聊色よも出さで有ける思ひ餘けん得包と果で或時法問の事聞る席よ凡帳の隙より結たる多を

差入つ姫宮泉て投返し玉ひける憊る事度々成けれど一族の筋なれば人聞も苦く思して人
よも曰ぬを此法師頼所も思て折々汚衣の裾杯を引動す事数度なれども姫宮の知す顔作りて
在しぬ一夜法師例の汚持佛堂に籠て誦經して居けるが頻に戀慕の心盛に成て今宵姫宮の汚
寝所に忍入て想ふ事聞えバやと思立て汚佛間を出て汚階に方よ呻吟居たるは例の媒の侍女
出來て山人ぞと思ひて手を取て引入つ法師思懸す嬉しく引れて行なげしれ所まで連行
けるが此侍女入口に戸を忘て閉ざりければ又汚階に元よ歸來つ山人の今宵も例の如く法師
の扮且して忍來けるは此侍女來合て怪て誰ぞと問山人自己ふいと云バ侍女近寄て顔打見て
慌て扱へ今程引入たる法師の有ぬ物よと再び奥に隠入て見れば先の法師汚屏風の此方に
伺ひ居たり手を取て引出す法師出じと争ふを侍女聲を立んとするは佯しく詮方無て又手を
取れ引出されて元の戸より押出されつ本意無氣よ振返見れば此戸は添て法師一人立り夫を
内に入て此侍女戸さし固めつ扱へ最初も我を引行しの後よ來る法師と思違へつる也と思バ
妬き事限無し奈で此儘に置可き耻見せんと思ひければ聲を揚て宿直れ人々出合玉へ爰に盜
人法師入ぬと大聲に告げ人々太刀弓矢杯手挟みて出來り此戸口より今程盜人法師の入てい

借に見ていと云よ宿直人聲を揚て此戸開玉へと云バ内に女房の聲よて何事ぞと云て戸を明
つ是は盜人の入ていと云バ何條左事候候んと應答を法師耳にも入す即ち奥を差て走入ぬ
姫宮のなげしの此方よ山人が衣着て忍び居たるを見より引捕へ小脇よ抱きて汚階の方へ駈
來りて盜人生擒ていと云様膝の下よ引布たり宿直人等美妙も仕ふれつと云折柄弦打して廻
る夜行の人々を呼て是を引縛れと云て汚階より引下せば聴て高手小手よ縛り上つ先何者ぞ
面を見よと云バ頭巾を脱せて見よ色白く好男なり見識たる者や有何處の者なるか水喰せて
白状させよと云此際ぞ大方ならねは有と有ゆる人々馬部吉上の輩迄走り來て罵り散動其
中よ衛士れ宗彦走寄見て云けるは此盜人の火焚屋の衛士山人と申者ありと云ふ然バ打据よ
とて數多の雑色杖を振揚力よ任せて打つ適れ可憎しき一人の流風男死て芝生の露とや消ぬ
らんと心有る人の哀れみも爲つ可ま法師の美妙高名しつ迎佛間よ入居けるが夜明ぬれば歸
らんと爲て庭よ來て奈に盜人の白状爲つるよやと問雜色等が曰く斯斗り強く打へ共今よ
白状仕らず強情奴なりと云兎角爲る程よ明放て鳥杯も飛交へ鳴く猪名部の墨繩に今宵の宿
所よ有て臥けるが山人が捕られて憂目見るありと聞て驚て走來りて一目見るより雜色等に

對て是何者か生擒一と云バ法師爲たり顔は自個生擒ていと云ふ墨繩が曰く此者の盗み爲可
き人に有ず何て捕へ玉ひまると云バ法師躁立て渠が物盗んと爲るを自個見ふせて盗人と聲
て捕へつれば渠戰つゝ負れ盗みては宥させ玉と申ていへる盗人に相違無しと云ふ衛士の宗
彦も宵より管打て居たるが口を差出して盗人よ違すと云墨繩曰くよも法師は妄語の曰はじ
愈々渠が自盗人なりと名乗いやと押返して問心法師宗彦口を捕へて盗人と名乗一と相違無
念念を入れて問人哉と云バ墨繩カラ一と笑て是の已が作りて姫君よ奉たる木偶なり木偶は
物云べき理無し疑ハ敷バ是見よとて些き鋸取出て脊の邊を少し引て鬚を一握爬出
して法師が目先へ差付つ法師の呆れて口籠れば雑色等も呆れ惑ひて夜部よりこゝら骨を折
りて白狀せよと苦打つるよ物云ざる社道理なれと顔見合せて笑ひ出す折柄階の御簾卷上
て女房達御乳母勾欄の元ふ立て姫宮の殊々大事と爲玉ふ御人形取出しつる耳已ならず御庭
よ引下一管打て碎き損ひつる者共追遣とれ勅諭ぞとて御所を罷出よと云ふ法師の素より宗
彦も色を變て振出す墨繩法師よ打向ひて此木偶は物言せ見るの自個が細工は優りたる貴僧
の法力は候へる盗人の和僧よ玉りつ寺よ連行て心任よ斗はれよと細取出て法師が脊よ彼の

人形を縛り付て又宗彦を打見て己宵より此木偶を管打たり一法師が方人を見られたれば法
師が供して送行け迎宗彦を繩もて縛めさせ餘は繩を法師が腰に縛付けつ衛士等數多管を揚
て勅勘の者共疾く御庭を退と打立よ然者れ心よも取しとや思けん顔をだも得上ず踰眼つゝ
歩て出行ぬ此法師已れ戒を破乍ら人を盗人よ陥れんと謀つるが疾く身よ報來て中々恚る耻
見つるハ一偏は佛菩薩の御罰なる可や後よ聞バ霄は法師が聲を立つる時待女心利たる人よ
て山人をバ外の戸口より逃し遣て人形よ袈裟衣を着て斯ハ欺きける也とぞ

○せねのはし

其後日頃經て 帝姫宮れ方よ渡らせ在して何時迄獨り住して在を可なす麻呂宜敷人よ見
附置つ彼を男と定め玉ひなん杯宣ふを聞は胸ひしげぬる心地爲玉ひて該夜山人が忍び來る
時云々父 帝の宣ふあり疾何方へ成り共將て行玉へと宣ふ山人が心よも此姫宮よ別れ奉り
ての生て有る可し共思はれぬを然バ左も角も計ひ奉りてん但此御所より忍び出玉はんの守
護る人々多ければ人目煩はしうぬべま御息所の御里よ渡らせ玉ひて彼所より忍び出玉はん
よハ心易るべしと云斯く示し合せ玉ひて翌日姫宮ハ物よ仮托て母御息所れ里弟に移らせ

玉ひぬ山人の松光を語ひて奈で姫宮を盗出んと三日斗り御息所の築土の邊と親ひ歩ける一夜能くしたゝめて山人も松光も黒き絹よて覆面と云物作りて顔を隠して彼所の御所を差て行ぬ宵暗よて小闇けれと懸る時よ月の無社嬉しけれ迎御庭ある垣の融よ添て伺ひ居たるよ思よらす内より此垣メリと押破て出者あり近て見れば編笠着たる法師の大なる笈を負て行膝突たるが長き錫杖を引提て現れ出ぬ怪と見て在バ此修行者東を指て歩行ぬ彼の盗人よや我々も渠が破りたる垣よりや入んと云合せ居程館の裡俄よ喋く人走違ひて聲々よ何事をか呼て走歩く姑ま躊躇て有ば中間男彼の破たる垣の元より出て爰よりや出玉ひつとんと云よ近寄て何事ぞと問バ中間息吐つゝ姫宮の今の程見えさせ玉はず御館は喋大方ならずと云様又垣を潜て走入ぬ扱今の修行者の奔奉りて笈よ入て逃つるなるべし然ハ去る月追拂れし横川の法師めよや有ん引捕て奪返してんと松光も俱々よ跡を追てぞ追駆ける夜も稍史渡りて臥待の月高う登て盡ろと思斗り明く成ぬ山人松光の息吐敢ず走けるが辛じて追付て二人して遣じと組付つ修業者二人を突退て錫杖を頭よ鬩して打て蒐る此方も刀引扱て互よ姑し打合是笈の内よ姫宮の御聲よて泣玉ふ事限無し互よ力を盡して戦ひける程

覆面も何時か飛散修行者が笠も地よぬ折柄浪出る雲間れ月の掲焉小光り出たる小山人が打込刀を錫杖よて受止る程屹と顔を見合せて汝の竹芝の山人ならずやと云よ此方も驚き透し見れば這の如何よ思寄ぬ石濱なる船主法師なりけれハ驚く事大方なうず松光も刀を捨て借々危かりし事よ迎互よ無事をぞ悦ひける山人先づ問けるハ心得難きハ何とて法師の御身よて姫宮を奪て退給んとは爲給る仔細承 へらんと云バ船主笈を地よ卸し戸を開て姫宮を出し奉る姫宮轉び出玉ひて磨の都より武士共の追來るならんと思つるよ早も來り給る哉と山人か縋りて泣玉ふ船主涙を散然と溢して老朽たる此法師が姫宮を奪ひて何よか爲ん和殿の許よ誘ひ奉り夫婦と爲し奉らんと扱刑斯ハ斗ひつれと云よ愈々不審晴す自己姫宮よ忍び逢奉りし事奈で疾知せ給つると問バ船主愈々涙せき敢ず云けるハ我 回國修行の身と成しハ娘が追福れ爲なる事ハ貴殿の知る所あり然バ夜と無く晝と無く鉦打鳴す度毎に娘紫が佛果菩提と稱ざる時も無く又佛號稱する度毎よ不便の死を爲せし事よと後悔爲ざる折も無し今ハ天堂よや生れつらん但心の迷よて地獄の苦患や受らんよ一時片時も娘が事思出ぬ時ハ無くまたへの使道知ぬ我子の脊よも負かしと憶良れ主れ言の葉も我身の闇よ思知れぬ實子

を慕ふ焼野の雉子梢もむせぶ夜の鶴も身の愚さの優りぬ可し恚て諸國を呻吟程一昨日嵯峨野の辻堂に夜と明しつるも眠る共覺ぬ夢の中娘紫が姿我目の前も顯れ出左も嬉しき顔色よて佛天妾が實を哀び生を替て仙と爲し逢萊も生を託させ給ぬ女一は宮と山人君の素より宿世の仙縁にて永世夫婦は契在せは塵縁尽させ給はんよ再び逢萊に至り玉ひぬ可し其時妾も諸俱に箕箒を取て仕へんとす親人早く此姫宮を導奉り山人君も送せ玉へ此婚姻成就せば妾が爲よ千々萬の追福作善も優りぬ可と云かと思は夢の覺ぬ夫より京も出て様子を聞ふ姫宮の御母御息所は里弟も移り玉ひて自個幸ひ春の頃此御息所は御館に參て墨繩の作りたる毘沙門天の像を預奉りつれば是と便となして此御館も行たるも尊敬し玉ふ事限無く寢殿へ呼入給ひて種々厚く扱ひ給ふ隙を見合せ姫宮も策を告げ奉るも素より左様の御心よや在けん能よ斗へと曰へば宵闇を幸ひも笈の内も忍ばせ奉り是迄御供爲つる所も和主達も對面爲つるの之も佛神は加護なる可しと伏拜みつゝ物語る山人の此年頃紫が事と思出て哀と歎かぬ日も無りしは船主が詞を聞て胸開きぬる心地ぞ爲ける然るは是より姫宮の御供して吾妻を差て下る可しと云は船主が云らく己の是より墨繩殿の許も到り此由語りて跡より

下へし但和主達の日敷を經る旅の空も姫宮は御供爲は途中人や怪まん此笈も入奉りて人目を包て下られよと云然る再會の時迄の健康も在せよと互も別を惜つゝ姫宮を笈に入れ奉り松光負て出立時思も寄す松蔭より横川の法師衛士の宗彦刀を抜て躍出姫宮を渡せと告りつゝ山人松光も打て蒐る船主法師錫杖取て兩人が足を打擲れば其儘横も倒れ伏す這奴原の山人主も意趣有る者と覺えたり爰に船主に打任せて各の疾急がれよと云様法師が脊も負し衣取て松光も渡しし在俗の人の笈も負たらん人も審りや爲ん是着て疾行き給へと手をかきて催せば爰も氣遣しと思へども猶追來る人もぞ有と心急れて松光侶俱足を早めて勢多の方へと急ける此橋を渡りける時松光ふと心付て此橋を一開斗り板を放ちて走行ぬ是は若跡より人の追越てや來んどの用意なる可し

○からねこ

恚て山人松光の道も旅の装ひ能認めて松光の袈裟衣打着て法師と見せて頭巾打冠りて笈を脊も負て行尋常の旅だも佗きが習ひなるを況て人よ包て姫宮の御供し奉れば苦しき事數知らず多かり適れ天地れ神も助よ草枕と古き歌杯打誦して山を越川を渡りて床だも無植生

の小屋荒破なる律の宿杯も夜を明つゝ兎角忍びて行く程も果取らず十日餘を経て辛じて遠江の國よぞ着よける日西は片向て海に上霧渡りたる中より鯉共の漁して物擔て行く柴負たる人れ喘つゝ山を下り来るよ入相の鐘の耳近く響きたるも實は夕暮社佗しけれ何處よか宿取まし迎臨つゝ行けるよ千藏古たる松の本よ新しう作たる家あり主人と覺き男の脊高く逞しきが門よ立居て松光が法師の扮且せるを見て呼て云けるは是より先二里斗り程よ宿玉ふ可き家も有す夜を犯して歩せ玉ふにや穢きを厭玉すべし參らせん入せ玉と云よ嬉くて悦び云つゝ入バ此頃作り果つと見て壁杯も未乾かず見ゆ二人が足洗ひ居程主人彼れ笈を奥の間に持行進自ら負て立上りて重き笈にころ候へ傍僧ハ力有る人に社と云て笈を運て圍爐裏の元よ居て薪差くべつゝ湯と沸す二人ハ足拭て家よ入て見よ家の廣らかなれど左せる調度も無く佛壇一ツ据たる耳よて夜の物杯も見えず主人火を打て佛壇ふ明點すを見バ内よ新しき位牌居て有り主人二人が前よ來て云けるハ三月斗り前に家を焼て後此家を造り營い處父にてい者後の月よ病て失いひぬ善からぬ事耳已打續きて佗敷めと耳見てハ斯宿を參するも他生れ縁よて候はん御僧よハ勞給ひつらめと佛前よて看經爲て玉へと松光化を顯さ

じと殊勝氣と景容て云けるハ何事も過去に約束わてハ斯一宿の御恩蒙りぬるも阿彌陀佛の導せ玉ふ事よいと鼻動しつゝ云バ主人ハ庭よ下て花折て水よ洗ぎて位牌の前なる土の瓶よ挿つ松光立て佛壇の前よ寄て數度拜して居素より幼時より匠の道のみ習て一字をだよ知ざれ心況て經文など云物の夢よだよ見たる事無し只主人よ怪まれじと思て口の内にて何事共知ぬ事をブツゝと小言云ふ山人ハ可笑さを念じて主人よ向居たり松光折々聲を揚て唐國人の寐言云らん様なる聞分べうも有ぬ事を云ぞ主人ハ殊よ心も付ず立て食物の設杯す主人食膳を据て先聞し召せと云バ松光看經止て此方よ來て懷中より金椀取出て飯を盛て御佛よ參せんと云て奥に持行て笈の戸を開き姫宮よ參せ立歸て膳よ着て喰ふ御僧ハ何處よ住持し給ると問バ松光口より出任て鞍馬寺と答ふ鞍馬ハ何れ御坊よていと問バ松光然せる坊よて候はねバ名もいはずと云ふ主人如何で名れ無き御坊やいはん戯て曰ふよ社と云ふ松光汗よ成て居バ御山を鞍馬と呼いハ故由有とよていやと云ふ松光鞍馬と名づけいハ物よていと云ふ名も四途格なれば山人も手よ行を屋りて居松光思ひ巡して總て樹立高き所よて日の影を受ずい故くらよと叫いと我師ハやされていひきと云て汗押拭ふ主人御寺の草創ハ何時の代

の小屋荒破なる葎の宿杯は夜を明つゝ兎角忍びて行く程は道も果取らず十日餘を経て幸じて遠江の國よぞ着よける日ハ西は片向て海は上霧渡りたる中より鮫共ハ漁して物擔て行く柴負たる人ハ喘つゝ山を下り来るよ入相の鐘の耳近く響きたるも實は夕暮社佗しけれ何處よか宿取まじし迎臨つゝ行けるよ千藏古たる松の本は新しう作たる家あり主人と覺き男の脊高く逞しきが門よ立居て松光が法師の扮且せるを見て呼て云けるハ是より先二里斗り程よハ宿玉ふ可き家も有す夜を犯して歩せ玉ふにや穢きを厭玉すべ止參らせん入せ玉と云よ嬉くて悦び云つゝ入バ此頃作り果つと見て壁杯も未乾かず見ゆ二人ハ足洗ひ居程主人彼れ箆を奥の間に持行速自ら負て立上りて重き箆にころ候へ涉僧ハ力有る人に社と云て箆を運て圍爐裏の元よ居て薪差くべつゝ湯と沸す二人ハ足拭て家よ入て見よ家ハ廣らかなれど左せる調度も無く佛壇一ツ据たる耳よて夜の物杯も見えず主人火を打て佛壇ふ明點すを見バ内よ新しき位牌居て有り主人二人ハ前よ來て云けるハ三月斗り前に家を焼て後此家を造り營い處父にては者後の月よ病て失いひぬ善からぬ事耳已打續きて佗敷めを耳見てハ斯宿を參するも他生れ縁よて候へん御僧よハ勞給ひつらめと佛前よて看經爲て玉へと松光化を顯さ

じと殊勝氣と景容て云けるハ何事も過去れ約束めてハ斯一宿の御恩蒙りぬるも阿彌陀佛の導せ玉ふ事よいと鼻動しつゝ云バ主人ハ庭よ下て花折て水よ洗ぎて位牌の前なる土の瓶よ挿つ松光立て佛壇の前よ寄て數度拜して居素より幼時より匠の道のみ習て一字をだよ知ざれ心況て經文など云物ハ夢よだよ見たる事無し只主人よ怪まれじと思て口の内にて何事共知ぬ事をフツゝと小言云ふ山人ハ可笑さを念じて主人よ向居たり松光折々聲を揚て唐國人の兼言云らん様なる聞分べうも有ぬ事を云と主人ハ殊よ心も付ず立て食物の設杯す主人食膳を据て先聞し召せと云バ松光看經止て此方よ來て懷中より金椀取出て飯を盛て御佛よ參せんと云て奥に持行て笈の戸を開き姫宮よ參せ立歸て膳よ着て喰ふ御僧ハ何處よ住持し給ると問バ松光口より出任て鞍馬寺と答ふ鞍馬ハ何れ御坊よていと問バ松光然せる坊よて候はぬバ名もいはずと云ふ主人如何で名れ無き御坊やいはん戯て曰ふよ社と云ふ松光汗よ成て居バ御山を鞍馬と呼いハ故由有とよていやと云ふ松光鞍馬と名づけいハ物よていと云ふ答も四途路なれば山人ハ手ハ汗を握りて居松光思ひ巡して總て樹立高き所よて日の影を受ずい故くらまと呼いと我師ハやされていひきと云て汗押拭ふ主人御寺の草創ハ何時の代

よて何人の開かれていかと言ふ松光確と詰りて姑し頭低げて扱言けるハ聖徳太子守屋を亡
して後御建立し玉ひさ然ハ佛法最初の御寺よていと言ハ主人打笑つ、夫ハ四天王寺の事よ
いはいはずやと言ハ松光四天王寺も鞍馬寺も一ツ匠が作ていと言ハ主人興さめたる顔して本
尊ハ何佛にて在すかと又問ハ松光鞍馬ハ本尊を知ず彼奴能く知りて有乍ら我ハ問なる可夫
ハ有ぬ事を言ハ悪からんと思ひて本尊ハ一ハと言て口籠るを攻て問ハ松光漸く答けるハ
當寺の本尊ハ定りたる事無一阿彌陀を居奉る時もあり又勢至も仕り又地藏も種々時よ
因て居直す事よて候と言ハ主人聞も敢ず目を大く爲して打瞋て始より心得ぬ看經の爲ざ
まと思つるハ我推慮りハ違はず汝ハ眞の法師ハ有じと云様突と立て松光が頭巾引除れば
髻有り扱ハ一定盗人なりと法師ハ似せて人を欺き物を奪ハんと爲るならん今見よと言て入
口ハ釣たる太鼓を器々ハ打敲く山人松光も心慌て齒の根も合す坐ハ振ひ居たるハ此一村ハ
百性ハ見えて四五十人斗り手毎ハ棒熊手抹持てが、めき入來て奈ハ盗人を捕へ給うるか
と喧敷さへづりて立并たり主人盗人ハ此兩人ハ疾縛れと言ハ一人進み出て松光山人を太甚
ハ縛り上つ此數多の百姓等主人を敬ふ事宛然主に仕る如す扱兩人を椽より引下して百姓等

竹を以て手々ハ打敲く主人兩人ハ向て我一村總て盗人の來る時ハ家毎に斯鼓を打て合圖と
爲斯斗の設有共知つて網代ハ入て命を失ふハ遁れざる所の天命なりと云て冷笑ハ山人我々
ハ山賊強剝の類ハ候ハず宥させ給と云と奈で聞べき唯只管打敲く主人彼奴等が持來之姫
の重りし社心得ねと云て奥ハ入て笈の戸を開きて見れば思寄す五衣着て緋の袴召たる然
も尊重き上諷の立て在しけれハ驚きて後様ハ倒ぬ百姓等も走入來て皆肝を消して生て働く
弁財天よやとて驚き敢り主人起上て身ハ奈ある人よて御座在と問ハ姫宮應答も爲給ず御
袖を顔ハ押當て泣給ふ扱ハ此兩人の奴原勾引て連來る物あらん水喰せて云せよとて山人松
光を階子に縛り付て仰向ハ伏させ桶の水を口ハ向て低くも水目口ハ入て苦しき云可か
らず姫宮駈出給を百姓等姑拷尋そと云よ又二人を引下して然ハ有の儘ハ云へと攻る山人云
出んと爲しが眞事を云ハ渠等愈々盗人ありと言可と思ひければ兎や言ハ角や言ハ思廻し
て口を開す居ハ口籠るハ勾引來つるハ違じ猶打と言ハ百姓等立て懸力ハ任て打据ければ今
ハ山人松光も息絶々ハ成て打倒れぬ怒ハ姫宮ハ居玉へる笈の中よりから猫の飛出て主人ハ
前を走步て狂遊主人目を着て我家ハ斯る物を畜す不思議の猫の形容よと守居ハ猫ハ種

々狂て人を飛越て走り歩て主人が肩頭を飛付き杯爲れバ主人怒て希有の猫めが振舞哉盗人を糺問する妨げ之と云て佛壇の下より刀取出てヌラリと抜て飛んと爲る猫を礎と斫バ木を切やうなる音して猫ハ兩個に爲て飛散ぬ主人彼の猫ハ片部を取揚見バ木よて作りたる物にて腹の中よハ小き車共何個と作て入て有偕ハ眞の猫ならず機關を以て斯斗リ働く様に作りたるハ奇と言可しと云バ百姓等も手々ハ彼猫を取見て世よハ斯る奇妙ハ細工も有けりと言て愛笑む主人が曰く斯工ハ機關を作る人外ハ聞及バ若此猫ハ飛彈ハ國人なる猪名部ハ墨繩主や作り給けんと云バ姫宮耳よ止させ給て主人が方を見やり給て汝墨繩を知りやと曰ハ主人然ハ彼人ハ去年我家よ宿り給て我父の命救給ひし恩人なれば奈で名としも忘べきと云バ松光ムツと起上て我ハ墨繩殿の弟子なり之なるハ墨繩主の弟よて在すと云ハ主人大ハ驚きて奈にや如何にと云バ松光我去年師なる人よ伴ひて草飼と云者を欺き榛原の翁の命助けし事ありきと云バ主人慌て庭よ飛下二人が縛め引解て介抱す山人も渾く息出けるを主人抱て上坐よ居て湯よ熱よと云て噪く百姓等ハ子細ハ知ぬを俄ハ主人が狼狽て兩人を勦はり扱ふを見て俱々立走て噪晋る姫宮山人よ縋り着給ひて如何ハ心地ハ正よ成給りや逆手足

取て撫摩り給ふ主人遙ハ飛退り頭を燈よ打着て言けるハ偕々思懸ざる事よて殆涉命よも及申す可所に思す猫の機關を見て御身上を知り事よ自己ハ先ハ御宿を參せたる榛原が子よ太郎遠平と申者よて其折柄ハ遠國へ罷ハ所自己ハ留守を斗ハて女めと草飼めが語ハ合せ父を殺さんと工てハを御方々の力を以て父が命を救はれてハ事生々世々忘べくハハ父ハ去月の十五日死去てハハ共臨終の節迄も御方々の大恩の難有き事を申出てハ自己も奈で此大恩身を無に爲ても謝し奉る可と常ハ心ハ掛てハを其報ハ仕らず剩ハ惱まし煩はし奉り太き苦痛を爲せ參せしハ極めたる大罪よて亡命し父へ對して不孝此上も無くハハ位牌への申譯御方々へ無禮の託ハ斯こそ仕うまつめと云様猫を斫たる刀取上臆て腹よ立と爲るを山人松光早く取付て引止め刀もぎ取て鞘よ納て盜賊と疑ハ給つれを拷問給るも理あり若自害し玉はんよハ我々も供々生て有可き様無と種々諫めければ然らバ此命の斗よハ君達の涉供仕り俱よ東へ下る可と云扱百姓共を呼寄て何事をか耳語ハ皆アを答へて歸去ぬ遠平悉き子細と聞て女一の宮なる事と知て斯る賤き山賤が家よ姑も御足を止させ給事忝無や畏やと云て悦ぶ事限無し然るにても此猫を持せ給りしハ能々御心ハ叶たる物なる可を取無打摧き

い事と云は姫宮磨も長き旅路に赴けり斯る物持來べしとの思ひも奇す併し身も代ざる瓢
 一個を手も持て出たりしと思はず此瓢の中は猫の入り有たるが今日の幸ひと成たり斯
 危きを免れぬるも皆之墨繩が匠の道の奇特ありと曰は實よく此上無き良工哉と主人も手
 打拍て感けり程無く夜も朗々と白み行へ人々立出ん用意爲よ表は數多の人音爲あり何事ぞ
 と見て有ば宵よ來りて百姓共怪の竹輿昇馬二三匹引來て一同は地よ伏て御送れ支度仕り
 ていと申す山人心得ず思ふ主人遠平云ける此一村の者共は大方我一族よ曾祖は時より
 田を分て營せつる者共あれ一人も背く者候はず今日自己御供仕れば渠等もも送りの
 用意爲せて候なり田夫山がつれ邊に車扱もいはねば畏けれ共あをだよ召させ奉らんと云
 様庭よ下て藁鞋突て待居たり姫宮の御悦びは更あり山人も力を得て立上れば松光の勇立て
 姫宮の御手を取て竹輿に乗奉る山人松光の馬に乗る主人の弓矢取て後に立て歩む百姓共の
 妙美謹警衛して歩連たる狀昨日よの事變て勇しき旅れ裝なり實は故郷よ歸らんふ錦着て
 行と云古事も斯やらんと山人の坐は嬉しくて衣匂はず引馬野を急ぎて馬をぞ打せける

○あじろ車

竹芝が母の山人を出立せ遣て後掉丸が許は有けるが墓詣は路遠とて此頃元の家は歸り居
 て山人が歸來ん日を指を折てぞ待暮しける今日も例れ如く山人が爲は蔭膳杯設据て都の事
 を耳思ひ續け居たるに村長嘯して入來りて扱々希有は怪き事を聞つ今程自個守殿よ召さ
 れしよ目代の申されしは都て女一の宮御行方知れず成せ玉ひぬ風の傳ふ聞けは法師の連
 て退參せしとも又武藏の國なる衛士の誘ひ出たり共取々よ申傳へぬ若姫宮の當國へ入せ給
 ぱ留め置參せ密訴へ出よと申されつ奈なる事にて貴紳なき御方の玉の臺としも捨て迷ひ
 出給つらんと云を母武藏の國の衛士と有は心懸よこそ有れ然ぞ我山人あざの左様の畏多無
 き心の餘もつかはじと云は宮も藁屋も間なきの戀と云曲物あり杯打小言て村長の出で歸ぬ
 母の衛士と云文字の胸よ答て思けるの我子山人の容貌勝れし生れなれば若人よ戀られて心
 の外なる事や仕出けん素より心實法なれば容易悪き行の爲じ然ぞ村長が云けん様と戀と云
 曲物こそ割なき物なればあいなき事や仕出けん杯種々と思ひ勞ひつゝ打歎てぞ居たりける
 扱又山人の遠平よ傳かれて日數經て此國よ着けるが人数多して家よ歸らん人目如何なり
 人々の後て來玉へ我の先立て家よ行可とて荒蕪が崎より只一人して歸り來ける折柄兒なる

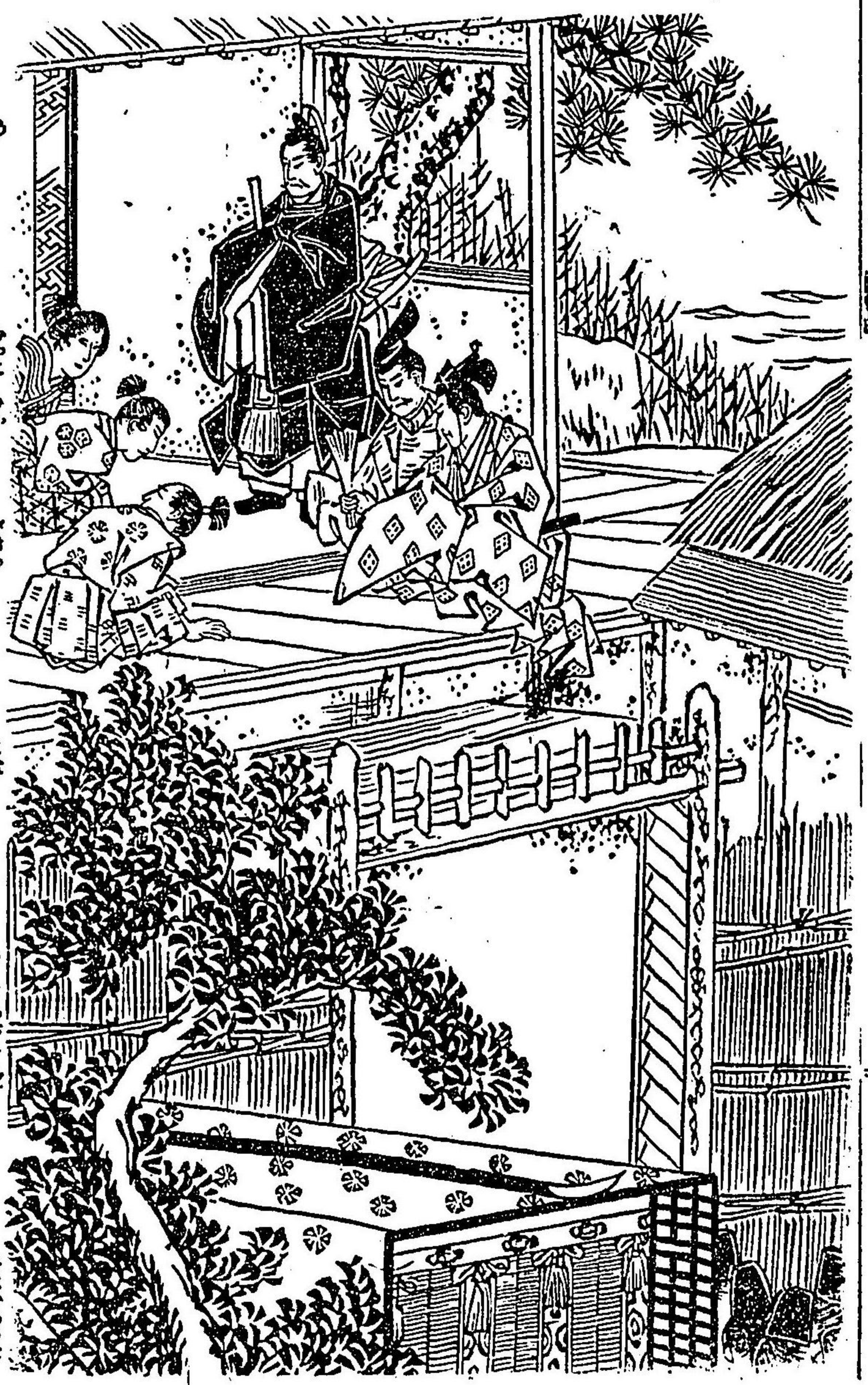
掉丸も來會て悦びて打連て入バ母ハ殊更悦びて恙無く歸り來しや心元なかりしと云て坐
 泣くも儲種々と語ひ交て後山人云けるは打付なる申事乍ハ涉聞受玉る可し好媒の候て
 今宵の中ハ妻を呼び迎んと存て候と云ば母驚て歸來て其儘俄ハ妻を迎へんと子細有る事
 か何處如何なる人の娘ぞと身を摺寄て問バ山人流石ハ頭搔つハ口籠りて詞を出さず掉丸見
 やりて母ハ向て母人ハ御心ハ知候ハねと俄ハ妻定め心得ず容易く受引難しと云バ山人手
 着て此事御聞入玉ずバ媒へ契ひし詞も反古とありて面目を失ひ候ひなん儲ハ生ても世ハ
 在難しと云バ母然斗り思ひ定たらんハ婚姻ハ許す可けれと其嫁と定るハ何處の誰ハ娘ぞ
 と又問ハ山人顔赤めて云出テ掉丸聲を揚て汝が妻と爲んと云るハ忝くも帝の御慈しみ
 深と聞たる女一の宮よてまゑまさんと云バ山人魂消る斗りに成て差俯く掉丸近邊なる箒
 取て健ハ打すゑて云けるハ汝知ずと思ふもや御門の御慈娘を武藏の國なる衛士が奪ひ
 奉り瀬多の橋を斫落し東の方へ逃下りしとの街の風説汝能聞つ汝が申所を聞ハ必ず彼姫宮
 と誘ひ奉りしハ違事あつじ叛逆謀反の輩ハ其罪一族ハ及ぶと聞く我命ハ惜からねと老たる
 母人をさへ殺し奉らんとする人畜生又二ツハ限無き帝王ハ御娘賤しき山賊の身として

畏くも近馴奉りしハ膽太き業なるを奪奉りて下りしとハ言語ハ絶たる大惡人めと怒れ
 る眼ハ涙を浮て罵る詞の端々も孝養ハ心切なるを然兄ハ引換て我乍ら淺間敷けしから
 ぬ行ひし母兄ハ愛目を見せ姫宮をさへ有ぬ身ハはふらかし奉りし遭空怖し勿体なしと思へ
 バ此身を斷々ハ切裂ても猶飽足すと額を曇ハ打着てよハと斗り泣伏ける母も枯たる聲の下
 ハ是も彼も前せ世れ約束事ハ有可けれと世ハ例無き罪人と成て頸切れて死る子を見す
 如何で見て有んや我を先ハ殺せかしと俯たる山人が脊ハ取付身を悶えて泣沈む母の心
 の不便しと胸ハ迫て掉丸も箒を捨地ハ倒れて袖を噛て泣ける恚とだも知ざれば松光
 を先ハ立て竹與を靜ハ昇せて遠平着添奉り坐ハしく勇立て庭前ハ興と下させ姫宮の御手を
 取て簀子ハ誘ひ奉る山人ハ夫と見より汗を五体ハ流て壁ハ向ひ居姫宮ハ靜ハ歩て坐に着給
 を母も掉丸も唯呆て口明て見居たり姫宮ハ會釋し給ひても恥しさに物も曰ず扇翳て在座と
 松光遠平ハ子細を知ねハ高砂のさいさとのと謠ひ口吟て噪母ついで立て姫宮の御手を取庭ハ
 切戸の外ハ突出ハ暴らかハ戸を押立つ姫宮驚かせ給ひて磨ハ山人の妻なるを何ぞ傍無き
 目を見するぞと曰ふを打見やりて縱令御門の姫君も有れ佛神の再來も有れ我子の

爲に悪魔とも鬼とも夜叉とも比ふ可人よの任せず然を奈で我家よ止め參らせん何處へなりと御心の儘疾立て行給へとすくやかよ云て掛金かくるを松光遠平見て思しよの事變りてすさまじき景状哉と爪弾き爲て守り居姫宮戸を打叩らせ給て女の身よて遙なる部の旅路よあくがれて割無ふ苦き憂目見つるも契し人よ世々よかけて添遂なん心ぞや玉敷ける家も何かせん蓬葎お埋りしも戀しき人と侶俱よ住てよそ本意ならめ只爰開て入よかしと打叩て泣玉ふ姫聞て頭打振ていでや夫の皆否理よ社高き低きれ隔こそ有れ女の道よ變のあらじ父母の詞を待す忍びて密男設けて浮々よき振舞して聞悪き名を取たらん遊女借借に劣たるえせ女とこそ云可けれ左様よ心浅果たる人を山人が妻と爲難し疾々歸らせ給と云さして見歸も爲す縁に登ぬ姫宮最御顔を赤かよ倣給ひて道理の然よこそ有れ母御息所よ見ね奉る共左よその諫め日め麻呂も疾より此事幾度か恩返えぬれど心おも任ぬの生憎ある思よなん悪しつら一と思しなばつみひねり給ても山人主の傍避す此家よ在せて給と戸よ錠りて泣玉ふ松光も遠平も姫宮の御心を推慮り參せて可愛しと思ながら至當たる理よ云出べき詞も無く頭傾けてぞ居たりける姫宮御涙を押して此家を差眺き給て正く去年の夏晝寐の夢

よ入來りて物語ひし家よ達す其時見し瓢も恰然彼所に懸て有り如何なれば見し夢とハ事違て現の斯ぞ苦き迎泣玉しが迎も生て都よ歸べき身ならねば爰よて兎も角も成果んと前なる川を見給ふよ氷淺て見えければ死耻見んほうたてかりぬ可し此下つ瀬よ淵や有ん彼處よ行て身を投バやと立上り給しが追よ御心や残けん幾度と無く戸の隙より差除き給ひつゝ借御裾を引掲て川下を指て走り給ぬ山人の兎角よ生て有べき身よ有すとて刀取て死んと爲るを松光遠平絶付て止れば母慌て能こそ止て給つれや山人能聞てよ海を渡り山を越て貴紳無き御方れ遙き東よ下給しんお身ならではと思ひ詰給る難有き御心志にて可愛き忝なごの此姫が身よ取ての聞に奉べき詞だに無し夫を無情押出してすくやかよ振舞し和主が命の助たさぞかし斯斗り思姫が心を十が一も思やらバ生存居て吳よ逆袖を絞ハ掉丸も齒をくひしはり松光の更に遠平さへ目押拭ぞ道理ある松光立て切戸を明見れば姫宮の見ぬさせ給はず奈よ何處よ行給けんと見やる向より村長走り來て思寄す都より御勅使下らせ給り守殿介殿を始め皆御供して此家へ來駕す用意あれと云て引返し往扱ハ山人が仕業なる事顯れて搦て罪させ給あるべし疾爰を逃て往と母の心坐よ成て押出す山人の躊躇て此上よ逃隠て人笑

へなる目を見んより都より引れて頸切れんと云を姫の聞も入らず只管押出さんと爲を角力争ひ



て有折柄表の方より車れ軌る音あて勅使より引添て守介など入來れば人々慌て縁を下地より平代
て禮を做す勅使の静に坐り着玉ふ山人の殊に胸轟きて頭を上す俯伏居り勅使人々を見やり
給て各恙なく下り着たる事嬉ばしさと曰ふを仰ぎ見れば勅使と有る猪名部墨繩なれば
人々驚く事大方ならず如何も子細有めと守り居る墨繩豫て勅使に趣き拜聴せられよ山
人宮を誘ひ奉りし事朝家の御規よて極度刑もも行はる可ければ仙縁の引所誠は宿世の
契なりと墨繩が諫且先頃神人の夢告給しと符節を合て均しければ夢感大方あらずし
て這度姫宮を給りて山人が妻と爲て宿縁空くすべからずと之且山人が容貌才學衆も秀る
事朝家も類を見ず因て當國の守に任せらるるとは倫言と述ければ親子三人の夢も夢見
し心地して御答さへ四途路も爲て只管墨繩は打伏て嬉し涙せき敢ず松光遠平の縁の元よて小
躍しつゝ悦び居り唯何事も猪名部殿の一方ならぬ厚志と皆々手を摩り墨繩又云ける
の自己辞退し奉れど帝は厚く初め木工の頭も任られ月頃の程に昇進して今三
位の中將を給りつ兎に角も能有者を拾給ぬ聖朝の夢時ふしも逢奉れるの不肖の身の幸ひな
りと云時守介聲を揃て山人主の只今より勅使より添奉り姫宮侶俱も都の上玉ひて詔書の傍

請中さる可し姫宮ハ何處ニ在しよと延上りつ、見廻せば人々ハ目を見合せ若死失や爲給
つらんと口よ云ねど取々に又も胸をぞ冷しける墨繩少し打微笑て先の程思ひ寄さやまの
池ハ身を投給し姫宮の汚亡骸人々拜し奉れよと庭下て門ハ立たる汚車ハ榻取除て笏もて
穀を打と見しよ此車 自と軌て縁の端に到て止りぬ扱車ハ汚簾自とさらりと巻上りけれ
ハ姫宮汚顔を出し給て塵が存生たるハ皆墨繩が數々ハ情ハ係る命ぞと曰ひて汚手を合せ給
や添あき何時の間ハ如何よして姫宮とば汚車ハ奉りし事と不審すれハ其由自己語りやさん
と仕丁共ハ中を掻分て立出る人あり見れば勢多にて別しれ船主法師右の手ハひたえの瓢を
携へて鬘子ハ元ハ坐をべれハ掉丸走寄て思よらぬ親人ハ汚歸國と額を着て悦ぶ船主云ける
ハ自己勢多よて人々ハ別れて後猪名部主の許ハ行きて斯々を語つれば姫宮の汚身上甚だ覺
束無し和法師疾く追付給りて見え隠れに汚守護し奉と申されてハハ其儘馳つて汚後を慕ひ
急ぎ下りて參しに先の程姫宮の束を指て走らせ給心得ずと跡ハ付て追つきて參し所さやま
の池ハ到給て汚身を沈給なんと爲馳て抱止め參せて種々拵へ奉る所ハ勅使の通せ給と聞て
傍ハ忍しと墨繩主早く見つけ給て頓ハ汚車ハ奉りて是迄汚供し奉りつ借も敷慮の添なさハ

斯る老法師あへ骨ハ染て難有こそ娘も嬉しかりなんと空を仰てはとくと涙をぞ溢ける實
よ世を捨し人の上よも恩愛の道斗リハ忘れ難きほどなるべし母ハ汚車の轆ハ取付て愚あ
る女の心ハ醋き絆のみ聞え奉りしハ惡ハ姫よと思し給ん宥させ給と聲を揚て頭を轆ハ打付
て手を合て打泣ぬ姫宮汚車より轉出給ひて努然る事ハ曰ひる老人ハ然斗リ愛目を見せ參せ
しハ易からぬ罪ハみん逆手を取て泣給ふ墨繩其汚手を引放て斯る愛度ハ折に臨て事忌ころ
爲給可けれ先ハ山人主と諸共ハ此汚車ハ召せ給あん自己都を出る程手づから作し細代車ハ
婚姻を賀し奉る寸志斗の捧物なり彼の隨帝の隨意車ハ習て夫婦の人を乗奉らハ丑を繫ずし
て此車自と動回りぬ可先ハ汚立有可しと催し立れば國の守介諸共ハ手を着へて汚供ハ人數
少ハ途中の程覺束無やと用意させてハ夫々と呼ハれば郎黨始め數多の百性鳥帽子白丁粧
しく入來て内外狭しと并たり松光遠平掉丸も共に汚供仕らんと汚車ハ前後ハ引添たり船主
法師見嬉びて自己ハいみじき身ハハハ汚送も仕り難し是より此所ハ一字を立て汚佛への
報恩ハ三昧堂ハ籠る可と云ふ實に其詞空うらで後々貴き汚寺と成て竹花寺と呼けるハ此故
由とぞ傳たる扱も此車ハ牛を人も繫ずも曳されど自りら回つし都を指て上りけるハ不思議

と云よも餘あり然ハ墨繩が道よ巧なりし事ハ千載未だ世も語り傳へ云傳て飛彈の匠と稱し呼て宇宙第一の木工なりとの肩負の嬰子迄聞知らぬ者も無かり烏斯て人々の都も上つきて敵慮の忝き次第を奏し聞に奉りければ父帝ハ固より以て母母息所悦び大方あらす姫宮に涉對面有て盡せぬ涉物語をもころ多かりぬ可ければ限有る涉わたりの事ハ得書取可も有ぬば茲ハ泄して云す掉丸松光遠平杯も取々官爵給はりて其功を賞し給ける山人ハ姫宮と諸共東歸り着て後國を治めて民を哀び己を賤くして賢と賞み鯨穿孤獨を扶持一孝子の家ハ自ら至て其門ハ旌を立或ハ門前ハ鼓を置て民の愁ふる所を聞賞を厚し罰と輕して大仁政を行ひければ一國中盗賊なく路行人ハ遺たるを拾はず百姓ハ田を讓て國民父母の如く親み馴て難有き國の守よと愛仰を稱しけり然ハ尋常の守の如く任あくこと云事もあく生る限り爰ハ住てやん事なく榮えける船主法師ハ三味堂ハ籠て不斷念佛怠す務て尊き往生を遂たりける然るも因て此邊の坂を聖坂とハ呼習ハしけるとぞ墨繩ハ都ハ在て其住所は隔つれど山人姫宮と均く齡高く成ぬる迄貌衰へず壯年の時の如もぞ有ける此三人皆百歳近く生延けるが一日天晴たる日紫雲墨繩が家の庭ハ柵引と見えしに蓬萊は

て逢つる魯班仙人顯れ出て月宮造營の涉急あり先とて墨繩が手を取て雲居高くを昇り行ける山人の許も同日ハ數多仙人降下りて山人姫宮を玉ハ興ハ乘又二箇ハ瓢をば玉の筥ハ納て仙樂高やか奏しつゝ天上へこそ昇り行しが其後ハ事ハ知すと世にハ語り傳たるとあん斐陀匠物語大尾

明治十七年十一月八日御届
十二月 出版

定價金四十錢

翻刻出版人 闇花堂

發兌元 同 大 賣 捌
南久寶寺町心齋橋北エ入 元版人 伊丹屋善兵衛
京橋區鎗屋町十四番地 野村銀次郎
人形町通り大時計下 瀧野屋
横山町二丁目 鶴聲社

神田淡路町 巖陽堂
南傳馬町 春陽堂
通四丁目 内藤加我
大傳馬町二丁目 三宅半四郎
小傳馬町 長谷川圓吉
馬喰町二丁目 井上茂兵衛
通三丁目 丸屋鉄次郎
横山町三丁目 辻岡屋文助
芝三丁目 上田屋榮次郎
銀座二丁目 山田福松
米澤町 鈴口福木
馬喰町四丁目 小森惣次郎

越後 横濱吉田町
 横濱 石町
 横濱 辨天通一丁目
 大坂 備後町四丁目
 陸前 仙臺大町

大野屋 橋 富次郎
 万野屋 字 富次郎
 嗟田 峨 幸吉野堂
 池田 屋 幸吉野堂
 岡島 眞七
 木村 文助

地本問屋同盟組合



長谷川町 三丁目
 南傳馬町 三丁目
 一橋通
 通二丁目
 馬喰町 三丁目
 兩國廣小路

武田 平次
 つ江 堂
 松江 堂
 深江 堂
 自深 堂
 大自 堂

出版書目

農務局 下總種畜場事業問答筆記 定價一圓
 御藏版 附錄共全二冊

景清 外傳 洋本 全 同一圓廿錢
 佐宗 五郎義民の譽 同 同四十五錢
 高橋 力十舊猫傳 同 同四十五錢
 村井 長庵大岡仁政錄 同 同四十五錢
 千代 田城樽白波 同 同四十五錢
 霜夜 鐘十時辻笠 同 同四十五錢
 馬琴 小夜中山石言遺響 同 同三十五錢
 著 馬琴 佐野常世物語 同 同四十錢
 斐陀 匠物語 同 同四十錢

馬琴 新累解脫物語 上下定價四十五錢
 怪談 壯丹燈籠 全 同六十錢
 極附 幡隨長兵衛 全 同六十錢
 繪本 銘々水滸傳 同上 同六十錢
 本朝 歴代忠孝鏡 同上 同六十錢
 みすじの種本 同上 同六十錢
 明治 英勇名婦鏡 同 同十五錢
 新撰 英勇名婦鏡 同 同十五錢
 東の 曲清歌種本 同 同十五錢
 新葉 佐賀廻夜櫻 同 同十五錢
 猫奇 談一狐の白菊 同上 同十五錢
 天德 丸白狐の白菊 同上 同十五錢
 眞德 丸白狐の白菊 同上 同十五錢

